
庭付き一戸建てメイド付き

遊紗いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

庭付き一戸建てメイド付き

【Nコード】

N0296H

【作者名】

遊紗いつき

【あらすじ】

高校入学を機に一人暮らしの新生活。春田樹十五歳。彼を待っていたのは庭付き一戸建てと綺麗なメイドさんだった。立場が上なのはどちら！？主従コメディ。

1話 庭付き一戸建てメイド付き

有名デザイナーの母さん——と言っても本当の母親ではなくて、父親の再婚相手なんだけど——が高校入学を機に、俺に新しい部屋を用意してくれた。

父さんと住んでいた前のアパートは俺の通う高校にはちょっと遠いし、丁度契約も切れるところだったからって理由だ。

一人暮らししてのにも理由がある。それは……父さんが今の母さんと結婚したのは俺が小学六年生のときだった。俺の義務教育も終わったことで、父さんが会社を辞めて母さんに着いていくと言いつつ出したのだ。

実際、結婚した当時から父さんは母さんと一緒にいたかったみたいなのだが、小学生だった俺を置いて、母さんに着いて行くのは親として駄目だろうってことで自制したようだ。

中学も卒業に近づいたある日、父さんから母さんに着いていくと聞かされたとき、俺は既に高校入学が決まっていたし、今まで離れてた二人の邪魔をするのもどうかと思って日本に残ることに決めた。一人暮らしをしてみたかった……という理由もあるんだけどね。

そんな訳で、母さんが用意してくれた部屋へやってきた訳だけど……正直、道を間違えたんじゃないかと本気で思った。

俺の目の前にある物件は一人暮らしの人間が住むようなものではなかったからだ。

だって……庭付きの一戸建て、しかも見た感じ新築っぽい。

渡された住所は何度確認してもここだと思う。それに表札は俺の苗字『春田』と書かれている。

とりあえず確認だ。

俺は玄関へと近づいていく。

そして、扉を開くと——

「お帰りなさいませ。これから樹様（きづな）のお世話をさせていただきます。メ

イドのアリサと申します」

三つ指ついてるメイドさんが、いた。

☆☆☆

始まりは中学の卒業の日。

卒業式が終わって家に帰る。家にはなぜか会社で仕事をしているはずの父さんがなにやら忙しく動き回っていた。

「なにしてんの？ 仕事は？」

俺は制服を脱ぎながら問いかけた。

「ああ、仕事は辞めた」

「ふーん……ってオイ！？」

あまりにあっさりと極自然に言うから普通に流してしまいそうになったじゃないか。

とりあえず着替えを中断。動き回る父親を座らせて話を聞く。

「辞めたって……どういうこと？」

「いや、ほら。お前も義務教育が終わったことだし、そろそろ母さんと一緒に過ごしたいと思ってるな！」

母さんは世界的に有名なデザイナーで日夜、世界中を飛び回っている。そんな母さんと平凡な会社員である父さんがどういう経緯で結婚するに至ったのか……それは未だに謎だった。

「再婚したのはいいけど、お前がいたし着いていけなかったからな。これからはずっと一緒にいるつもりなんだ」

そう嬉しそうに話す父さん。

「俺はどうするんだよ？ 高校だって決まってるし、辞退して着いていくのか？」

「ふざけるなっ！」

何が気に入らなかったんだろう……。急に怒鳴るからビックリしたよ。

「わ、わるい。それなんだがな、樹」

「なに？」

「お前、一人暮らしする気はないか？」

つまり……俺はお邪魔虫ってことですか。

母さんとイチヤイチヤしたいがために俺は着いてくるってことね！

「する気はないって言ってもさせるつもりだろ？」

「その通りだ。ということで、これが新しい部屋の地図な」

そう言っ、父さんは一枚の紙切れを差し出してきた。

書いてある住所と地図。

それは、俺が通うことになる高校の近くだった。

「どんなところ？ やっぱワンルームとか？」

「知らん」

「は？」

「だから、知らん。お前が一人暮らしをしたいと伝えたら母さんが用意してくれたんだ。お前のために」

コイツ……母さんになんて伝えたんだ？ 俺は一緒に行きたくな

いとも言ったのか？

「とにかく！ 今日中に引越しの用意をしておけよ。明日には業者が取りに来るからな」

「うおいつ！ 早いよ！」

「俺は一刻も早く母さんのところに行きたいんだ！」

いい大人が駄々っ子みたいなことを言っていた。

それも真剣に。

「はあ……」

額に手を当てて溜息を吐く。

父さんは時計を見てそわそわしている。もしかしたら飛行機の間が迫っているのかもしれない。

「つまり、俺は今日中に引越しの準備をして、明日業者に渡したら、この住所に向かえばいいんだな？」

「そうだ」

「はあ……わかったよ。もういいから行っていいよ。飛行機の間なんだろう？」

「そ、そうか！ 悪いな。向こうに着けばいろいろやってくれる人がいるらしいから」

父さんはそう言って荷物を持って立ち上がる。

「それじゃあ、また会おう。息子よ！」

にこやかに告げて颯爽と家を飛び出していった。

「はいはい、母さんと仲良くな」

俺がそう言ったときには父さんの姿は既に見えなくなっていた。

そんな訳で、俺の一人暮らしが決まったわけだで……。

このときは軽く聞き流していたが『いろいろしてくれる人』ってのがまさかこんな意味だったなんて。

「ア、アリシア……さん？」

外国の方ですか？

そ、そうか！ メイドの本場といえばイギリスだもんな。

あれ？ でもこの人、黒髪だぞ？

「アリサです」

「あ、ああ、アリッサさん」

やっぱり外国の人なんだ……この髪はハーフとかかな。

「ア・リ・サです。私が日本人以外に見えるなんて樹様、頭大丈夫ですか？」

「は、はい……アリサさんですか」

あれ……なんか今、凄い失礼なこと言われなかった？

「はい。これから樹様に仕えるよう言われております」

こんな広い家にメイドさん……ありえないだろ。

なんか、あまりのことに思考が停止してしまった。

「これから宜しく願います」

「あ、はい。こちらこそ」

こうして、俺の新しい生活が始まった。

2話 樹、画策する (1)

高校生活が始まって、早一ヶ月。

一般的に言えば、この時期は、新しい生活にも慣れてくる頃ではないだろうか。

自分の場合はどうだろう……。

学校、慣れた。

新しい環境、慣れた。

メイドとの生活……慣れない。

というか、なんだか毎日磨り減っているような気分だ。精神が。

何言ってるの、メイドさんと暮らせるなんて最高じゃん。とか思うかもしれない。

俺にもそう思ってた時期がありましたよ。

初日の数時間でそんな幻想は打ち砕かれましたけどね！

それは何故か。

メイドのアリサさん。

彼女は俺より一つ年上の一六歳。

腰まで届こうかというほどの長い黒髪を仕事中は後ろで一つに纏めている。所謂ポニーテールというやつだ。身長は女性にしては高く、一七〇センチ近くあり、モデルのようなスタイルをしている。

顔は……確実に美人だと言える。ただ、表情に乏しく、何を考えているか全く読めない。感情さえも。

メイドの仕事をしている為、高校へは行っていないが、頭も凄く良いようだ。

仕事も完璧にこなしている。

なんだ、やっぱり最高の環境じゃないかと思った人もいるんじゃないかと思う。だが、それは間違いだ。

何が問題なのかと言うと……それは彼女の性格にあった。

第一に、俺と彼女は主人とメイドという立場なわけだ。だけどアリサさんは俺を敬うどころか見下し、馬鹿にしている節がある。

例えば……あれはまだ学校が始まったばかりの頃だ。俺は自分の部屋で課題をやっていた。そのとき、どうしても分からない問題があった。どれだけ考えても一向に分かる気配は無かった。

誰かに聞こうにも、まだ誰とも電話番号もメールアドレスも交換してなかったから聞けない。

……べ、べつに友達がいらないわけじゃないぞ！？　ただ、学校始まったばかりだし、まだ、そう、まだなんだ！　まだいないだけなんだ！

だから、俺はアリサさんに教えてもらおうと思ったんだ。部屋を出て、キッチンで夕飯の支度をしていたアリサさんに分からない問題を見せる。

「……………ふっ」

鼻で笑われた——っ！？

笑われたといっても表情は変わってない。

が、なんか逆にそれが傷つく。

「あ、あの……アリサさん？」

なんで笑われたんだ？　そう思いながら声をかける。

「これが、わからないんですか？」

「は、はい。なので教えてもらえると助かるんですけど」

「……………」

課題の問題と俺を今後に見るアリサさん。

そして、溜息をひとつ吐き、

「これ、中学生でも解ける問題ですよ？」

「かはっ！？」

その言葉が鋭く胸に突き刺さる。

分かってた……分かってたさ！　授業なんてまだロクに始まってないし、そんな中で出される課題なんて大半が中学の復習だってこ

とは分かった。

でも……それを実際指摘されるとツライ。

「樹様は高校生ですよね」

「は、はい」

「ちゃんと入試に合格して入学されたわけですよね？」

「そ、そうです」

「で、こちらの問題は中学生レベルなのですが……」

右手の上に広げた問題を左手で叩くアリサさん。

「す、すいません。正直勉強サボってました。入試もギリギリでしたあー!!」

俺は謝った。

なぜか、謝らなければいけない雰囲気だったわけで……。

「はあ……仕方ないですね」

と、アリサさんは再び溜息。

「え……教えてくれるんですか？」

「ええ、勿論です。中学生にも劣る愚主人様を一人前に教育するのもメイドである私の勤めです」

「ぐ、愚主人……？」

中学生にも劣るって……果てしなく馬鹿にしないですか？
確かに中学生レベルの問題で躓いてますけども。

「まあ、見た目は中学生みたいですけれど」

カチーンときた。

その言葉……それだけは許せない。

「そ、そそそれは……俺がチビだとも？」
言葉が震える。

「ええ、まあ。それに顔も」

「童顔だともっ!？」

「はい」

ハッキリと返事をするアリサさん。

「ふおおおお。ふおおおおお!」

「樹様？」

昔からそうだ。

中学時代は小学生のようだと言われ。近所のおばさんには「いっくん（樹）はいつ見ても小っちゃくて可愛いわねえ」とか言われ！「お、俺だって、俺だってこれからだし！これから大きくなるんだし！ 将来は一八〇センチになってジーンズにシャツだけってのが似合う男になるんだし！」

ダンダン床を踏み鳴らす俺。

「樹様、理想を高く持つのは立派ですが、それはあまりに無謀です」「む、無謀じゃない！ 無謀じゃないよ！」
なんてことを言うんだこの人は。

「樹様」

「うるさいうるさいうるさい！！」

「落ち着いてください」

「うる——ばふうっ!？」

頬に衝撃。

「落ち着きましたか？」

何事も無かったかのように無表情に尋ねてくるアリサさん。

「い、今……今、ばちこーんて」

頬を押さえてアリサさんを見つめる。

「はい。うるさかったので殴りました」

「な、殴った!？ メイドなのに!？」

「愛のムチです」

「愛!？ いやいや、愛はない……愛はなかったよ」

「そうですね。愛はなかったです」

「ええっ!？」

それは愛のムチじゃないですよね。

と、まあそんな感じた。

どうだ？ 馬鹿にされているだろう？

メイドは主人に仕えるもの。

だけど、この家に於いてメイドは主人より立場が上のようだ。

そして、この関係は一ヶ月経った今でも続いている。

それは俺の精神が耐えられない状況になるのには十分な時間だ。
だから俺は考えたんだ。

この生活を終わらせる為の手段を……。

2話 (2)

戦うには相手のことを知らなければいけない。

よく知らない相手に勝つことは難しいからだ。その相手がウチで働いているアリサさんなら尚更だ。

戦う……と言っても、言葉通り殴りあったりするわけもない。俺は男でアリサさんは女だしね。

俺はアリサさんとの生活が無理だと思っている。つまり、この場合の闘いとは、この生活を終わらせること。

なんだけど……どうすればいいのか、思いついた選択肢はところ
四つあった。

一つ目は、強引に追い出す。

二つ目は、嫌がらせとか迷惑かけるとかしてアリサさんに自分の意思で出て行ってもらう。

三つ目は俺が出て行く。

四つ目は……このまま。このまま我慢して卒業まで過ごす。

とりあえずこんなところだ。

まず四つ目の手段は有り得ない。有り得ないからこんなことを考えているんだ。

三つ目……これは最後の手段だろう。それに出て行くって言うたって、その先、生きていく手段が俺にはない。

だから今、考えられるのは一つ目か二つ目。追い出すか、出て行ってもらうか、だ。違いは無いように思えるかもしれないが、これが全然違う。

ニュアンスで分かってもらえないかなあニュアンスで。

追い出すってのは「一緒に住めない、無理」とか「出て行け」とかアリサさんに直接言っただけから追い出す……みたいな？ でも俺にそんなこと言う勇氣もなく……ってことは最初から俺が選べる選択肢は一つしかなかったわけか。

アリサさんに自分の意思で出て行ってもらおう。それしかない。
その為に相手を知ることが必要だと考えた俺は、今日一日アリサさんの行動を観察することにした。

俺はアリサさんの用意してくれた朝食を食べながら考えていた。
俺は向かい側に座って朝食を食べているアリサさんを見る。

観察って言ってもな……この人、俺の前で弱みを見せるような人じゃないよな。

それなら……

「アリサさん。あのさ……」

朝食を食べ終えた俺はアリサさんに話しかけた。

「何でしょう？」

「俺、今日出掛けるから」

「……………」

俺がそう言うと、アリサさんは無言で俺を見つめていた。

「樹様……………」

「え、なに？」

真剣な表情で名前を呼ばれ、少し緊張してしまった。

「ご友人が……………いらっしゃったのですか？」

ええ—————っ!?

そこ!?! そこに引っかけたのっ!?!

「そ、それは……………あまりにも失礼な言葉じゃないっすかね」

「では、いらっしゃると？」

「……………いないけど」

「なんですか? 聞こえませんが」

「いないよ! 友達……………なんて」

うっ……………涙が出てきた。

なんだろう……………この悲しい気持ち。

「まあ、それは知っています」

「じゃあ執拗に聞くのやめて!?!」

「それで……お一人でどちらに行かれるのでしょうか？」

き、聞いてねえ……しかも『お一人』って強調して言いやがった。

「う、うう……どこでもいいだろっ!? うわぁ——ん!!」

俺は悲しい気持ち全開で家を飛び出した。

泣いてない……泣いてなんかならないからなっ!

「く、くっくっく……必ず、必ず弱みを握ってやる!」

家の傍の電柱に隠れ、中の様子を窺う。

今日はこうして一日、アリサさんの行動を監視……もとい観察して弱点的な何かを見つけてやろうという訳だ。

アリサさんは掃除機を引きずって家中を移動している。

「掃除の次は……洗濯か」

テキパキと家事をこなしていくアリサさん。

当たり前だけど、俺がいないところでちゃんと色んなことをしてくれてたんだな……。

これを見ただけで有能な人だと分かるけど……この人に弱点なんてあるのかな?

「一日中仕事してるなんて有り得ないし……家事が終わってからが勝負だな」

家事が終わって俺も居ない、家に一人きりとなればアリサさんだって気がゆるむはずだ。気がゆるめば何かが起こる可能性もある。

それを見逃さないようにしないとな。

「うおっ!」

慌てて電柱に顔を隠す。

アリサさんが此方を見たからだ。

……勘も良いらしい。

これは、俺も気合入れないとな。バレたら最悪だ。

きつとバレたら、またひどいと言われるんだろうなあ。

なんであの人はああも口が悪いんだろう……それさえなきや仕事の出来る良いメイドさんだと思うんだけど。

こっちを見てないことを祈りつつ、そおくと電柱から顔を出す。幸いアリサさんは此方を見ていなかった。

仕事も終わったのか、アリサさんは自分の部屋の方へと移動していく。

俺の部屋は二階、アリサさんの部屋は一階にある。が、アリサさんの部屋はカーテンが閉まっていて外からは中の様子を窺えない。

俺はアリサさんの部屋がどんな風なのか全く知らない。一度見てみようかと思ったこともあるけど……アリサさんに「別に見ても構いませんが、その後どうなっても知りませんけど宜しいですか?」と言われ、怖くて確認できずにいる。

アリサさんの部屋ってどんなのだろう?

「……もしかして凄く女の子らしいとか。逆にだらしないとか?」考えたが……どちらも違う気がする。

一度見てみたいよな。でもアリサさんのことだ、ドアノブに触れた瞬間『ビリビリッ!』ってなったり……普通にありそうだ。

「……………動きがなくなったな」

部屋の中の状況が分からない。確認する術もない。

用意しておいた双眼鏡でアリサさんの部屋の窓を覗くが、カーテンの隙間は一ミリたりともない。完璧だった。

「何とか部屋を覗く手はないもんか……」

動きもなく、暇すぎて、段々考えることが犯罪の域に達してきた気がする。ストーカーの心境かもしれない。

その後、昼過ぎまでこう着状態。

やっと出てきたアリサさんは昼食を摂っている。

下手したら部屋を覗かない限り一人の状態でも隙は見せないかもしれないな。

俺も買ってあったアンパンをかじる。

勿論飲み物は牛乳だ。張り込みには欠かせないだろ、この組み合わせは。

「おっ、やっと動くか」

昼食を済ませたアリサさんが立ち上がり、家から出てきた。
俺は残りのアンパンを口に押し込み、牛乳で流し込む。
さあ、追跡開始だ。

2話 (3)

家を出たアリサさんがやってきたのは近くの大手スーパー……を通り越し、さらに十分ほど歩いた所にある商店街だった。

この商店街は八百屋、肉屋、魚屋などの食材屋から本屋、おもちゃ屋、雑貨屋、服屋、ゲームセンターなどまで幅広いお店が立ち並んでいる。

アリサさんがわざわざここまで来たということは、スーパーよりも安く食材などを仕入れられるのかもしれない。

「なんだなんだっ!？」

「ども、すいません」

「何よ、アンタ？」

「ホント申し訳ないっす」

この商店街、隠れる場所が限りなく少ない。なのでバレないようにアリサさんの後をつけるには、どうしても立ち並ぶ店の中にお邪魔しなければ苦しい。勿論、見失わないように入り口付近に隠れてアリサさんを見ていなければならぬ。そんな俺は店の人には迷惑且つ限りなく怪しく映っていることだろう。

通報とか……されないよな？

ちよつと心配になってきた。

怪訝な視線をくれる店員さんに愛想笑いを見せる。その間にアリサさんは八百屋の品を手にとって確認し始めた。

遠目からだとよく確認できないが……おそらくキャベツ、らしきものを持って店のおじさんと親しげに話すアリサさん。

「……なに、あの笑顔」

そんなアリサさんを見た俺の感想はその一言だった。ものつつすごく良い笑顔が顔面に張り付いている。いつもはほとんど表情の変化は見せないが、元々が美人のアリサさんである。そんな笑顔をしたら話している八百屋のおじさんなんかデレッデレ

になっちゃまっている。

だけど俺には分かる。あの笑顔が紛い物だということが。

というか、あんな顔が出来たら普段から俺の前でもそうしてて欲しい。そう思って、その様を想像してみる。

……………。

「……………ずっ……………」

鼻を吸る。

泣いてない！ あの笑顔で、いつものような主を主とも思っていないような罵倒を浴びせられる様を想像して、ちょっとだけ傷ついてしまっただけだ。

自分の想像力の豊かさがこれほどまで憎らしいと思ったことは、かつてない。

いくつかの野菜を買うアリサさん。店のおじさんがアリサさんに渡した袋に商品棚から別の野菜を追加する。

「なるほど。このための笑顔か」

所謂おまけってやつだ。

品物を受け取ったアリサさんは会計を済ませ、別の店に移動する。会話も聞いてみたいな。

危険だけど、もっと近づくか。

俺は細心の注意を払いアリサさんとの距離を少しずつ縮めていく。次にアリサさんが立ち止まったのは魚屋の前。

「お、アリサちゃん。今日も綺麗だね〜！」

すぐさま店主らしきオッサンが声をかける。

よし、ここならバッチリ会話も聞き取れるぞ。俺は物陰に隠れ、二人のやりとりを観察する。

「ありがとうございます。今日は何かありますか？」

笑顔で答えるアリサさん。

「今日は良いイサキが入ったんだよ！ 大物。新鮮だよ！」
言って持ち上げる魚屋さん。

確かに大物だ。多分四〇センチを超えている。

「イサキ……ですか」

「おうよ！ 白子も最高に美味いぞ！」

「そうですね。じゃあそれを貰えますか？」

「毎度！ おっちゃん、アリサちゃんのファンだから新鮮なイカもおまけしちゃうよ！」

「ありがとうございます。素敵ですよ」

「いやあ……照れちゃうね」

照れる魚屋から商品を受け取るアリサさん。

……………。

……………誰、あれ？

ほんとにアリサさん？

普段とは性格の違いすぎるアリサさんに愕然とする。性格が違うというか、これはもう別の人間と言っても差し支えないと思う。

寧ろこつちが本来の性格であればどれほど良いか……。

俺の前では仕事だし厳しくしようとするあまりあんな態度に……ないないない。うん、それはない。

そんな事を思っで全力で首を振った。

その間に、アリサさんは買い物を終えていた。家に帰るために引き返してくる。

ヤバイ……隠れなきゃっ！

俺が一番近くにあった店の中に入った。

「うげ……………っ！」

キラキラと眩い照明に彩られた店内。ごちゃごちゃと乱雑に並べられた商品。壁にも大量の商品が掛けられている。

ハッキリ言って、普通に生活していたらまず見ることがない物ばかりだ。特に高校生である俺には。

つまりここは……大人のおもちゃとかが売ってる店なのである。俺でも知っているような物から、何に使うのか全く分からないものまである。

そういう店だと完全に理解すると……そんな場所にいる自分が恥

ずかしくなってくる。

「うわぁ……………!!」

慌てて店の外に出る。

多分、今俺の顔は滅茶苦茶赤くなってるんじゃないだろうか。

「あっ……………」

外に出た俺の目の前に……………アリサさんがいた。

丁度通りかかったタイミングで出てきてしまったらしい。

「……………」

俺と、俺の後ろにある店を交互に見るアリサさん。

「……………樹様」

先ほどまでの笑顔はどこへやら。いつも通りの無表情。

最悪だ。最悪のタイミングでバレてしまった。

アリサさんの突き刺すような冷ややかな視線が俺を貫く。

「そういったものに興味があるのは分かりますが——」

「うわぁ〜ん! 何も言うなぁぁぁっ!!」

俺は全速力でその場から走り去った。

アリサさんは、きっと俺が自分からあの店に入ったと思ってる。

しかも、あの店がどういった物売っているかも絶対に理解している。

当分、アリサさんの目をまともに見れる気がしない。

……………恥ずかしくて。

「うう……………もうこうなったら」

絶対に出て行ってもらうしか俺の生きる道はない!

だって恥ずかしいから! 気まづいからっ!!

アリサさんを追い出す、もとい出て行ってもらう。この作戦を成功させることを、俺は全速力で走りながら今まで以上に強く誓った。

2話 (4)

エログッズ店から出てきたところを運悪くアリサさんに見つかってしまった俺はその場から全力で逃げた。

そして、そのまま家に帰った俺は部屋に閉じこもった。

部屋の扉は嚴重に鍵をかけてある。

アリサさんと住むことになってしまったその日に自分で買ってきた取り付けた(三個)。

これで多分……アリサさんが入ってくることは有り得ないはず。

「はぁ……最悪だ」

ベッドにうつ伏せに倒れ、枕に顔を埋めていると、あの場面を思い出してしまった。無意識に盛大な溜息が出てきてしまう。

あれは最悪だった……本当に落ち込む。

「あゝあ……死にたい」

恥ずかしすぎる。

学校から帰ったらエロ本が机の上に置いてあるなんてレベルじゃない。だって母親でも身内でもなんでもない、美人で年頃の女の子に見られたんだから。

しかも、その人が一緒に住んでる他人なんだから性質が悪い。

何の関係も無い、通りすがりの人だったら……見られた瞬間は恥ずかしいかもしれないけど、ここまで引きずることなんてないはずだ。

本当にもう……何がなんでも、どんな手を使ってでもアリサさんを追い出すしか、俺の心に平穏が訪れることはない。

「……やる……やってやるぞ」

それしかない。

俺は覚悟を決めた。

決心が揺らがないうちに、俺は部屋を出た。

行く先はアリサさんの部屋。

制限時間はアリサさんが帰ってくるまで。

恐らく時間はあまりない。その短時間の中でなんとか弱みを見つければ……。

「……………」

アリサさんの部屋の前、ドアノブに手が触れるか触れないかのところで一度止まる。

「……ビリビリとか……こないよな？」

やはりそれが気になる。

部屋を見られたくなくて罨を仕掛けるなんて漫画じゃ良く見かける光景だ。

さすがに現実でそんなことはないだろうが……相手は、あのアリサさんだ。油断は出来ない。

恐る恐るノブに触れてみる。

「……………！」

触れた瞬間、目を瞑る。

……俺、滅茶苦茶ビビってます。

だが、暫くそのまま停止していても、思っていたような衝撃がやってくることはなかった。

安心した。

安心したが……なんだか拍子抜けだ。

アリサさんの部屋だし、ビリビりは無いにしても、何かしらの罨が仕掛けてあってもおかしくないんだけど。

「ははっ、漫画じゃあるまいし、考えすぎだよな」

俺は笑いながらノブを回す。

ガコッ——という音と一瞬の浮遊感。

そして……

「う……うわああああっ!!」
落下。

幸い大した深さではなかった。いきなりのことで受身も取れずお

尻と背中をぶつけてしまったが怪我は無い。

見上げると……床がなかった。

罨だ。

やっぱり罨があつたんだ。

ドアノブを回したことで床が開いて落ちる仕組みになってたんだ。
くそっ！ やっぱり油断しちゃいけなかったんだ。

つか、いつの間にこんな大掛かりな罨を作ったんだ？

ま、まあいい。考えるのは後だ。

まずはここから出ないと……

「ん……っ……あれ？」

届かない。

ジャンプしてもギリギリで届かない。

あと……あとほんの数センチなのに。

「えいっ！ そりゃ！ くそ……やっぱ無理か」

何度やっても届きそうにない。

さらに周りを見ても足がかけられそうな場所もなかった。

さて……どうしようか。

俺は上、開いている床を見ながら考えていた。

そのとき、

「……………」

その開いている先からアリサさんが此方を覗き込んでいた。

感情も何も感じられない瞳で。

「……あの……アリサさん？」

「樹様、何をしているのですでしょうか？」

アンタの作った罨に嵌まってんだよ！

とは、さすがに言えない。

「あのですね……実は……」

必死に言い訳を考える。

たまたまノブに触れちゃったとか……苦しいか。歩いてて偶然ノブにぶつかってしまったても回すようなことにはならないだろうし。

「いや……あはは……なんか落ちちゃって」

結局、言い訳にもならないことを言ってしまった。

表情の全く変わらないアリサさんに渴いた笑みを向ける。

「はあ……そうですか」

あれ？ 何か……分かってもらえたっぽい？

「それで……外から監視したり後をつけてまわったり、挙げ句部屋に侵入しようとして落ちた訳ですね」

全部バレてる……っ！？

あ、じゃあアダルティーな店にいた理由も分かってるのか？ よかった……って、ホッとしてる場合じゃないぞ！？

「天罰……ですよ」

ニヤ……と口の端を吊り上げるアリサさん。

怖い。とてつもなく。

口以外の表情に変化がないのがまた恐ろしい。

「あ、いや……それは悪いと思ってるんですよ？ 本当に」

我ながら情け無い。

本当に立場が逆だ。

でも、まずはここから出ることが先決だ。

「それですね。ここから出るのを手伝って貰えないかと。自分一人じゃ無理そうなんですよ」

完全に下からの物言いだった。立場的にも物理的にも。

「それはそうでしょう。樹様では出られないギリギリの高さに調節してありますから」

それってつまり……俺が落ちることを想定していたわけですか？

「ちなみに……私なら一人でも出れます」

「なっ……！？」

それは、まさか……

「ご主人様では無理ですが……。ご主人様では」

こ、こんなときだけご主人様だと！？

「そ、それは俺がアリサさんより背が低いと言いたい訳ですか？」

「ええ、まあ。実際そうですし」

「ば、馬鹿にするな！ メイドの癖に！！」

「馬鹿になどしていませんが？」

俺が怒鳴るとアリサさんはそう言った。

自分が俺に仕えるメイドだと思い出してくれたのかもしれない。

「ただ事実をそのまま口にただけです」

そんなことはなかった。

「うがぁ——っ！！ メ、メイドなら主人を敬えよ！」

そうしてくれたら追い出すなんて考えないのに。

「敬う？」

顎に人差し指を当て首をちょこんと傾げるアリサさん。

う……その仕草がちよっと可愛いとか思っていないからな！？

「ふふ、樹様は面白いですね。言うことが」

「ど、どういう意味！？」

分からないけど馬鹿にされてると思う。確実に。

「そうですね。敬って欲しいならそういう人間になってください」

それは敬う要素が何一つない人間だと思ってるということなのか？

「とりあえず、ストーカーじみたことをするご主人様を敬うなんてとても出来ないです」

「こっちだってアリサさんみたいな態度でかくて口の悪い人をメイドなんて思えないから！」

この際だ。言いたいことを全部言ってやる。

「いつもいつも俺のこと馬鹿にしてさ！ 無表情で何考えてるか分かんないし……家事とかは出来るかもしれないけどさ、これなら一人暮らしの方がよっぽどマシだよ！ 俺はアリサさんと生活するのは無理だ！ この一月で限界だよ！ 無理、ホント無理！」

はぁはぁ、はぁ……言いたいこと言い切ったら息が切れた。

呼吸が整ったところで見上げる。

アリサさんはやはり表情を変えないまま俺を見下ろしていた。

「……そうですか」

暫く無言で見つめあった後、アリサさんは一言だけ呟いた。
そのままどこかへ行ってしまう。

あれ……なんか傷付けた？

傷ついたって、アリサさんが？ 有り得ない……よな？
……………。

「……って！ アリサさん！？ 俺どうすれば!？」

どうやってここから出ればいいの!？

「謝るから……戻ってきて、アリサさ——んっ!!」
俺は穴の中で力の限り叫ぶのだった。

3話 追い出し作戦

結局、廊下に設置された罠の穴から出られたのは一晩経ってからだった。出られたと言っても勿論自力で出られるはずもなく、情けなくアリサさんに謝り続けた結果だった。

最後の方は若干泣き入ってたのは秘密だ。

まあ、そんなこんなで一晩振りに脱出できた訳だけど……その後、部屋で眠りについた。

起きたのは昼というより夕方に近い時間だった。

折角のGWの一日を寝て過ごしてしまったと、何ともいえない虚無感に包まれる。

頬を叩き、頭を振って気持ちを切り替える。

昨日は罠に嵌まったばかりか、後をつけていたことも全てバレてしまっていた。それはつまり弱点など見つけれなかったということ。作戦は失敗に終わったってことだ。

だったら新たな作戦を立てなければいけない。弱点が分からないなら分からないなりにやりようがあるはずだ。

……ある、よな？ きつと。

それから晩飯までの間、ずっといい案はないものかと考えていた。考えてはいたのだが……やはり簡単に思いつくはずもなく。

「あの……アリサさん」

「なんでしょう？」

「アリサさんには、その……苦手なものとかないんですか？」

晩ご飯を食べながらアリサさんに直球で尋ねてみた。

考えてもどうしようもないと理解した俺の苦肉の策とも呼べない策だった。

もう本人の口から聞く以外に弱点を知る術なんてなかった。

「そうですね……特にないと言えばなにのですが。強いて言えば」

絶対に教えてくれないと思っていたが、そんな予想とは裏腹にアリサさんはあっさりと話し始めた。

「強いて言えば？　し、強いて言えば何!？」

「……………」

アリサさんは無言で俺を見つめてきた。

なんなんだろう……。

「樹様の教育……でしょうか。成績下の上、運動神経並、高校生活も一月经ったにも拘らず友達といえる人間無し、さらに白昼堂々婦女子を尾行し倒錯的な快感を得るちよつとアレなご主人様をどう教育していけば良いのか日々悩み困っております」

「……………」

「そんなところでしょか」

それだけ言ってアリサさんは食事に戻る。

……………。

あつ、あまりのことに固まってしまった。

というかアレだよな。これは究極に馬鹿にされてるよな。怒った方がいいのかな。でも怒ったとしてもアリサさんに勝てる気がしない。

なんか無茶苦茶悲しい気分。

食事もう喉を通らない。

「……………ごちそうさま」

俺は半分以上残った晩ご飯をそのままにして部屋へと戻った。

その後、落ち込んでいたらいつのまにかゴールデンウィークは終わってしまっていた。

今日は久しぶりの登校。

教室で自分の席に座る。

周りはそれぞれ仲良しのグループで集まって昨日のテレビやら何やら楽しそうに談笑している。

……まあ、俺の周りには誰も居ないわけだけど。

これがいつも通りだし別に寂しいとか……思っていない。

一人で考える時間はたっぷりあるんだ。学校にいる間に平穏な生活をするための方法を考えよう。

「おはよう、春田！」

頬杖をつき、窓の外を見ていると思いきや思わず声をかけられた。
振り返るとそこには、

「おはよう……えーっと……」

確か同じクラスの奴だ。何度か見たこともある。

「今岡だ」

「ああ、そうそう」

そんな名前だったな、そういえば。

話したのは初めてだ。というか話したことがあるクラスメイトなんてほとんどいないんだけどね。

「それで、なんか用でも？」

俺は今岡に尋ねる。

「ああ、実は……」

今岡は真剣な顔でこちらを見つめてきた。

「お前ん家ってさ、水島公園の所だよな？」

急にそんなことを訊いてきた。

確かにその通りだった。水島公園ってのは家の目の前にある結構大きい公園だ。公園の中心には池があり、さらに池の中心に小さな島があることから、その名前になってるらしい。

でも、何故急にそんなことを？

「……そうだけど」

俺は訝しみつつ一応答える。

「だよなだよなっ！」

今岡はそれを聞いて嬉しそうに俺の肩を叩いてきた。

「そ、それがどうかした？」

「ああ、こっからが大事なところなんだけどよ」

今岡は一呼吸置いて――

「お前ん家、メイドさんいるよな!? それもスツゲエ美人の」
と言った。

「え、え” えつつつ!?”」

な、なんで知って……

「俺ん家、結構近いんだよ。それで何度か見かけてさ、一回話したこともあるぜ。挨拶だけだけど」

そうだったのか……クラスメイトだしな。近くに住んでることもあるよな。

でも……

「べ、別の家じゃないかな?」

やっぱり知られたくないものは知られたくない。

絶対ややこしいことになるに決まってる。

「んな訳ないだろ。春田って表札に書いてあったし、あの辺で他に春田なんて名前の家は無いはずだ」

ちくしょく、最初に普通に答えたのが拙かったか。

「だろ? だからお前の家にはあのメイドさんがいるってことだ!」

「ぐ、うう……」

反論が出来ない。

「な? そうなんだろう?」

「そ、そうだけど……」

それで、コイツはそれを知ってどうする気なんだ?

「やっぱりな! そうだと思ってたぜ!」

事実を確認すると、やはり嬉しそうに俺の肩をバシバシと叩いてきた。

「それで相談なんだが……」

かと思うと次の瞬間には真剣な顔つきで俺の肩に手を回す。

「そ、相談?」

「ああ。あのメイドさん……紹介してくれね!」

「は、はあ……?」

「だから、俺をあのメイドさんに良い感じで紹介してくれって!」
……それはつまりどういうこと?

「衝撃だった。こんな気持ちは初めてだ」

「え、え〜と……今岡はアリサさんに惚れたってこと?」

「アリサさん! アリサさんっていうのか彼女!」

「う、うん」

「そうだ! 俺はアリサさんに惚れた! だから紹介してくれ」

な、なるほど……まあ顔はかなり美人だからな、アリサさん。外面も……っていうか、俺以外には良い性格で対応してるしな。そういうこともあるか。

「そうか。でも、あの人はやめた方がいい」

俺は心からの親切心で忠告した。が、どうやら今岡はそれを勘違いしてくれたらしい……悪い意味で。

「何!? まさか彼女とお前は主従を越えた愛で結ばれているとでもいうのか!?!」

「い、いや、ちが」

「それじゃあ……ま、まさか、主という立場を利用してとても口に出来ないようなことを彼女に……? この極悪人めっ!!」

俺に何も言わずに勝手に話を進めていく今岡。

「くっそお、なんてことだ!」

ああ、ほんとになんてことだよ。お前の頭は。

「決めた! 俺は決めたぞ!!」

「な、なにを?」

「今日、学校が終わったらお前の家に行く!」

「ええっ!? な、なんで!?!」

「この目で事実を確認してやる! そして俺の予想が正しかったら、俺がアリサさんを救うんだ。そして二人の間に芽生えるもの……それは愛!」

やっぱり厄介なことになってしまった。

もう俺は何も言えなかった。言いたくなかった。どうせ何を言っ

てもコイツは来る。だったらさっさとアリサさんの本性を見せてやろうと思っていた。

今岡はチャームが鳴り、担任が来ても延々とアリサさんの未来予想図を語り続けていた。二人の間に男の子と女の子の双子が生まれるとか言ってた辺りまでは聞いてた。

それよりもクラス中からこちらに向けられる視線に耐えるのが恥ずかしくて大変だった。

今日も長い一日になりそうだ。俺は顔を隠して溜息を吐いた。

3話 (2)

放課後、本当に家にまでついてきた今岡。

惚れたと宣言する相手を前に興奮した様子の今岡は休むことなくアリサさんに質問をぶつけていた。

……アリサさんのプライベート的なことは悉くはぐらかされていたけど。

今岡がやってきて帰るまで……まあ、これと言って特に何かあったわけでもなく、強いて言えば今岡の前だからかアリサさんが俺に對しても愛想が良かったことぐらいか。

今まで家に居るときは俺とアリサさんの二人だけなのが当たり前だったので今岡が来ることによって何か変わったり、いつもと違うアリサさんに気付いたりするんじゃないだろうか、という期待もほんの少しだけしていたのだが……やはり期待するだけ無駄だった。

アリサさんは今岡の前で完璧なメイドさんを演じきった。それはもう『これぞメイド!』って感じだった。

そんなアリサさんの様子に「やっぱ羨ましいそコノヤロー」と、しきりに羨ましがって俺をビシバシ叩いてきた……結構手加減なしで。

本人の前でそれを否定しようものなら後でどんな仕打ちをされるかも分からないので、俺は曖昧に笑っておいた。

今岡は一通りアリサさんに質問したり、どうでもいいようなことを話したり、家に来てから一瞬たりともアリサさんの傍から離れようとしなかった。

でも、まあずっと居るわけにもいかない。最後に、名残惜しそうに「じゃあ、また来るから」と言い残し、自分の家へと帰っていった。

そんなこんなで夕飯時。

「……………」

「……………」

今日のメインはビーフシチューだった。

ビーフシチュー、嫌いな人は少ないと思う。勿論、俺も好きだ。それにアリサさんの作る料理は何だってお店で出ても違和感の無いぐらい美味しいものばかりだ。

このシチューだって今まで食べたどんなシチューよりも美味しいんだけど……

「……………」

「……………」

俺もアリサさんも無言で箸……もといスプーンを進める。

いつもならそれなりに会話がある。ほとんど俺が馬鹿にされたりなんだけど……それでも会話が無いよりはいいんだと今、気付いた。二人いて会話が無いというのは、一人で黙々と食べるよりずっと寂しいものなんだね。

「あの……アリサさん？」

俺は食事の手を止めて話しかけた。

「……何ですか？」

「もしかして、怒って……らっしゃいます？」

「いえ、別に……」

「そ、そうですか」

会話終了。

その後も何度か話しかけてみた。一応返事はしてくれるけどあからさまに負のオーラが噴出しているのが分かる。思わず敬語になってしまうぐらいには。

話すのは諦めて食事に戻ろうとスプーンを手にした、そのとき、「別に……怒っているわけでも、不機嫌なわけでもないのですが」初めてアリサさんから話しかけてきた。

「え、そうなのですか？」

どう見ても不機嫌あるいは怒ってるようにしか見えませんが。

「ただ……ちょっと疲れてしまっただけです」

言ってアリサさんは溜息をつく。

アリサさんの本気の溜息は初めて見た、とかどうでもいいことを思ってしまった。今まで俺を馬鹿にする溜息は何度も見たことあったけど……。

少し……ほんの少し心配になってしまった。が、俺は頭を振ってその気持ちを振り払う。

アリサさんは……俺の敵なのだ。安息の日々を得るためには心を鬼にしてアリサさんを追い出さなければならぬのだ。

それにしても……疲れた、か。

「それは……今岡の……」

尋ねてはみたが、それ以外は考えられない。

「ええ……そうです」

頷くアリサさん。

確かに休む間を与えることなく喋り続けてたからな、今岡の奴。

「あの手のタイプの方は、こちらが何を言っても中々諦めてくれませんから」

なるほど。

アリサさんほどの美人なら今までの人生、男に構われたことが無いなんて有り得ない。だから今岡が自分に対して好意を持ってるのも分かってしまったんだろうな。

更に、今の言葉でアリサさんが今岡のことは眼中にないということもハッキリした。哀れ今岡。

「つまりアリサさんは………」

一度言葉を止める。

ここから……ここからが重要だ。

それによって俺の今後の方針が決まる。

「今岡が……苦手？」

訊いて、俺はアリサさんの返事を待つ。

真剣に。

「……………」

アリサさんは少し考えて、

「……少しだけ、ですけど」

そう言った。

確かに、言った。

苦手だと。

「そ、そうなんだ」

「はい……」

素直に頷くアリサさん。

本当にお疲れのご様子だった。

なんせ、俺をからかう余裕が無いほどだからな。

「……そっか」

アリサさんは今岡が苦手。

「……？ 何か嬉しそうですね」

「え！？ いやいや、そ、そそんなことないよ？」

初めて握ったアリサさんの苦手なもの。どうやら知らず知らずのうちに頬が緩んでしまっていたらしい。

……気をつけないと。少しでも油断したら俺の企みなんてすぐにバレてしまうからな。

「そ、それじゃ……今岡は出来るだけ家に来ないようにしないとね」

「はい。お願いします」

本当に、今日のアリサさんは素直な人だった。

翌日の教室。

「おはよう」

俺は休み時間に今岡に声をかけた。

「お、春田。おはよう！ 昨日は楽しかったな！」

今岡は元気に挨拶を返してきた。

「そうか。それは良かった」

「で、アリサさん……俺のこと何か言っただけじゃなかったか？」

今岡はそんなことを訊いてきた。

「……何か？」

俺は意味が分からず訊きかえす。

「ほら、今岡さんってかっこよかったとか、優しそう、とかさ」

「あ、ああ……そういうことか」

なるほどね。自分の評価が気になったわけか。

「……………」

でも残念。

今岡はアリサさんの眼中にない。というか苦手にされてる。

「と、ところで今岡。今日暇か？」

「ん、ああ。暇だけど」

「なら今日も遊びに来るか？ ついでに晩飯も食ってけよ。アリサ

さんの作る料理は美味いぞ」

そう言うのと今岡は目を見開いて俺を凝視する。

「い……いいのか？」

「ああ、勿論だ」

俺ははちきれんばかりの笑顔で頷いた。

「い、行く！ いい行くぞ、絶対に！」

今岡は物凄い勢いで俺の肩をガシツと掴んできた。

「そ、そうか……それじゃそういうことで」

「あ、ああ！ ありがとうな！ 楽しみにしてるぜ！」

今岡は嬉しそうに自分の席へ戻っていった。

3話 (3)

「いやあ、コイツがどうしてもって言うんで来ちゃいました！それにしても、ホント楽しみですよ。アリサさんのご飯」

俺の肩を叩きながら今岡が言う。

学校が終わって、そのまま俺と一緒に帰ってきた今岡は、家に上がるとすぐさまアリサさんに話しかけた。

アリサさんの表情は全く変わらず、いつもの営業スマイルだが、内心嫌がっているんじゃないかと思う。

今岡を家に近づけないようにすると約束した翌日につれてきたわけだから俺を恨んでいるかもしれない。

「でもマズかったですかね？ 呼ばれたとはいえイキナリ来ちゃったりして」

「いえ。樹様がお呼びでしたのですから、歓迎致します。それでは準備が整いましたらお呼び致しますので樹様のお部屋でお待ちください」

「はい！ 邪魔しちゃうるいですもんね。大人しく待ってます」

歓迎する、と言われたのが嬉しかったのか満面の笑みでアリサさんの言葉に頷く今岡。

……アリサさん。上手いこと言って今岡を遠ざけたな。

これで夕飯の支度が整うまでアリサさんの傍を離れなければいけなくなってしまった。ここでアリサさんの意見に反対するのも不自然だし……仕方ないか。

まあ、いい。

今は引き下がって作戦を考えることにしよう。

今夜で決着をつけてやる！

俺はそう決心した。

「へえ、俺の部屋より全然綺麗だな」

俺の部屋に入った今岡の第一声がそれだった。

「そうか？ 普通だと思うけど……」

「うんにゃ、綺麗だぜ。俺の部屋なんか足の踏み場もねーもん」

それはお前の部屋が汚すぎるだけだ。それと比べればどこだって綺麗だろうさ。

今岡は部屋の中を見渡した後、無遠慮にガサゴソと何かを探し出した。

「なに……してるんだ？」

「……っんだよ、エロ本ねえのかよ」

「お前は人の家に来て、まず最初にすることがそれか!？」

なんなんだよ……エロ本探すか普通。

「もしくはアリサさんの盗撮写真とかないの？」

「ねえーよっ!!」

盗撮なんて、そんな恐ろしいこと出来るかよ。

絶対にバレるよ。

「エロ本持っていないとか……ありえない」

愕然とした表情で俺を見る今岡。

そこまで驚くことか……？

まあ、珍しいとは思うけど。

ちなみに、俺はエロ本に興味がないわけではない。むしろ、ある。そして持ってもいた。過去形なのは今は持っていないからだ。

引越してきて、前の家からお気に入りを数冊持ってきていた。

何故捨てたのか……それは、ある日、学校から帰ってくると机の上に並べられていたからだ。

勿論、そんなことをするのはアリサさん以外にはいない。それだけでも恥ずかしいのに、並べられたエロ本は、その傾向毎に整頓されていた。

これは恥ずかしいを通り越して死にくなったものだ。

そんなことがあって……その日のうちに燃やしてしまった。その後は購入していない。

「まあいいや。それにしてもやっぱりアリサさんは美人だなく！」
一通り部屋中を探して、隠してないことを確認したの今岡は床に座ってしみじみと呟いた。

「あっそ」

「あっそってお前……ふざけてんの？」

真剣に、怒ったような顔だった。

「アリサさんみたいな美人に『樹様』とか呼ばれて調子に乗ってんじゃないね？」

「どういうことだよ……っ—か何にそんなにキレてんの？」

「はっ！ まさか……エロ本もないし……そういうことなのか!？」
なにか思いついたらしい今岡。

「そういうことってなんだよ？」

「お、俺にはそんな趣味ないからな!？」

俺から離れ、自分の身体を守るように抱く。

……今の言葉で、大体どんな勘違いをしてるのか理解した。

「俺にもそんな趣味はない!!」

それに、そんな仕草は女の子なら可愛いかもしれないが、お前がしても気色悪いだけだ。

「じゃあなんなんだ？ アリサさんに興味示さないとか、男としてどうなのと俺は問いたい!」

そんな力説されても……

「……そうだな……相性が悪いとしか言いようがない」
うん。ホント相性が悪いんだ。

「あ、ああ、あ相性ってお前……まさか、夜の——」

「違いーよ!？」 普通に、ただ単に!」
何を言い出すんだ、コイツは。

アリサさんと夜の相性って……想像もできないな。

「とにかく! アリサさんとはそんなじゃないから」
俺はもう一度はつきりと告げる。

「でも、興味はあるだろ？」

今岡に訊かれ考える。

興味、か……出会ってすぐ敵認識してたから考えたこともなかったな。

どうなんだろう……美人だとは思うけど。

「一緒に住んでるんだから嬉恥ずかしな事故とかないの？」

「なんだよ、それ……」

「着替え覗いちゃったとか風呂覗いちゃったとか」

「覗いてばかりだな」

「あとは、そうだな……」

今岡は顎に手を当て思考している。

「転んだ拍子に抱きついちゃったり……くう、なんて羨ましいんだこいつめっ!!」

想像して勝手に羨ましがる。

「ないから! 全然!!」

仮に俺がうっかり何かをしてしまったとしてもアリサさんが被害に遭うなんて……思えない。むしろ俺が被害に遭いそうだ。

「はぁ……ったく」

俺は重く溜息をついた。

「お食事の支度が整いました」

それから一時間ほど今岡と話していると部屋がノックされ、アリサさんが現れた。

「あ、はい! 待ってました!」

嬉しそうな今岡。

「おい、早く行こうぜ!!」

呆れ半分にその様子を見ていた俺を急かす。

今岡に腕をつかまれて、俺は部屋を出た。

さあ、ここからが本番だ。

今岡を使ってアリサさんに嫌がらせ——もとい、俺の平穩の為に戦いをしなくちゃならないんだ。

俺は心の中で頬を叩き、気合を入れた。

3話 (4)

「……………」

「……………」

「……………」

空気が重い……。

俺、アリサさん、今岡の三人は黙々と食事を口に運んでいた。

最初の内はそれなりに会話もあった。「美味しいです!」「さすがアリサさん!」とか今岡が一人で喋ってただけだけ。

それに対してアリサさんも嫌がる素振りもみせずに答えてた。

答えてたんだけど……それは本当に答えるだけで、そこから話が続いていかない。

諦めずに話しかける今岡だが、段々と口数が減って、遂に無言。そんな訳で今、この場は、とてつもなく重苦しい空気に包まれている。

俺がこんな空気にしたわけじゃないけど……なんかご飯の味も、

正直言って全然分らないです。

でもアリサさんも同じはずだ。

きっと嫌な気分になってると思う。だとしたら俺の作戦は成功していることになる。

だから、ここは我慢の時だ。

暫くして、俺はあることを思い立った。

俺は今、空気を重いと感じている。それはアリサさんと今岡も同じだろうと思う。

今岡を夕飯に誘ったのはアリサさんに嫌な思いをしてもらおうと思っただけのことだ。

その目的は、ある程度は達成できているはずだ。

でも……今日一日で家を出て行こうと思うまでアリサさんを追い

詰められるとは思えない。

こういうのは積み重ねが物を言うタイプの作戦なんじゃないだろうか？

だとすると、今岡まで気まづくさせてコレっきり家に来ないなんて状況になってしまっただけは元も子もない。

だからせめて、今岡だけには良い思いをしてもらわなければいけないということだ。

「あ、あの……ひいっ——！？」

なんとか会話を行ってみようと声を出してみたが、出した瞬間、こちらに向けられた二人の視線が怖かった。

なんて言うか……アリスさんはいつも以上に感情の読めない、と言うかそんな感じの無気力な瞳をしていた。今岡なんて目に光がない。絶望感が漂っている瞳だった。ちょっと涙ぐんでいたかもしれない。

「……………」

二つの瞳に晒されて、俺には無理だった。

この空気を変えることは……。

そんな重く空気の中、食事は終わり、そのまま今岡は帰ると思っただが、何故かまだいる。

俺の部屋から悲しげな顔で夜空を見上げている。

「……………なあ」

暫くして、今岡が話し出した。

「なに？」

「俺……なんかした？」

「なんかって？」

「いや、それは分かんねえけど……空気、重かったじゃん？」

「ああ、重かったな」

「いつも、あんな感じなのか？」

「いや、いつもはもっと普通——」

俺がそう言うのと今岡は一層悲しげに顔を俯かせる。

「やっぱ俺のせいなのか……」

それは間違いなくそうだと思うけど……言えないよなあ。

「なあ、俺、アリサさんに嫌われちゃったのかな？」

ごめん、最初っから苦手にされてるんだ……って、これこそ言えないな。

「お、落ち込むなって」

俺は励まそうと声をかける。

が、

「もう……いいよ」

今岡の返事は絶望感漂うものだった。

「へ？」

思わずそんな声を出してしまう。

「だから、もういいよ。嫌われちゃったんだよ。はあ」

大きな溜息を吐く今岡。

「げ、元氣出せて！ まだ終わってないよ。ほ、ほら、どっかの神様も言ってたじゃないか『好きと嫌いは変換可能』って！」

俺は必死に今岡を元氣付けた。

「変換……可能？」

「そ、そうだよ。嫌いは好きに変えられるらしいんだ！」

「そ、そうなのか？」

「あ、ああっ！」

お、なんかいい感じ……か？

「そっか……そぶだよな、諦めるのはまだ早いよな……！」

「あ、ああ、そうだよ！」

「よし、やるぞ！ 俺は！」

「そ、その意気だ！」

立ち上がって叫ぶ俺達。

なんか意味不明のテンションだった。

「ありがとな、俺頑張るよ！」

「あ、当たり前だろ。と、友達じゃないか」

「ああ、お前は親友だ!」

肩を組んでくる今岡。

とりあえず機嫌も良くなってきたみたいだ。

なんか軽いノリで親友にまでされてしまったけど……。

それから暫く二人で話して、今岡は帰ることにした。

今、俺とアリサさんで玄関まで見送りに来ている。

「あの……それじゃ……帰ります」

やる気を出したと言っても、やはり気まずいのだろう。先程までの元気がなかった。

「ああ、じゃあね」

「あ、今岡様」

と、アリサさんの方から今岡に声をかけた。

「さ、様っ!?!」

「はい、今岡様は樹様のご友人ですので――」

「や、やめてください! 様なんて、あの、俺……そんなんじゃないんで」

そんなんって……何?

「では、今岡さん」

「は、はひっ!?!」

顔を真っ赤にして緊張している今岡。

自分から話すのは良くても相手からってのは苦手なのか?

「今岡さんが、もしご迷惑でなければ、これから遊びに来て頂けると嬉しいです。樹様が初めて連れて来て下さったご友人ですし」
今岡に初めて満面の笑みを向けてアリサさんが言った。

今岡は、

「は、はい! き、来ます! と、友達ですから!」
嬉しそうだった。

メチャメチャ嬉しそうだった。

「有難う御座います」

「はい！ それじゃ、また来ます！」

「はい、いつでも来てください」

「じゃ、じゃあな！」

「あ、うん」

俺にもそう言って今岡は帰っていった。

「あの……アリサさん？」

今岡が帰ったあと、俺はアリサさんに話しかけた。

「樹様」

こちらを向いたアリサさんは、いつもの無表情に戻っていた。

「な、なんででしょうか？」

「本当に樹様は分かりやすいですね。それに乗せやすいです」

「え、えーっと……どういうことでしょうか？」

突然の言葉に意味が分からず聞き返してしまう。

「分かりやすい？ 乗せやすい？ どういうこと？」

「ああ言えば必ず連れてきてくれると信じてました」

凄く良い笑顔だった。

つまり、それって……

「友人の少ない樹様のための思ってしまったことですが……まさか、これほど上手くいくとは」

「ぜ、全部、計算通りってことか！？」

俺が今岡を連れてくることも、成り行きで親友にまでされてしまったことも……！！

じゃ、じゃあ、アリサさんは今岡のこと、別に苦手でもなんでもなかったと？

勝負は始まる前から俺の負けだったということかっ！？

「う、うっがああああ……！！」

俺は叫んだ。

「樹様……評判の良い精神科の病院をお教えしましょうか？」

「ラリってないよ!?!」

「そうですか。では、お風呂の準備が出来ますのでお入りください」

そう言ってアリスさんは自分の部屋へと歩いていった。

……………。

「うがぁ——っ!!」

俺はもう一度、思いつきり叫んだ。

敗北感を噛み締めながら……………。

4話 一人ぼっちの夏休み

七月も中旬に差し掛かり、もう少しで夏休みという時期。
俺とアリサさんの関係は――――

「あゝ、あつつい。でも、もうすぐ夏休みだあゝ」

「楽しみ……なんですか？」

朝――登校前、横目に占いなんかを見つつ何気なく呟いた言葉に
アリサさんが反応する。

なぜかアリサさんは不思議そうな顔をしていた。

「え……うん。そりゃあ楽しみだけど？」

夏休みなんて、学生にとっては最大の楽しみの一つだろう。

「……そうですか」

「なんでそこで不思議なものを見る目で見るの？」

「いえ……楽しみならばそれで良いです」

「なに？ 気になるから！」

なんなんだよ、いったい。

「言っても……宜しいのですか？」

無表情に言うアリサさん。

「……う……っ！」

気になるけど、なんか聞くの怖えな……。

「きつと遊びに誘われることもないまま、一日中家に引き籠もった
生活を送ることになるだろう友達のない樹様でも、やはり夏休み
は楽しみなもののですか？」

グッサリきた――っ！！

う、うぐぐ……確かに夏休みの迫ったこの時期に全く誘われたり
してないけど……。

「お、俺にだって……予定ぐらい……」

「ないですよ。全く」

「は、はい。ありません」

「それでこそ樹様です」

そう言って凄く良い笑顔を見せるアリサさん。
いつも無表情な癖にこんな時だけ……。

——と、まあ、俺とアリサさんの関係は相変わらずだった。

というか、日が経つにつれ精神的に積み重なっていくからツライ。
これで夏休みは一日中アリサさんのいる家で過ごすなんて……そ
う考えると夏休みも待ち遠しくなくなってくる。

「……………はあ」

教室の自分の席に座ると同時に溜息を吐く。

周りを見ると、皆それぞれ仲良しグループで集まって夏休みの予
定なんかを相談している。

夏休みはずっと部活だ、と嘆いていたり、雑誌を片手に買い物
相談をしたり。

男女数名の仲良しグループに至っては泊まりで海に行こうなんて
相談している。

……俺も是非混ぜてもらいたいものだ。

まあ、無理なんだけどさ……あのグループって挨拶もしたことな
い奴らが大半だし。つーか、あの中の女子で話したことあるのって
一人もいないし。

そもそもクラスの中でも話したことのある女子っていないし。

やめよう……考えると虚しくなる。

「おっはよおー!!」

朝からやたらと元気な声を出して今岡が教室に入ってきた。

その大声にクラスの誰もたいした反応を示さなかった。

入学から夏休み直前までのこの期間で今岡はお調子者の馬鹿野郎
のポジションを確立、その座を不動のものとしていた。

つまり、大声を出すぐらいじゃ誰も反応しない。もしくは『ああ、
また馬鹿が騒いでる』ぐらいの反応しかない。

それでも男女どちらからもそれなりの人気者ではある。

「おいつす春田！」

「おはよう、相変わらず暑苦しいな」

声をかけ肩を組んでくる今岡。

この暑いのにこんなことをされると本当に暑苦しい。

男女問わず人気のある今岡の、今のところ一番の友達と言えるのは多分俺だった。

アリサさんのこともあるし、あの初めての食事会のあとから今岡はよく俺に話しかけてくるようになった。

最初はアリサさん目当てなのが見え見えだったしウザッたいことこの上なかったが、今ではまあ、友達と呼んでもいいかと思えるようになった。

「なっとなっ、今日行ってもいいか!？」

「別にいいけど」

「おっし！これで今日一日ツマラナイ授業も乗り切れるぜ！」

何を言っているかといえば、今日俺ン家に飯を食いに来たいってことだ。

あの食事会のあと、アリサさんの言葉通りちよくちよく家に遊びに来てはそのままご飯を食べていく今岡。少なくとも必ず週に一回はそんな日がある。

結局アリサさんは今岡のこと、苦手でも何でもなかったしな。

でも今岡がいる間は俺への毒舌がなくなるから……それは本当に助かっていると言える。

俺は自分の席へ向かっていく今岡を見送り、最後にもう一度旅行の計画を立てている連中をチラリと見てから授業の準備を始めた。

「ただいま」

一日授業を受け、帰りに今岡とちよっと寄り道して遊んで、帰ってきたのは夕飯には良い時間だった。

「おかえりなさいませ、樹様」

「おっじゃまっしま〜す！」

「今岡さん、いらっしやいませ」

始めの頃はアリサさんとの会話に緊張していた今岡。だが、何度も来るうちにそんなものはどこへやら。今では俺と接する態度とどこも変わらなかった。

「というわけでアリサさん。今日はご飯一人分増えるから」

俺がアリサさんにそう告げると、

「はい。そうだろうと思ひまして、今日は多めに作っています」

家に入った瞬間に良い匂いがしたし、もう夕飯を作り始めているのは思っていた。その上で、さらに一人分追加して欲しいとお願いしたのだけど、アリサさんは今日、今岡が来ることを予想していたみたいだ。

……この人、マジで何者？

普通こんなこと予測できねえよ。

「もうすぐ支度も終わりますので、それまでお待ちください」

「は〜い！ それじゃコイツの部屋で待ってますね！」

言って、今岡は俺の頭をグシグシ撫で回してきた。

俺はその手を乱暴に払いのけ、

「なんだ？ ちっちゃいって馬鹿にしてるのか？」

「いや、丁度良い位置に頭があったから」

今岡は平均よりやや大きいぐらいの身長だ。

それでも俺を見下ろすぐらいの身長差はある。

「やっぱ馬鹿にしてんだろ!？」

「はいはい。いーから部屋行こうぜ」

「おい！ まだ話は終わって——ちよっ、待てよ！」

俺をおいて、俺の部屋へ向かう今岡を追いかけた。

夕飯も終わり、今岡が帰って、俺は風呂上がり牛乳を飲む。

牛乳は毎日朝と夜に一杯ずつは飲むようにしている。勿論、身長を伸ばす為だ。

「……………ん？」

コップを片付け部屋へ戻ろうとリビングを出たところでアリサさんの部屋から光が漏れていることに気がついた。

扉を閉めていれば光がもれることはない。

それはつまり、アリサさんの部屋の扉が開いているということだ。

「……………」

アリサさんはいつも俺の後に風呂に入る。

ということは、そのときに閉め忘れた……………？

「……………」

それって……………今なら覗けるということか？

前に弱点を探ろうとしたとき、罠を張ってまで阻止しようとしたアリサさん。

それってやっぱり見られたくないものがあるってことだよ……………な？

「よし……………見よう」

俺は小声で呟いてアリサさんの部屋に近づいていく。

一步、二歩、三歩……………ノブに手をかけ、

「……………ゴクッ……………」

唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえる。

俺は一度深呼吸して、ドアを開——

シュバツと俺の横を何かが通り過ぎる気配がした。

「……………え？」

俺は横を見る。

何もなかった。

「なんなんだ……………ヒイツ！！」

アリサさんの部屋に向き直った瞬間、目の前にアリサさん。

俺が侵入しようとしたのをどこで察知したのか、アリサさんのメイド服は慌てて着たのが分かるぐらい色んなところがはだけていた。

なんか肩とか見えてて、すげえ色っぽいです。

「な、なにかご用でしょうか、樹様？」

普段俺には見せない笑顔だった。

でも、どこか違う。

なんか迫力がある笑顔だ。

「い、いや、ドアが開いてたから……」

「開いてたから進入しよう？」

「し、閉めようと思っただけっす！」

「本当……ですか？」

「本当です！」

俺はアリサさんの笑顔が怖くて本当のことなんて言えなかった。

「そ、それより、アリサさん」

でも、まだ何もしてないのに怖がられるのもなんか納得いかなかった。

なので、やめとけばいいのに反撃しようと思ってしまった。

「いつも完璧で弱みを見せないアリサさんがそこまで慌てるってことは、部屋には見られたくないものがあるってことですね？」

「え……な、なんのことでしょうか？」

あからさまに狼狽えるアリサさん。

これは……余程のものがあるに違いない。

「……………」

「な、なんですか？」

「おりゃあ————っ!!」

俺はアリサさんをすり抜け、開いているドアの隙間から中を覗こうとした——が、俺のしようとしていることを理解したアリサさんは俺より素早く、

「キャ————ッ！」

部屋の中に入り、ドアを閉める。

俺が隙間だった場所を覗ける位置に移動したときには既にドアは完全に閉まっていた。

「……………」

俺は部屋の中を覗けなかった悔しさよりも、アリサさんのアリサさんらしくない悲鳴が気になってしょうがなかった。

キヤーって、普通の女の子みたいじゃねーか。

その後、アリサさんは部屋から出てくる気配はなかった。

――翌日。

朝、珍しく――というか初めてアリサさんが起こしに来なかった
ので自分で起きた。いつもより相当遅い。朝ごはんを食べる余裕も
ない時間だった。

さらに、リビングに行っても、いつもなら用意してあるはずの朝
食がない。

それどころかアリサさんの気配がなかった。

4話 (2)

今日は一学期最後の日。

あの日からアリサさんは帰ってきていない。

どこに行ったのかは分からない。

アリサさんの部屋には鍵が掛かっている入れないけど、玄関に靴もないし何より俺以外の人間が居る気配がないことから彼女がこの家に居ないことは確認できた。

この状況は俺の望んでいた通りのものだ。

こうなる為に、今までいろいろやってきたわけだから何の問題もない……はずだったんだけど。

「おい春田！ アリサさんはまだ帰ってきてないのか！？」

「今岡か……おはよう」

教室に入ると同時に今岡が勢い良く掴みかかってきた。

「うん、おはよう——じゃなくて！ アリサさんは！？」

律儀に挨拶を返してきた今岡だが、やはりその話に戻ってしまう。まあ、こんなことで誤魔化せるとも思っていないけど。

「帰ってきてないよ」

俺は事実をそのまま伝える。

「な、なんでだよおっつ！」

すがり付いてくる今岡を鬱陶しく思いながら考える。

……なんでかって、そんなこと俺も知らねーよ。

思い当たる事といえば、部屋を覗きそうになったってことだけだけど……そんな程度のことで行くとも思えないんだよね。

でも、それ以外に原因らしいものはないのも事実。

それはつまり、サッパリ分からないってこと。

「俺に訊かれても知らないって」

そんな状況では、そう答えるしかない。

「ううゝ、どこに行ってしまったんだよおアリサさあゝん……」

「うわ……マジ泣きだ」

本気で泣いている今岡を見て若干引いてしまった。

「そりゃ泣きたくもなるさ！　アリサさんに会えないなんて」

そんなにか……。

「とりあえず落ち着け。……なんか凄いい注目されてるから」

夏休みを前にして、楽しい雰囲気にも包まれた教室でいきなり泣き出した今岡に、さすがに視線が集まっていた。

入学以来、こんなに多くの視線に晒されたのは最初のHRの自己紹介以来だった。妙な気分だ。むず痒いというか……。

「お、おちっ、落ち着いてなんかいられるかあゝ」

うわあ……鼻水まで出てるし。

「ほ、本当に落ち着け！　アリサさんが帰ってきたら一番に連絡するから！」

「う、うえ……ひっく……ほ、ほんとに？」

「あ、ああ……」

こんなに本気で泣いてる高校生男子を、俺は初めて見た。

「……………わかった」

今岡は小さくそう言っただけで自分の席へ座り、机に突っ伏した。帰ってきたら……か。

「ただいま」

家に帰ってそう言うが、やはりアリサさんからの返事はない。

今岡にああは言ったものの……アリサさんが何で出て行ったのかも定かではない以上、帰ってくる保証もない。

俺としては、このまま帰ってきてもらわない方が良い。

精神的に攻撃されることもなく一人平穏に過ごすことの、なんと素晴らしいことか。

部屋で着替えを済ませ台所へ向かう。

帰りに買ってきた弁当を温め昼飯にする。

今日は夏休み前、最後の学校ってことでちよつと高めの弁当を買った。一学期を頑張った自分へのご褒美だ。

「……ほんと、静かだよな」

温まるのを待つ間、俺は部屋を見渡して呟いた。

庭付きの一軒家という広さ、そこに居るのは俺一人。

どう考えても家の大きさと住んでる人間の数が合っていない。

いや、アリサさんと二人でも広いんだよな。この家は。……それでも、今まではそんなことを考える余裕もなかった。

「……………」

温まった弁当を口に運ぶ。

アリサさんが居なくなってから、もうずっと弁当だ。

最初は良かった。

けど二日目からは美味しいと思えなくなった。

それに、なんだか身体の調子も悪い気がする。

「やっぱ……アリサさんの作るご飯って美味かったんだな」

多分、栄養とかも色々考えられていたんだろう。

そういえば……ここ最近は野菜を食べた記憶もない。

とはいえ、アリサさんに戻ってきて欲しいかといえば微妙な心境ではあった。

追い出そうと色んなことをして、実際アリサさんは居なくなっただけ、急なこととはいえ、これが俺の望んだことのはず。

だけど、なにか納得いかない、心が晴れない。そんな気持ち。

これはきつと、アリサさんが出て行ってしまった理由が分からないからだ。だから何か心がモヤモヤするんだ。

「うわ……洗濯溜まってんな」

掃除でもしようと風呂場までやってきたら、近くにある洗濯機には溢れんばかりの洗濯物。

「とりあえず洗わないと……えと洗剤は、と。あれ、洗剤どこだ？」
洗濯機の近くには洗剤が見当たらない。

どこにあるんだろう？

「あれゝ、ないのかなあ……」

あとで買いに行くか。

先に風呂の掃除をしまおう。

アリサさんが出て行ってから、面倒でいつもシャワーだけで済ましていたから。今日はお湯を入れてガッツリ入ろう。その為には浴槽を念入りに洗わないとな。

「……………マジか」

風呂場に入る……そこには浴槽用の洗剤がなかった。

シャンプーなどは整理して入れ物に入っている。が、風呂掃除用の洗剤はそこにはなかった。

「えゝ、これも切らしてるのか？」

洗濯、風呂用、それぞれの洗剤を同時に使い切ったのか？

アリサさんのことだし買い置きぐらいあると思うんだけどなあ。

あるとして、どこに置いてあるのかな。

というか、今思ったけど……俺、家のこと何も知らない。

印鑑とかどこにあるんだ？ 通帳は？

全部アリサさんがやってくれたから気にしたことなかったけど、他にも大事なものって沢山あるよな……。

どうしよう……家、全部探すか？

ヤバイ……アリサさんがいないと俺は自分の家のことも分からないじゃないか。

衝撃の事実に呆然と立ち尽くす。

……とりあえず、洗剤を買ってこようか。

うん、大きな問題は後回しにしよう。

俺はそう思い、買い物に出掛けた。

4話 (3)

家の近くのファミレス。

俺はアイスコーヒーを啜り、途方に暮れていた……。

あの後……洗剤を購入し、掃除を終えた俺は家捜しを開始した。自分の家なのに家捜しってのもどうかと思う。思うのだが、こればかりはどうしようもない。

だって俺はこの家のことをほとんど知らないのだから。

最初は案外すぐにみつかるもんだと甘い考えだった。大事なものなんだし、分かりやすい場所に仕舞ってあると。

だが、一時間経ち、二時間が過ぎて……焦りが募りだし、最終的には家中をひっくり返すように探すことになった。

そして印鑑やら通帳やら、大事なものはなんとかみつけたものの……家の中は無残な状態になってしまっていた。

大地震でもきた後のような光景だ。

それでも、最初は何とか片付けてみようかと試みた。

が、何を何処に仕舞えばいいのか分からず、一向に片付かない。

気がつけば外は真っ暗になっていた。

時計を見れば、いつもならとっくにご飯は食べ終わっている時間だった。

俺は一度散らかった部屋を見つめ……やはり、問題を後回しにしてファミレスへ向かったのだった。

「ず……ず……ず……あゝ」

気がつかないうちにコーヒーを飲みきってしまったらしい。空になったグラスをテーブルに置いた丁度そのとき、横から声をかけられた。

「なんか、これでもかってぐらい哀愁漂ってるな」

「哀愁？ 違う。これは絶望だよ」

俺は向かいに腰掛けた今岡の言葉を訂正する。

「……絶望？ つーか、何だよ？ こんな時間に呼び出して
そうなのだ。」

俺はここに来る途中で今岡に電話して呼び出していたのだ。

「あゝ……なんて言うかさ」

「もしかしてアリサさんが帰ってきたとか……ってのは無いよな。
その顔じゃ……」

もしそうだったとしたら、別の意味でこんな顔になってるかも
しないけどな……とは、さすがに今岡には言えない。

「実はさ――」

俺は今日の出来事を今岡に語って聞かせた。

それを聞いた今岡の反応は、

「お前……そんなんでよく一人暮らししうなんて思ったな」

果てしなく呆れ顔だった。

いやまあ、その反応も分かるよ。自分で散らかして片付けられな
くなったなんて……。

「でもさ……今回は仕方なかったんだよ」

そうでもしなきゃ大切なものは見つけれなかったし。

「じゃあお前、それがなかったらキレイに生活出来てた？」

「それは……わからないけど」

前の家もそんなに綺麗じゃなかったし、自信はあんまりない。

「そもそもさ、なんでアリサさんはお前んちに住んでんだ？」

と、今岡が訊いてきた。

そういえば……ちゃんと話したことなかったっけ。

「それは……」

「それは？」

俺は父さんと別れてアリサさんに会えるまでのことを話した。

「へえ。てことは、お前もアリサさんがお前に仕える詳しい事情
は知らない？」

「ああ、母さんに頼まれたってことぐらいか」
今岡に話してて分かったことがある。

いや、分かってはいたことだけど、口にすることで改めて気がついたというか。

……四ヶ月も一緒に暮らしてたのに、俺はアリサさんのことを何も知らない。

名前と年齢……それと裏表のある性格。

それぐらいしか知らないのだった。

「なんだよ、それ。それってホントにただの他人みたいじゃねーか。もつとこう、なんつーかもつと前からの付き合いかと思ってたぜ」
そんな今岡の言葉に疑問を感じる。

「……なんでそう思ったんだ？」

俺は感じた疑問をそのままぶつけてみた。

「なんでって……そりゃあ、お前のこと心配したり――」

「ち、ちよっと待って！ 心配って……アリサさんが？」

何を言ってるんだコイツは。

「へ？ ああ、お前が学校でどうしてるかとか良く訊かれたぜ？」

「そ、そうなのか？」

「ああ、お前のこと宜しくって頼まれたし」

「そんなこと頼まれたたのか！？」

初耳だぞ。

「あれは確か……二度目にお前んちに行ったときだな。お前が知り合いのいない土地で独りになるのが心配だからって」

「そ、それで……いつも俺に話しかけてきてたのか？」

「まあ最初はな。お前と仲良くなればアリサさんにも近づけるし」

「……そ、そうなのか」

「ま、今では普通に友達だと思ってるけどな」

そんなことを当然とばかりに恥ずかしげもなく言う今岡。

「……………」

「何、赤くなってるんだよキメェな」

「キ、キメエとか言うなよ！ お前が恥ずかしいセリフ言うからだろ！？」

「はは、怒んなよ。ま、そういう訳だから、アリサさんはお前のことを考えてたと思うぜ」

「そ、そういうことなのか？」

アリサさんが俺のことを……心配していた？

「そうだろ。お前のことも良く知ってたみたいだから、それで付き合い長いのかと思ったんだけどな」

なるほど、そういうことか。

俺はアリサさんのことを知らないけど、

「確かに……アリサさんには何でも知られてるとは思ってた」

「そうなのか？」

「うん。あの人には隠し事できないし……なんかなんでも知ってる感じがするんだよ」

全て見透かされてるって言うのかな、俺よりも俺のことを知ってる、そうというか。

……っ！か多分本当にそうだと思う。

「まあアリサさんは有能そうだもんな」

「有能……」

そんな言葉で片付けていいものじゃない気がする。

「とにかく、メイドとして主人であるお前のことは良く考えてくれてたんだろ」

「そう……なのかな」

まあ、そうなんだろうな。

「そのアリサさんがいなくなるって相当なことだと思うんだ。ホントに心当たりはないのか？」

「ないことも……ない」

恐らく可能性が高いのはあれだ。部屋を覗いちゃった（本当は全く見えなかったけど）事件だ。

あれがあった次の日になくなったんだし。

あのことを話すと俺とアリサさんの戦いのことも話したほうが良いのか？ でも、それを話すとアリサさんの本性にも触れなくてはいけない。それは今岡のアリサさんに対するイメージを壊してしまうことになる。

……………。

まあ、いいか。

「あのさ、実はアリサさんって——」

そして俺はアリサさんと出会って、アリサさんが出て行くまでの、俺とアリサさんの戦いの記憶を今岡に話すのだった。

4話 (4)

八月の中旬。

世間ではお盆と言われている時期であり、会社が休みの皆さんは里帰りして先祖の供養をするのが一般的である。

そして、それは夏休み真っ只中の学生にとっては実に詰まらない行事でもある。

大抵の若者は先祖の霊を供養してやる気持ちなんて持ってなかったりするものだ。付き合いの薄い親戚連中と顔を合わせなければならぬのも面倒である。

そんなことよりも友達と遊びたいというのが本音であると思う。

まあ、でも……本音はそうであっても、久しぶりに会う祖父母なんかから小遣いを貰えるかもしれない、そんな密かな期待を胸に嫌々ながらも親に付き合う。

中には違う考えの人もあるかもしれないが、概ねそんな感じの人が多いだろう。

だけど、そんな規制ラッシュや墓参り等とは無縁な人間もいる。

例えば俺だ。

変える実家もない。

敢えて言えば、今住んでいるこの家が実家とも言える。

それに墓参りの墓。どこにあるのかも知らなかったりする。

墓参りとか生まれてこの方、行ったことがない。

結局何が言いたいのかと言えば……

「暇だ」

何気なく、ほとんど無意識に呟いたその一言に集約される。

ただただ暇だった。

ファミレスで色んなことを相談した日から、それまで以上に良くうちに遊びに来るようになった今岡も最近は来ない。母方の実家に

行っているらしい。

アリサさんは結局、あの日から帰ってきていない。
出て行ったのだから帰ってくるはずもないんだけど。

アリサさんが出て行ってから、もうすぐ一ヶ月になる。

この一月で分かったことがいくつかある。

まず一つ目、俺は料理が壊滅的に下手だった。

レシピを見てその通りに作ってるはずなのに全然違うものになってしまう。とても食べれるものじゃない。

二つ目は掃除だ。

俺が綺麗に掃除したつもりでも細かいところまで出来ていないらしく時間が経つにつれ頑固な汚れが目立ってくるのだった。

他にも小さいことだが色んな問題がある。

例えば、目覚ましをセットして寝たはずなのに気がつけば昼をとくに過ぎているじかんになっていたりなんてこともあった。

たった一ヶ月でこれだけ問題があることに気付いたんだから、学校が始まれば、さらに問題が増えるのは間違いない。

思い返すと自分が情けなくなってくる……というか、こんなことでは将来が心配になってしまう。

「おっす。生きてるか？」

アリサさんの居ない夏休みを振り返って、自分自身に落ち込んでいると玄関から今岡の声が聞こえてきた。

「上がってくれー」

俺は部屋の中から玄関に聞こえるぐらいの声を出した。
足音が部屋に近づいてくる。

「帰ってきたぞ。これお土産な」

部屋に入ってきた今岡はそう言って袋を差し出してきた。

「ありがとう」

俺はそれを受け取った。

今岡は勝手に座布団を持ち出しそれに座る。

「相変わらず……アリスさんは帰ってきてないみたいだな」

「見りゃ分かるだろ……」

「まあな。つーかお前、痩せたな」

今岡は俺を見て言った。

確かに……この一ヶ月で俺はかなり痩せた。

自分でもすぐに気付くぐらいの変化ってのは相当なもんだと思う。

一言で表せば正に『激やせ』だった。

食べてはいるはずんだけどな……。

「今日は外に食いに行こうぜ。安くてガッツリ食えるトコ知ってっからさ」

「そうだな」

俺は即決で今岡の提案に乗ることにした。

弁当ばかりで飽きていたからな。

今岡に案内された店は確かにリーズナブルで、尚且つかなりのボリュームのある食事を楽しめた。

味はまあ……ギリギリ及第点か。

アリスさんの料理に慣れてしまったからか、外食も弁当もあまり美味しいとは思えなくなってしまうていた。

最近、そんなことを良く考えるようになった。

キツイことを言われるぐらい我慢しても良かったんじゃないかとそれ以上にアリスさんのしてくれていた仕事は凄いことだったんじゃないだろうか、と。

追い出そうと画策したことも今では少し……ほんの少しだけ後悔している、こともないこともない。

もし戻ってきてくれたなら……その時は少しのことぐらい我慢しよう。

もし帰ってきたら、部屋を覗こうとしたことも謝ろう。

多分、それが原因だろうから。

だから……出来れば帰ってきて欲しい……なんて思ったり。

今岡と別れた俺は家へと向かっていた。

曲がり角を曲がると家が見える。

——そのとき、見えた自分の家がいつもと違う雰囲気醸し出していた。

正確に言えば、家の電気が点いていた。

家を出た時はまだ暗くはなかったから電気は点けてなかったはず。

なら……家の中に誰かがいる？

俺の足は無意識に速くなっていた。

玄関を開けるとリビングからテレビの音が聞こえてきた。

そして、玄関には女物の靴が――。

俺は急いで靴を脱ぎリビングへ向かった。

ドアを開ける。

ソファに寝そべって煎餅を齧りながらテレビを見る女性がいた。

「……あ、ウィーッス」

「ウィ……って、ウィーッス!？」

反射的に同じように返事をしてしまいそうになる。

俺に気付き顔だけをこちらに向けて軽い感じで片手を上げたその女性は……確かにアリサさんだった。

4話 (5)

俺は激しく戸惑っていた。

目の前に居るのはアリサさんだけどアリサさんじゃない。

なんて言えはいんだろう……。

見た目はアリサさんに間違いないんだけど、言動がアリサさんでは有り得ない。

アリサさんであってアリサさんじゃない。

アリサさんの姿をした別人。

……一言で言えば、そんな感じだ。

じゃあ目の前に居る女性は誰なんだ……ということになる。

が、全く想像もつかない。

想像もつかないが、考えないわけにもいかない。

目の前の女性をジッと見つめて考えてみる。

アリサさんの姿をした女性はキャミソールにホットパンツという目のやり場に困る服装で、ソファアの上で胡坐をかいている。

この時点で言動がどうか言う前にアリサさんとは別人であるとわかるわけだけど……

目の前の女性は俺と目が合うと「にゃはっ」と可愛らしく笑ってみせた。

……ますますアリサさんでは有り得ない。

アリサさんが俺に対してこんな笑顔を向けるわけがない。

では、この人は誰だ？

二重人格ってやつか……まさか、な。

アリサさんの中に、こんな感情豊かな人格がいるなんて思えない。失礼だけど。

まだ、アリサさんは実はロボットで、目の前に居るのは感情表現を豊かに設定したアリサさん二号だった……って方が説得力がある。

アリサさんがメイドロボ……ありそうで怖いな。

まあ、冗談は置いておいて……この答えを知るには、やはり目の前の女性に訊くのが一番なんだろうな。

「……あの」

そう思っ、俺は目の前の女性に話しかけた。

「アリサさん……じゃないですよ？」

「うん、違うよ。良く分かったねー」

女性の返答は予想通りのものだった。

「それは、もう……」

全然違うんで、とは言わない方がいいのかな？

やっぱり目の前の人はアリサさんではない。では誰なのか？ 俺の視線に気付いた女性は、またアリサさんでは有り得ない笑顔を浮かべて、

「妹、だよ」

と言った。

へえ、妹か——って妹！？

アリサさんに妹！？

し、しかも……

「ふ、双子？」

考えすぎて逆に気付かなかったけど、よく考えてみればそれが一番可能性のあることだったんだよね……。

ロボットとか……何考えてんだろ、俺。

「あ、双子じゃないよ」

何イ——っ！？

「こ、こんなに似てるのに？　じ、じゃあ何なんだ！？」

「だから妹だって……」

何だか呆れたような顔をしていた。

そ、そうか……妹か。

双子じゃなくてもこんなに似るもんなんだな……。

「何？　そんなに見つめて」

「ご、ごめん！」

慌てて顔を背ける。

あまりのソックリっぷりに必要以上に凝視してしまった。

でも確かに……よく観察してみるとアリサさんよりも若干幼く見えないうちでもない。

「まあ、私ぐらい可愛いと見つめたくなっちゃう気持ちもわかるけどね」

「……………は？」

「照れんなって！ 分かってるから」

このやり取りで理解した。

アリサさんとは違う意味で俺の苦手なタイプだと。

このガキが……と、口に出して言ってやりたい気分だ。

ガキ……でいいのか分からないから言わないけど。

てかアリサさんの妹なら今いくつなんだろう？ 確かアリサさん

は一七歳だったっけ。なら同い年ぐらいかな。

「失礼ですが……おいくつでしょうか？」

「なに？ そんなに私の事が気になるの？ どうすっかな」

う、うぜえ……。この女、ウザすぎる。

「もう、しょうがねえなあ。そんなに知りたいなら教えてあげる」

勝手に話が進んでいく。

「中学生だよ。中二」

ちゅうがくせい？

「……………」

中学生！？

それは予想もなかった。

中学生って、あの中学生だよな？

「どしたの？ 黙っちゃって」

「いや、凄く驚いてるんですが」

「仕方あるめえよ。こんなに大人っぽく且つ可愛さを失っていない美少女を前にしちゃあね」

仕方あるめえって……仮にも女の子としてそれはどうなの？

「顔はソックリなのに性格は随分と違うみたいっすね、お姉さんと」
「まあね」

……会話がなくなった。

無駄にお喋りな性格だと思ったのに、この話になった途端進んで話さなくなった。

「それで、アリサさんの妹がなぜウチに？」

俺は彼女の招待が明らかになった今、一番の疑問を投げつけた。

「えっと……それは」

なにやら言い難そうなご様子だ。

「それは？」

「頼まれたんだけど」

頼まれた？

「それはウチに来るようになってこと？」

「うん……一ヶ月ぐらい前に」

「はい？」

「だから一ヶ月ぐらい前にお姉ちゃんに頼まれたんだってば。一人じゃ心配だから様子を見るようになって」

それは……アリサさんは出て行ったわけじゃないってことか？

何か予定があって家を空けただけだと、それで妹に俺の様子を見るようにと。

「でも夏休みじゃん？ 正直メンドイってか何で私がそんなことしなきゃなんないのって思うよね」

「ほう……それで？」

「まあ、遊びつくしたし暇つぶしに行ってもいいかなって思ったから来たんだけど」

「そうですね。遊びは大切ですからね」

「だよね！ 分かってんじゃない」

「はい。あなたに頼んだ自分が馬鹿でした」

「あっはっは！ 頼んだって……え？」

引き攣った表情で後ろを向く妹さん。

あ、俺は「ほう……それで？」って言葉を最後に喋ってません。
それ以降、妹さんと話してたのは……妹さんの背後に突然現れた
アリサさんだった。

たった一ヶ月で懐かしく感じるぐらい、いつものメイド服、いつ
もどおりの無表情でアリサさんはそこに居た。

「言うこと聞かない子にはお仕置きですね」

「痛い痛い！ マジ痛いってお姉ちゃん！」

妹の耳を引っ張るアリサさん。

一ヶ月もかかる用事ってなんだろうとか、出ていく前に一言ぐら
い言ってからでも良かったんじゃないかと色々言いたいこともあったけ
ど、とりあえず……

「おかえりなさい、アリサさん」

自分でも驚くほどアリサさんが帰ってきたことにホッとしていた。

5話 林間学校

夏休みが終わって最初の登校。

気だるく感じながらも学校への道のりを歩く。

朝はアリサさんに起こされた。

もしもアリサさんがいなかったら……きっと寝過ごしてしまっていたに違いない。

もしかしたらそのままサボってしまう、なんてこともあったかもしれない。

そう考えると、アリサさんが帰ってきてくれたのは嬉しいことなのか、そう思った。

これからは追い出そうなんて考えるより、上手く快適に生活できるように努力する方がいいんじゃないだろうか。

その方が俺の精神的にも良い気がする。

……生活的にも。

「アリサさんが帰ってきたってマジか!？」

教室に入ると同時に今岡。

「え、何でもう知ってるんだ？」

机に鞆を置いて問いかける。

アリサさんが帰ってきたことは、まだ誰にも言っていない。

というか、言う相手もないんだけど……今岡ぐらいしか。

話してないのに知っているのは何でなんだろう……俺はそれを尋ねた。

「昨日、母ちゃんに頼まれて買い物に行ったんだよ。商店街な。そこでアリサさんが久しぶりに買い物に来たって話を聞いたんだ」

なるほど。

噂になってるってわけだ。

「まあ、その通りだけど」

「そうか！ やっぱり帰ってきたってのはマジなんだな！？」

「う、うん」

「そっかぁ！」

嬉しそうにガッツポーズをする今岡。

「うおーい、お前ら席着けー」

今岡とそんなやり取りをしていると、気だるげな感じを撒き散らしながら担任がやってきた。

この担任がダルそうなのはいつものことなのでたいして気にもならない。

「あゝ突然だが……明日から一泊二日で山に行くことになった。まあ林間学校だな」

本当に突然だった。

というか、林間学校って高校生にもなってやるものなのか？

教室中がざわめく。急すぎることに生徒達の非難が担任を襲う。

「俺に言われてもどうしようもない。もう決まったことだしな。持っていくものなんかはこのプリントに書いてあるから各自用意しておくように」

言いながらプリントを配る。

「それから四〇五人で班を作ってもらわなきゃならんのだが……面倒だから勝手に決めろ。以上」

それだけ言い残し担任は教室を出て行った。

なん……だと……っ!？

俺は絶望にも似た気持ちで愕然とした。

好きに班を作れ……だと？

それは友達のない者にとっては死刑宣告に等しい。

小学校の時、中学の時も……好きに班を作れといわれ教室の隅で独りポツンとしていたのを思い出す。

やべえ……泣けてきた。

「なーに泣いてんだよ？」

今岡が俺の肩を叩く。

「な、泣いてないよ！ 適当言うな！」

俺は目を手の甲で拭い言った。

「いや、泣いてたし。……目、赤いぞ？」

「き、気のせいだしっ！」

俺は隠すように今岡から顔を逸らす。

「ま、いいや。それより最低でもあと二人誘わないとな」

「え？」

今岡の言葉に驚いてそう訊きかえす。

「だから四々五人だろ？ 俺とお前と……あと二人いれば四人になるじゃないか」

な……っ！？

「ま、まさか……俺と同じ班になると？」

「お、おう。てか何そんなに驚いてるんだ？」

それは……驚くなって方が無理だろう。

今までの人生、こういった状況で自分から声をかけ断られたことは多々あれど、誰かに誘われるなんて経験は初めてのことだった。

「そ、そんな……バカなっ……」

「お前は何を言ってるんだ？」

呆れたようにこちらを見る今岡。

確かに今の俺は普通の人から見ればおかしく映るだろう。でも、でも……こんな経験は初めてなんだよ！

「それより……残りのメンバーだ」

「あ、ああ」

未だに落ち着かない心を無理やり落ち着かせて話を合わせる。

「てか、うーん……どうしたもんか」

今岡が難しい顔で唸る。

俺も教室の中を見渡す。大半の生徒は担任の言葉から数分足らずで既にグループを作ってしまったていた。

……やはり早々上手くはいかないか。今岡がいてくれるだけでも
幸せなことだよな。

「ちよつと、あんたたち」

諦め半分でそんなことを考えていると横から声をかけられた。

声からして女子であることは間違いなかった。

声のした方を見ると、そこには二人の女生徒がいた。

一人は身長一五〇に少し満たない程の小柄な少女。彼女はクラス
の委員長であった。

もう一人は委員長とは対照的に一八〇程もある大柄な少女だった。
身長に似合わず気の弱そうな感じで俯いていた。

「あんたたち、どうせ組む人いないんでしょ？ 私たちが組んであ
げるから感謝しなさい」

委員長は偉そうに言った。

5話 (2)

「てことで、明日から泊まりで林間学校があるみたい」

俺は家に帰ってすぐ、アリサさんにそのことを告げた。

急なことでさすがのアリサさんも驚くんじゃないかな……なんて考えていると、料理していた手を止めたアリサさんがどこからか大きなバッグを取り出した。

「そう思って、既に準備はしておきました」

「なぜ知っている!?!」

俺は間髪入れずツツコんだ。

今日聞いたことを今初めて伝えたのに、既に準備が出来てるってどういうことだよ……。

「安心してください。おやつは樹様の好きなものを選んでちゃんと三〇〇円分入れてあります」

いつも通り無表情なんだけど、なんだか微妙に得意気にアリサさんは言った。

っていうか――

「そんな心配はしていない! てか遠足じゃない!!」

「では何を気にしているのですか?」

「俺だって今日知ったばかりなのになんでアリサさんがもう知っているのかってことだよ! 用意までして」

「そんなことですか……そんなことは別にどうでも良いことでは?」

アリサさんはそう言って料理に戻ってしまった。

「どうでもよくないよ!?!」

それでも俺は執拗に尋ねる。

「そうですね……」

アリサさんは振り向いて顎に指を当て考え始めた。

「メイドですから」

「答えになってねえ――っ!?!」

俺は叫んだ。

翌朝、俺と同じ学年の生徒達は学校のグラウンドに集合していた。ここからクラス毎にバスに乗り目的地まで行くらしい。

早めに家を出た所為か、集まっているクラスメイトはまだ半分ほどだった。今岡もまだ来ていない。

学校行事とはいえ皆で泊まりで何かをするってことに生徒達はそれなりに楽しみを感じているようだ。同じ班の友達なんかと仲良く今日の予定なんかを話し合っていた。

俺はといえば……同じ班の人間を見つけることも出来ず一人ですつんと立っていた。

そんな俺に話しかけてくる人はいない。

自分で言うのもアレだが、なんていうか……空気みたいなもんだ。手持ち無沙汰な俺は何度も読んだ予定表を、もう一度読むことにした。

何度も見ただけあって予定は全て覚えていた。

こんな俺だけど、初めてちゃんと班を作って、その班で行う林間学校をかなり楽しみにしていたのだった。

おかげで昨日、あまり眠れなかった。

……小学生かよ、と内心溜息を吐く。が、今回のような状況は初めてだし仕方ないことなのかもしれないと思う。

余った奴らを集めて作られた班や、教師に入れてくれと言われあからさまに嫌そうな顔をするクラスメイトを見て、その先を楽しむことが出来るだろうか？ 出来ない、と断言できるね。経験者が言うんだから間違いない。

思い出すのも辛い経験だ。

……俺は頭を振って思い出してしまった光景を振り払い、再びプリントに視線を落とした。

「出発前から暗い顔してるんじゃないわよ。折角誘ってあげたんだ

から」

プリントに目を落とすと同時、声をかけられて振り返る。
そこにいたのはクラスの委員長で同じ班になった少女、三上美織みかみ みおりさんだった。

初めてその名を口にした時は『み』だらけで口を噛んでしまいそうになった。

ショートカットの黒髪で活発そうな女の子だ。

背は俺よりも結構低いから、多分一五〇の前半だろう。

「何見てるのよ？　というか、朝会ったらまずはどうするの？」

「お、おはよう。三上さん」

「はい、おはよう！」

そう言って快活に笑う。

見ていて実に気持ちのいい娘だなと思った。

対人スキルの高くない俺は挨拶だけでもどもってしまうことが多い。
々ある。

「あ……お、おはよう……春田君」

もう一人、三上さんの傍に立っている少女が言った。

俯き加減で声が小さく、なんとか聞き取れた。

彼女も俺と同じで対人スキルはあまり高くないようだ。それともただ凄く恥ずかしがり屋なのか。彼女の顔は俯いていてよくは見えないが短い髪で隠れない耳は赤く染まっているように見えた。

「伊吹さん、おはよう」

彼女の名前は伊吹沙代いぶき しゃだい。学校で部活動中以外はいつも三上さんと行動を共にしているようだ。

伊吹さんは三上さんと比べて……俺と比べても随分背が高い。

それもそのはずで、彼女は女子バレー部（この学校のバレー部は相当強いらしい）で一年にしてレギュラーになっている。

スポーツマンらしく三上さんよりも短いショートカット。可愛らしい髪留めを着けている。

スポーツをやっている身体も大きいながら、全然そうは見えない

ほどほっそりと繊細な体付きをしている。

「あ、私委員長の仕事があるから、また後でね」

三上さんはそう言って眠そうに地面に置いたバッグに座っている担任の方に歩いていった。

残された俺と伊吹さんに会話はない。

微妙に空いている俺と伊吹さんの距離が今の気まずさを物語っているんじゃないかと思う。近すぎず遠すぎず……いや、遠いか。結構。

集合時間ギリギリになっても、今岡の姿はどこにもない。

伊吹さんと二人、無言で気まずい時間が流れる。

「今岡の奴、まだ来てないの？」

暫くして、生徒の数を確認する為にやってきた三上さん。

そのとき、

「ギリギリセーフ！　なんとか間に合ったあ！！」

息を切らして今岡が登場した。

「起きたらビックリ、集合時間の一〇分前。久しぶりに全力で走ったぜ」

「遅いわよ。ていうか、そんなこと聞いてない」

呆れたように言う三上さん。

「これで揃ったわね。じゃあ私は先生に報告してくるから皆は先にバスに乗っちゃって」

三上さんは再び担任の方へ歩いていった。

「あゝいよ……はあ。んじゃ乗ろうぜ春田」

汗を垂らしながら今岡。

「……ああ」

朝から暑苦しいな、と思いつつ今岡と共にバスに乗り込む。

後ろから控えめに伊吹さんもついてきていた。

5話 (3)

.....。

「あ、あの……これ、どうぞ」

目の前にお菓子が差し出される。

「ど、どうも」

戸惑いながら受け取って食べる。

「……………」

「……………」

無言。

窓のふちに肘を置いて流れていく外の景色を眺める。

眺める……が、そんなモンに集中できなかった。

ギリギリまで窓に寄りかかって距離を置いてはいるが、それでも狭いバスの隣同士。少しでも動けば身体が触れ合ってしまう。

隣にいるのが今岡だったらこんなこと気にするはずがない。気持ち悪い。

では、なんでこんなに気まずい思いをしているのか。それは……いま、俺の隣に座っているのは……何故か伊吹さんなのだった。

なぜこんな状況になっているのかといえば……バスに乗り込んで少し経ってからのことだった。

俺と今岡は隣同士で座り、一緒に乗ってきた伊吹さんは俺達の前の席に座っていた。

今岡と何気ない会話をしていると、担任に報告を終えた三上さんがバスにやってきた。

俺は三上さんはそのまま伊吹さんの隣に座ると思っていた。

だが、三上さんは前の席に座る伊吹さんをチラリと見たあと、俺達の方へやってきてこう言ったのだ。

「春田、あんた前に行きなさい」

と。

当然、俺は反発した。

「え……な、なんで？」

「私はコイツがバカなことしないように見張らなきゃいけないの」
言いながら今岡を指差す。

「バカなことってなんだよ！？」 俺がそんなことするヤツに見える
のか！？」

そう言ったのは今岡。

三上さんは冷ややかな目を今岡に向け、

「見えるもなにも、いつもしてるじゃない」

確かに。バカと言えば今岡ってぐらいに、このクラスではそれが
常識だった。

「そんなわけだから、はい動いて動いて」

三上さんに言われるまま立ち上がると、すかさず三上さんは俺の
座っていた席に腰掛けていた。

窓側の今岡は逃げることも出来ず、寂しそうな目を俺に向けてい
るのだった。正直気持ち悪い。

仕方なく前の方へ移動する。

「……ど、どうぞ」

伊吹さんは立ち上がって俺が通りやすいようにしてくれていた。
というか……俺も窓側に座ることになるわけね。

「あ、ありが……とう」

お礼を言って座る。

俺が座ったのを確認して伊吹さんも俺の隣に、

「……っ！？」

伊吹さんが座ったとき、腕と腕が触れ合ってしまった。

「あ、ご、ごめん……なさい」

驚いて窓際に離れてしまった俺に伊吹さんが申し訳無さそうに謝
罪の言葉を口にした。

「い、いや、こちらこそ？」

それっきり会話もなく、やがてバスは走り出す。

友達の少ない俺は対人スキルが低い。

特に初対面の人と打ち解けるとか……ほんと無理。

伊吹さんとは初対面ではないしクラスメイトだけど、話したのは班決めの際のあれが最初だ。そんなのは初対面とさして変わりがないといってもいい。

ただでさえ低い対人スキル。相手が女性だとさらに低下する。

ハッキリ言ってまともに顔も見れない。

どうやら伊吹さんも人懐っこいタイプではないみたいだし、沈黙が重い。

「え、マジで!？」

後ろから驚いたような今岡の声。

「マジよ。だからアンタも協力しなさい」

「……勿論だ。それにしても伊吹がね」

なにやら三上さん二人で、とても盛り上がっている様子だ。

小声なため、何を話しているのかまではハッキリとは聞き取れないが、伊吹さんのことを話しているのは何とか聞き取れた。

「ちよっとバカ! 声が大きい!!」

「わ、わりい……」

前の席にいる俺にも聞こえなかったぐらいの声だったが、三上さんはそれでも何か気に入らなかったらしい。それに今岡も素直に謝っているのも不思議だった。

……一体何の話をしているんだろう?

それからは何か話しているのは分かるって程度で、後ろの二人の声がこちらに届くことはなかった。

「……あのさ」

無言の苦痛に耐えかねて勇気を出して伊吹さんに話しかけてみる。

「は、はい……なんですか?」

お互い目を合わせることもなく。俺は窓の外を向いているし、伊吹さんはいつも以上に俯いている。

「伊吹さんは……良かったの？ その……俺らと同じ班で」

三上さんに言われ、半ば強引に同じ班になった。

俺なんかと同じ班になったこと、伊吹さんはどう思ってるんだろうか？ 実は嫌だったんじゃないかと思って、そう訊いてみた。

「あ……はい。……それは、全然」

そんな返事が返ってきたので、まあ一安心。嫌われてるってこともないみたいだ。

「全然というか、良かったっていうか、そもそも私がミオちゃんに頼んでそうしてもらったのであって」

伊吹さんは物凄い早口で何か呟いていた。

……早口なうえに小声で、何を言っているか全く分からないけど。

「はぁ！？ メイド！？」

そんなとき、三上さんの驚く声。

なんか、すごい嫌な予感のする単語が聞こえた気がする。

「おう、これがマジで美人なんだよ！」

今度は今岡。

「ほう……美人の……メイド」

本当に……嫌な予感がするなあ。

5話 (4)

出発して一時間半ほどバスに揺られ、ようやく目的地に辿り着く。

「うおー、着いたー！」

バスから降りると今岡が大きく伸びをする。

俺も同じく体を伸ばす。長時間乗り物に乗っていると体が固まるっていうか、ストレッチなんかすると骨とかゴキゴキ鳴るのはなんだろう。

特に今回は、長時間の移動に加えて、移動中、ほとんど身動きをとれなかったためか、普通よりも疲れてる気がする。

「お前、三上さんと何話してたの？ メイドとか聞こえた気がするんだけどさ」

今岡に近づいて小声で話しかける。

小声なのはすぐ近くに三上さんと伊吹さんの二人もいるからだ。

「は？ なんのことだ？ そんな話はしてないぞ」

俺の質問に今岡はとぼけてみせた。

俺には言いにくいことを話していたってことか。だとすると……余計気になってくる。

「俺は確かに聞いたぞ。三上さんがメイドって言ったの」

俺はしつこく問い詰める。今岡は俺と目を合わせようとしなかった。

「へ、へえー。聞き間違いじゃないのか？」

あからさまに嘘だと分かる表情の今岡。

……コイツ、マジ何を話したんだ？

「……………」

俺はジト目で今岡を見つめる。今岡は「あ、あははは」と俺の目を見ずに渴いた笑いをこぼしていた。

「あんた達、いつまで喋ってんの。さっさと移動するわよ」

三上さんの声に周りを見ると、他のクラスメイト達はかなり離れ

たところを歩いていった。

「おう。わりいわりい」

今岡は助かったとばかりにそそくさと歩いていく。

「ご、ごめん」

俺も謝ってあとに続いた。

バスを降りて少し歩くと結構大き目の建物が見えてきた。事前に配られたプリントによると、どうやらここで昼の弁当を食べるらしい。

学校側が用意している弁当らしいので正直期待はしない方が良さそうだろう。

そうは思うものの、やはりいつもと違う状況下では少し期待をもつてしまったりするのだが。

「なんか……近くで見るとすっげえボロッちいな」

建物の入り口まで辿り着くと同時に今岡が言った。

確かに所々ひび割れていたり、お世辞にも綺麗とはいえない状態だった。

「まあ、中までひどいってことはないでしょ。……多分」

そういう三上さんも外観を見て自信なさ気だ。

「見た感じ廃墟とまではいかないけど……それでも幽霊とか出そうではあるね」

「ちよつとやめてよっ！ そんなの出るわけないでしょ！？」

何気なく呟いた俺の言葉に三上さんが激しく反応した。それを見た今岡は嫌な感じに口を左右に広げ、

「あれえ？ 委員長さんは幽霊とか怖がっちゃってるのかなあ？」
意地悪くからかい始めた。

「は！？ 怖いわけないでしょ！」

「その割には焦ってない？」

「あ、焦ってなんかいいわよ。バカにしないでくれる！？」

別にバカになんかしてねーよお？ ただ「お化け怖い〜ん」なん

と言う三上委員長様は可愛らしいと思ってるだけですよ？」

「だ、だから怖いなんて言っていないでしょ!？」

「うぷぷ。そうですねえ」

「ちょっ、何笑ってんのよ!」

声を荒げて怒る三上さんに対し、今岡は「べっつにいゝ」だの「なんでもないですよ?」だの相手をさらに怒らせるような態度で返事をしていた。

「ま、まあまあ。とにかく入ろう。もう皆行っちゃったぞ」

俺は二人の間に割って入った。

「おう、そうだな!」

今岡はスタスタと先に入って行ってしまった。

「あっ――待ちなさいよ! おい!」

それを追いかけて三上さんも。

「はあ……それじゃ、俺達も行こう」

俺は溜息を吐いてから、まだこの場に残っていた伊吹さんに声をかける。

「は、はい……」

そして、そのまま伊吹さんと二人で中に入った。

食堂のような広い部屋。一学年全ての生徒が入ってもまだ余裕があるほどの広さがあった。

そこに用意されていた弁当を皆で食べる。

予想通りその弁当は味気なく、とても美味しいといえるものではなかったが、普段とは別の環境のためかそれほど不満も出ることなく皆綺麗に平らげていた。

食事が終わると次は外に出てテントの設営。

「はあゝ。気に入らねえよな」

今岡がテントの部品を足で転がしながら溜息を吐く。

「これって差別じゃね?」

俺に同意を求めてくる。

確かに不公平だとは思うけど。

「なんでテントに泊まるのは男子だけなんだ!？」

今岡の怒りはそれだった。

先程、弁当を食べた建物。食堂っぽい部屋は一階にあり、二階と三階は二、四人ほどが寝られる部屋がいくつもあるらしい。そこに女子達は泊まるようだった。

高校生の男女が防犯性の宜しくない建物内に泊まるのはいかなものか、ということで男子は外にテントを張りそこで泊まることになったらしい。

部屋数も足りなかったってのも理由らしいけど。

「私達に言われてもどうしようもないわよ。テント作るのは手伝ってあげるんだからいいじゃない」

ジャージに着替え、軍手をはめた三上さんが言う。

「ほら、グダグダ言ってるんで手を動かす!」

三上さんは今岡の背中を叩く。スパーンと結構良い音がしていたが、今岡はそれに何を言うでもなく素直に設営に取り掛かった。

「ま、決まったモンは仕方ないし、ちゃんと作るか!」

「適当にやって寝てる間に壊れたら最悪だしね」

俺と今岡は説明書を見て部品を訳ながらそんなことを話した。

やる気になったのはいいが、俺は勿論、他の三人もテントなど作ったことがなく、説明書を見ても完成させるのに四苦八苦だった。

何とかかんとか設営しおえたのは他の班と比べても遅いほうだった。

その後、なんか偉いっぽい人の話を聞いたり周辺のゴミ拾いをさせられたりするうちに晩ご飯の準備の時間になった。

晩ご飯はこういうときの王道、カレーだ。

料理は苦手という三上さんと料理なんかしたことがないと言う今岡の二人はご飯係。俺と伊吹さんでカレーを作る、ということに決まった。

今岡と三上さんが火の用意をしている間に伊吹さんと俺で野菜や肉の下ごしらえ。

「へえ。凄い上手だね」

俺は包丁で綺麗にくるくると芋の皮を剥いていく伊吹さんの手元を見ながら感嘆の声をあげた。

「い、家で……やってるから」

恥ずかしそうに俯きながらも伊吹さんの手は速度を落とさない。

一つの班に配られた皮むき器は一つだった。最初、俺は自分がやるからと皮むき器を手に入参の皮を剥いていた。「私は……お芋をやります」と、そう言った伊吹さんは俺の隣に立つと皮むき器を使う俺と変わらない速さで芋の皮をむき出したのだ。

さすがに家でやってるというだけあって伊吹さんの手際は良かった。今岡達が火の用意を終えた頃には、もうこちらの準備は終わっていた。今岡達は火を点けると「んじゃ、米洗ってくるぜ!」と水道の方へ歩いていった。

鍋を火にかける。

後は煮込んでルーを入れて出来上がりだ。

鍋を二人して見ている意味がないので俺は火の調節をした。伊吹さんは何度も何度も丁寧にアクを取っていた。

「これで……よし!」

ルーを入れ伊吹さんは味見をして微笑んだ。

「……………っ!」

俺が見ていたことに気付いて伊吹さんは顔を赤くして俯いた。

本当に恥ずかしがり屋らしい。

そのとき——遠くから今岡と三上さんが慌てたようにこちらに向かって走ってきた。今岡が「米が……米が……っ!」とか言っている。

なんだかとても嫌な予感がした。

「ど、どうしようっ! お、おおお、お米が流れていっちゃった!」

俺達のもともとまで辿り着いた三上さんの言葉。

その日、俺達の晩ご飯はライスなしカレーだった。

5話 (5)

近くに温泉があるらしい。

晩ご飯が終われば入浴なのだが……こんなところにある温泉だ。全員が入れるほど大きくはない。そうなるといくつかのグループに別れて入っていくことになる。

さらに言えば、ここは別に宿泊施設とかそういういたものではない。ということは男女別になっている、なんてことはない。

これも順番になるわけだ。

そうなると男子と女子でもめる。

男子の意見はもっぱら「女子、お先にどうぞ」だ。それに対して女子はといえば「男子の後は汚れてそうで嫌。でも先に入るのも何か嫌」ということで一致していた。

女子の気持ちも分かる。なぜなら男子からは『女子の残り湯万歳！』といった気持ちがオーラとなって見えているような錯覚に陥るほど、男子達は異様な興奮で妙にテンションが上がっていたりする。

勿論――

「紳士的にレディーファーストでお先にどうぞって言ってんだよ！何だよ、何か嫌って！」

女子に向かってそう叫ぶ今岡もそのひとりだ。今岡の後ろに控える男子生徒たちから「そうだ、そうだ！」と声があがる。

「何か嫌なもんは何か嫌なのよ！」

そんな今岡に対して大声を出すのは三上さん。こちらも女子から「そうよそうよ！」との声。

「大体、その顔が嫌なのよ。如何にも変なこと考えてますって顔してるじゃない！」

三上さんは今岡とその後ろの男子たちを指差して言う。

「そうかよ！　じゃあ俺らが先でいいんだな！？」

今岡の問いに、

「それも嫌って言ってんでしょ！」

即答だった。

俺は少し離れたところから見ているのだが、これはもうどうしようもないんじゃないかと思った。

特に女子。先に入るのも嫌だし、後でも嫌じゃこの問題は解決できない。

嫌がっている割には風呂はナシって話にはならない辺り、入りた気持ちはあるんだろう。今日は汗掻いたと思うし。俺なんかはそれでも一日ぐらいどってことないじゃんと考えてしまうのだけど。

「どうしろっつーんだよ!？」

今岡が女子に叫ぶ。

「ちよっと待ってなさいよ! 今、相談してるんだから」

女子は三上さんを中心に集まり、しゃがみ込んで相談している。

先か後か……それは女子にとってとてつもない選択であるらしい。やけに真剣に相談している。

やがて決断したのか、女子達は一度顔を見合わせ頷く。そして三上さんが立ち上がり今岡に近づいてゆく。

「先で……いいわ」

小さな声で言った。

今岡はそれを聞いて満足そうにうんうんと頷き、

「じゃあ、先に入ってくれ。全員入ったら知らせに来てくれれば良い」

極めて紳士的な態度だった。今岡の後ろの男子達も優しげな顔で微笑んでいた。

三上さんが訝しげな瞳を向ける。他の女子も同様だ。女子じゃなくても怪しいと思うだろう。現に俺が思ってる。

「…………言っとくけど、覗いたら殺すから」

殺意のこもった視線を今岡に突き刺す三上さん。

「覗くわけないだろ」

今岡は答えるが、女子の怪しげな眼差しは消えない。

それでも、そろそろ入り始めないと時間もヤバイということで怪しみながらも女子達は温泉へと向かっていった。

「……………」

優しげな顔で見送っていた男子達。女子の姿が見えなくなった途端に騒ぎ出す。

「よっしゃ覗くぞお——っつっ！」

今岡が叫ぶ。

『うおおおおお！！』

他の男子も拳を突き上げて叫ぶ。

この場は今、異様な熱気に包まれていた。

これは……係わり合いにならない方が良さそうだ。絶対ロクなことにならない。

「よし、行くぞ春田！」

いつのまにか隣にいる今岡に肩を捕まれる。

「え……行かないと駄目なのか？」

「当たり前だろ！？ 行かないとかお前それでも男か！」

覗かなかったら男じゃないとか、それもどうかと思う。

「んじゃ、行こうぜ！」

返事をする前に今岡に凄い力で引きずられ、強制的に参加させられてしまった。

それは過酷な道のりだった。

ひとり、またひとりと次々に脱落していく。残ったのは俺と今岡を含め数名だった。

「ご、ごめん……俺……もう駄目みたいだ」

指に力が入らない。もういつ話してしまっても不思議じゃない。

「バカッ——何諦めてんだよ！ 諦めたら終わりだろうが！」

今岡の叱咤の声。

「でも……もう限界なんだ」

正直なんで俺、こんなに頑張ってるんだろう。乗り気でない覗き

の為に。

次々と脱落していく者達の『あとは……任せたぜ……がくつ』という声になんだか知らないうちにゴール（女湯）まで辿り着かなければいけないという気持ちにさせられてしまったからだろう。

だがそれもここまでのようだ。

温泉の周りに張り巡らされた防壁（ただの壁）、あとはここを登りきれば辿り着けたのに……。俺の体はその中腹で限界に達してしまったのだ。

あとは……リタイアしていった人達と同じく、残っている今岡達に全てを託して――

「お前は……最後まで頑張れよ」

そう今岡に笑みを向ける。心境は『俺を残してお前は行け』的な気分だった。そして俺は指の力を抜いた。

重力に従って登っていた距離をそのまま落下する……かに思えた。
「……………っ!？」

だが、それより早く、今岡の手が俺の腕を掴んでいた。

「な、何を……そんなことしたらお前まで!？」

片手で自分を支え、もう片方の手で俺を支えるなんて……こんなことしたら二人とも落ちてしまう。

「離せよ。お前まで落ちることねえよ」

「バカヤロー……ッ!」

今岡が叫ぶ。

「俺達は友達だろ。お前と一緒にじゃなきゃ……意味ねえよ」

「い、今岡」

「さあ、行こうぜ」

「あ、ああ!」

限界だと思っていた体から不思議な力が湧いてくる。

俺と今岡は再び壁を登りだす。

そして――

「っ、着いた! 着いたぞ、今岡!」

壁の一番上に手をかける。

「あ、ああ……やっと、やっと辿り着いたんだな」

今岡も限界だったのか疲れきった顔をしていたが、その目は輝いていた。

辿り着けたのは俺達だけのようだ。

「じゃあ、『せゝの』で一緒に見ようぜ」

今岡が俺の隣までやってきてそう言った。

「……………ああ」

俺は今岡の顔を見て頷いた。

「それじゃ……せゝのっ!」

今岡の声に合わせ、二人で壁から頭を出す。

そして視線の先には――

「覗くなっつったでしょおがっつっ!」

「ぐおっ!」

「いつっ!?!」

顔面に何かが当たる。凄い勢いと衝撃だった。

今岡も俺も思わず手を離してしまった。そのまま地上へ落下。

落ちたところで壁の向こうから三上さんの怒る声が聞こえた。

「あんだだけ大声で叫んでれば誰だって気付くわよバカ!」

……そりゃそうだ。熱くなってバカみたいに騒いだからな、今岡と。

その後、俺と今岡は三上さんに折檻された。

正座で説教。その間も何度殴られたことか。

「結局見えなかったんだからいいじゃん」

という、今岡の反論が余計三上さんの怒りに火をつけてしまった形だ。

他の男子どもは自分は関係ないですとばかりにそそくさと入浴に向かっていった。

やっぱり……ロクなことにならなかった、な。

俺は三上さんの怒声を聞きながら溜息を吐いた。

「何溜息吐いてんのよ！　ちゃんと反省してんのかお前は！？」

「ぐえっ……」

それに怒った三上さんに首を絞められた。

ほんと、散々だ。

それから少しの時間が過ぎ、空には満月と無数の星、夜だ。就寝時間になり、生徒達は自分の寝る部屋とテントへ。そこで布団に、あるいは寝袋に包まっているはずの時間。

「ここはやっぱり王道の……肝試し——っ！」

今岡が叫ぶ。

わーわーきゃーきゃーと歓声が上がる。

就寝時間を過ぎた今、俺達のクラスだけ外に集まっていた。勿論担任も知らないことだが。

今回は覗きと違って女子もいる。

「ペアを決めるからくじを引いてくれ！」

今岡がくじの入った箱を片手に生徒達の間を回る。

「同じ番号の人同士、ペアになってこの地図の通りに進んでもらいます」

三上さんが地図を一人一枚配る。

この肝試しは今岡と三上さん共同の企画らしい。

「そのくじの番号は回る順番でもあるから、前の組が出発して五分経ったら次の組は出発してください」

地図を配り終えた三上さんが言う。

俺は四番だった。……不吉だ。

同じ番号は誰だろう……。実を言えば不安である。くじで決めたペアに嫌がられることなんて何度かあった。『先生えー、やり直してください』とか言われると親しくない相手でも本当に傷つくんだよ……。

そんなことになるぐらいなら——

「今岡、何番だった？」

コイツとペアになった方がマシだ。

「あん？ 俺と委員長は驚かす役だからな。くじは引いてないぞ」

「そ、そうか……」

「なんで落ち込んでるんだ……お前、そんなに俺のこと好きだったのか。だが残念、俺はノーマルだ！」

「ち、違ふよ！」

なんて勘違いしてるんだ。

「なんてな。冗談だよ。ま、どっちにしろ男女でペアになるようにしたから俺とペアになることはなかったぜ？」

そうなのか。

だとすると女子、か。一体誰なんだ？

「そんなに心配することないと思うぞ。多分な」

「え……どういふことだ？」

「さあね」

うしし、と何か企んでいるように笑う。

「おーい！ 四番引いた女子誰だあ！？」

「お、おい！」

今岡が俺のくじを見て大声で言った。

「あ、あの……私、です」

そう言ったのは手を上げてくじを見せながら俯いている伊吹さんだった。

「よ、宜しく……お願いします」

「あ、ああ……こちらこそ？」

何故か深々と頭を下げる伊吹さんに戸惑いつつもそう返す。

伊吹さんなら『変えて』とか言うことはないと思うから一安心といったところか。

それにしても……

「なあ今岡」

「なんだ？」

「くじに何か細工とかしたか？」

今日は妙に伊吹さんと縁がある。

偶然にしてはおかしい気がする。そう思った俺は今岡に尋ねていた。

「な、何言ってるんだよ！　なんでそんなことする必要があるんだ！？」

必要以上に大きな声の今岡にビックリしつつも、

「いや、何に必要とかは分からないけど……何となく」

「な、何となくで人を疑うのは良くないぞ春田君」

何か妙な雰囲気は今岡。

今岡は妙だが、俺と伊吹さんをペアにして何があるのか分からない以上これ以上訊いても無意味だろう。そんなことを今岡がする理由は皆目見当もつかないし。

「それじゃ俺は驚かす為に行ってくるぜ！」

今岡はそう言い残し去っていった。

「それじゃ十分後、一番の組から出発してください！」

今岡に続いて三上さんも行ってしまった。

俺は四番だから三〇分後に出発か。

「伊吹さんは……肝試しとか大丈夫？」

俺は隣で俯く伊吹さんに問いかける。

「は、はい」

伊吹さんは俯いたままコクコクと頷いて答えた。

「そう。良かった」

「……………」

そう言った俺を少しだけ顔を上げ不思議そうに見てくる伊吹さん。実は俺は怖いのは苦手なのだった。

二人とも怖がりじゃ進めないかもしれないし、いや……伊吹さんが俺以上に怖がってくれば逆に落ち着いたりするのかな。

それに……肝試し自体も不安だがそれ以外の不安もある。

「熊とか……出ないよな？」

俺は誰にも聞こえないように呟いたつもりだったのだが伊吹さんには聞こえてしまったらしい。

「で、出ないと……思います」

「だよ。いや、分かってるんだよ？ 出ないってことはさ。でも、それでも俺が行くと出るかもしれないって思っちゃうんだよ。うん、ないよねそんな漫画みたいなこと。でも最近の自分を振り返るとそんな漫画みたいなことが立て続けに起きてんだよだから熊に襲われるとか崖に転落するとか普通にありそうだって思っちゃうんだよ！」

俺は心中を一気に捲くし立てた。

言ってから思った。本当にそのぐらいのことはありそうだと。

親が自分を置いて海外に行くわ、引越したら一戸建てだわメイドさんがいるわってどう考えても普通じゃないもんな。

「……………」

伊吹さんが俺を見ていた。

——って、ヤバ！ 何か色々叫んじゃったけど変なやつって思われたか？

「……………い、伊吹さん？」

声をかけると伊吹さんはハッとしたような顔をして俯いてしまった。それから何度か頷くとゆっくり顔を上げ、

「だ、大丈夫……ですよ」

と微笑んだ。

大丈夫って何が！？ そんな事は有り得ないって意味かそれもと俺の精神のことですか！？

なんでだろう、酷く混乱してしまっている。さっきのことで焦っていた所為もあるんだろうけど。

「次、四番誰だー！？」

自分の番号を呼んでいる声で我に返る。

「あ、はい。俺です」

「おー春田……と伊吹か。次お前らの行く時間だぞ」
呼んでいたのはクラスの副委員長、園田君だった。

俺は伊吹さんと顔を見合わせて、

「そ、それじゃ行こうか」

「……はい」

肝試しに出発した。

5話 (6)

暗い山道を懐中電灯の微かな明かりを頼りに歩いていく。

さすがに山奥とあって、辺りは暗く、月の光も微かにしか届かない。風に揺られた木々、その葉の擦れ合う音。虫の鳴き声、フクロウか何かの鳥の声も聞こえてくる。

それだけで怖い。引き返したいぐらいに。

「い、今岡達はどんな仕掛けしてるんだろうな？」

沈黙しているとさらに怖いこともあって俺は伊吹さんに話しかけた。……苦手なんて言ってられない。

「えっと……わかりません。……ごめんなさい」

振り向いて申し訳無さそうに言う伊吹さん。

そうだよ。分かるわけないよね。てか分かっちゃったら仕掛けの意味がないよね。

「あ、いや……別に謝らなくて——ひいっ!？」

自分で踏んだ枝の折れる音にビックリして悲鳴を上げてしまった。

「ふふ……ほんとに怖がり……なんですね」

それを見た伊吹さんに笑われる。

俺は恥ずかしさから顔を逸らし、

「あ、うん……まあ」

頬を掻く。

「あ、ごめんなさい……笑っちゃって」

また申し訳なさそうに頭を下げる伊吹さん。

「え? いや、別に……」

俺は顔を逸らしたままぶっきらぼうに呟いた。

笑われたのは別になんとも思っていないし。

「そ、そんなことより……さっさと進んで終わらせよう!」

俺は気まずさを紛らわせるように言った。

「は、はい……わかりました」

そう言って歩き出す伊吹さんの後に続いて俺も足を動かした。

……情けなくも俺は、伊吹さんの後ろを歩いているのだった。正直なところ……怖いし前を歩くのは無理だと思ったから前を歩くことは伊吹さんをお願いした。

早く終わらせたい一心で自然と早足になってしまふ。そんな俺は、同じ速度で歩き続ける伊吹さんの背中にぶつかってしまいそうなほど近づいてしまふ。その度に速度を落とし、ある程度はなれるとまた無意識に早足になってしまふ。そんなことを何度か繰り返すうちに、ふと……伊吹さんが立ち止まった。

「え、なに、なんかあったの!? アレか、今岡達が仕掛けた罠か!?」

ここに来るまで、怖かったけど何事もなかった。だからついにきたのか、と思った俺は立ち止まった伊吹さんに問いかける……目を瞑って。

「……………」

だがいくら待とうとも伊吹さんの返答はなかった。それどころか前に立っている伊吹さんから動く気配すら感じられない。

「……あの〜」

俺は薄く目を開け伊吹さんを見やる。

伊吹さんは前方を見つめたまま動かない。

「伊吹さ——っっ!？」

どうしたのだろうと声をかけつつ伊吹さんの見ている『モノ』を見た俺はそれ以上の言葉を発することが出来なかった。

なにか……いる。

懐中電灯に照らされる黒い影。

照らされているのになお黒いその影。

黒い……毛? 体毛?

え、人間じゃない?

頭が混乱する。

「……………」

「……………」

俺も伊吹さんもただ無言で前方の黒い影を見つめていた。

そして——伊吹さんは徐々に上へと懐中電灯の光を移動させる。

「……っ!?!」

絶句した。

俺も伊吹さんも。

熊。前にいるそれは熊だった。一瞬光に照らされ見えた顔は紛れもなく熊のものであった。

「……き……」

伊吹さんが驚きのあまり懐中電灯を地面へ落とした。

「キャ————ツツツ!!」

そして、伊吹さんとは思えない大きな悲鳴を上げた。

「——に、逃げよう!!」

伊吹さんの悲鳴を聞いてようやく体を動かすことの出来た俺は伊吹さんの手を引いて走り出した。

それからは無我夢中で走った。それはもう必死に……。途中で後ろを振り返る勇気はなかったので、熊が追いかけてきているか分からない。

「はぁ……はぁ、はぁっ!」

苦しい。

こんなに本気で走ったのは久しぶりだ。

もうそろそろ限界だ。もし熊が着いてきているとしたら逃げ切る自信がない。

怖いけど後ろを振り返るしかない。

「はぁ、はっ……はぁ」

俺は止まって後ろを見た。

「……良かった」

熊は追いかけてきてなかった。

「い、伊吹さん……あ、ごめん！」

安心したことで自分が伊吹さんの手を握っていたことに気がついた。慌てて手を離す。

「だ、大丈夫……です」

そう返事した伊吹さんはたいして息も上がっていない様子だった。

「あ、あれ……熊だったよね？」

見間違いないことを確認する為に伊吹さんに尋ねる。

「は、はい。……熊、だったと……思います」

やっぱり見間違いじゃなかったんだな。

「ほんと……予想通りの展開すぎる」

俺の予感ってなんで嫌な方ばかり当たるんだろう。

「凄い……です」

妙に感心したように伊吹さんが呟く。だけど、そんなことで感心されても正直言って嬉しくはない。

と、俺はここである重大な事実に気がついた。

「伊吹さん……あのさ」

「なん……ですか？」

「ここ……どこだ分かる？」

俺は辺りを見渡して呆然と問いかけた。

見渡す限りの木、木、木。というか樹。どっちから来てどこへ向

かえばいいのか全く見当もつかない。

「ま、迷……った？ い、伊吹さんは帰り道分かる！？」

「あの……えっと……ごめんなさい」

「と、とにかく動こう。歩いてればそのうち帰れるよ」

俺はここで大きな間違いを犯してしまった。こういった場合はじつとして助けを待つほうが懸命だ。動けば体力も減るし、危険もあるかもしれない。ただどこのときの俺はそんな判断は出来なかった。

伊吹さんと二人で歩き出す。

だが懐中電灯を落としてしまった今、暗闇にも慣れうっすらと見えてはいるが足元が覚束ない。

足元を探りつつ進む。途中――

「あ、ご、ごめん！」

「い、いえ……こちらこそ」

伊吹さんと体が何度もぶつかる。

暗くてお互いの距離が上手く掴めないからだだった。下手したら直ぐにはぐれてしまいそうだ。

「伊吹さん……ごめん！」

俺は伊吹さんの手を再び握った。

「あ、あの……」

伊吹さんの焦った声。

「あの、嫌かもしれないけどはぐれたら大変だから……今だけごめん」

「あ、はい……驚いただけで……大丈夫、です」

伊吹さんから了解ももらえた。嫌がられてなくてよかった。

……実は怖いから、恥ずかしいより怖いという思いが勝ってしまった結果手を繋ぐという暴挙に出たなんてことは、ない。ないからな。

伊吹さんの手を引いて足を踏み出した。

「早くみんなの所へ帰――うわっ!？」

踏み出した先には……何もなかった。足が何かを踏みしめる感触は感じられない。

「――え？」

伊吹さんの呆気にとられた声。

そして

「わあああああつ!!」

「きゃあ――!!」

足を踏み外した俺、そんな俺と手を繋いでしまっていた伊吹さん。二人一緒に落ちていった。

「……………ん？」

目を覚ます。

「そうか……落ちたんだよな。あんまり高くなかったのかな……怪我もないし」

俺は寝たままの体勢で体を触って異変がないか確かめる。

怪我がないことを確認してから視線だけ動かして周りを見してみる。辺りはまだ暗かった。あまり時間が経ってないのか……それとも一日以上気絶してしまっていたのか。現状ではそれらを確認する術がない。

携帯をテントに置いてきてしまったのを後悔する。

「……っ!？」

起き上がろうと体を触っていた手を動かしたとき、なんだか柔らかいものに触れた。地面では有り得ない柔らかさだった。

……自分の体でもない。

上半身を起こして手で触れているモノを確かめる。

「――伊吹さんっ!？」

それは気絶している伊吹さんだった。

そうだった。俺の所為で伊吹さんも落ちてしまったんだった。

「伊吹さん、大丈夫!？」

俺は伊吹さんの体を揺さぶる。

「……………んう……………」

吐息を漏らす伊吹さん。

良かった……生きてる。

俺はさらに伊吹さんを揺さぶる。暫くして伊吹さんが目を覚ます。

「……………えっ……………春田君？」

起きて直ぐ、目の前に居る俺に驚いて目を見開いた。

その後、伊吹さんにも怪我や異変がないか自分で調べてもらった。

「……………いたっ……………!」

伊吹さんは足首を怪我していた。

捻ったのか……折れてはいないが歩くのは辛そうだった。俺達は

自力での帰還を諦めざるをえなかった。

「……ごめんなさい」

申し訳無さそうに謝る伊吹さん。

「あ、謝るのは俺の方だって！ 俺の所為で怪我させちゃったんだし」

女の子に怪我をさせてしまう状況がこんなにも罪悪感を感じさせるなんて初めて知った。……最悪の気分だった。

「みんなも探してくれてると思うし……ここで待つしかないよね」

「それが……良いと思います」

俺の意見に伊吹さんも賛同してくれる。

「はぁ……お、お腹減ったな！」

少しでも気を紛らわせようと全く関係のない話を始める俺。なんの脈絡もなさすぎたか……伊吹さんがキョトンとしている。

「……ふふ……そうですね。夕飯……あれだけ……ですもんね」

あれだけってのはあれだよな。ライスなしカレー。

「うん。伊吹さんはお腹減らない？」

伊吹さんが話に乗ってきてくれたのは有難かった。俺はさらにその線で会話を試みることにした。

「ちよっとだけ……空きました」

「だよね。てか米が流れるってどういう状況なんだろう？」

「ミオちゃん……お料理……その、なんて言うか、出来ないから」

ミオちゃん……？ ああ、三上さんのことか。美織だからミオちゃんね。

「今岡も……どう考えても出来ないしなあ。組み合わせが間違いだったな」

「……そうですね」

そして俺と伊吹さんは笑い合う。

そのとき――

「……っ!？」

背後でガサリと音がした。

助けに来てくれた誰かなら声をかけてくるはずだ。

隣を見ると伊吹さんも固まっている。

ガサツ、ガサリ、とまた音がする。それも段々近づいてきているようだ。

「い、伊吹さ——」

言いかけて止まる。

背後から俺の目の前に何かが投げられたからだ。

拾ってみるとそれは——落としたはずの懐中電灯だった。

明かりは……点く!

俺は怪我をした伊吹さんの盾になる位置に移動して振り返った。
明かりを向ける。

「……………なっ!？」

驚愕の声を上げる。

そこに立っているのは見覚えのある熊。

そこからさらに顔へと明かりを移動させ——

「アンタかよっ!!」

思いつきりツツコんだ。

熊の顔。口を大きく開けた熊。

その口の中にもうひとつの顔があった。

それは俺のよく知る人物で——

「がおー」

「がおーじゃねえっ!」

懐中電灯を投げつけてやった。

「女性にこのような暴力的な行いをするのは感心しませんよ樹様」

「あなたの所為でこっちはけが人も出てるんですけどね!？」

熊の口から見える顔……いや、やけにリアルな熊の着ぐるみを着

ているのは、アリサさんだった。

なぜ、居るのか。どうして着ぐるみなんて着てるのか。山ほど訊きたいことはあるんだけど、今は……

「色々言いたいことはあるけど、まずは——」

「まずはそちらの方の手当てをします。その後、学校の皆さんのところまでご案内致します」

アリサさんはこちらの言いたいことを完璧に把握していた。

テキパキと伊吹さんの手当てを済ませたアリサさんは、

「それでは着いてきてください、樹様」

「伊吹さんは？ 足、怪我して歩けないんだけど」

「ご心配なく」

アリサさんは一言だけ言って伊吹さんを抱きかかえた。

俗に言うお姫様抱っこで。

「伊吹様、申し訳ありません。樹様の方が良いと思いますが、あの方は非力ですので今日は私で我慢してください」

「え、あ、あの……その……えっと」

異様にうろたえる伊吹さん。

「つか非力ってなんだよ!!」

そんな伊吹さんよりもそんなことを気にする自分は本当にちっぽけな人間だと思う。思うけど言わずにはいられない。

「それでは出発します」

「おい！ 非力って——」

俺の言葉は完璧無視を決め込むアリサさんに文句を言いながらも俺はアリサさんの後ろを歩いていった。

6話 日常

俺の朝はアリサさんに起こされるところから始まる。

「朝です、樹様。起きてください」

アリサさんが声をかけながら控えめに俺の肩を揺する。

「んう……あ、と、五分……」

俺はお決まりのセリフを吐いて布団に潜る。

アリサさんの時間の正確さは良く分かってる。あと五分ぐらい布団から出なくても余裕で間に合うほどの時間に毎朝起こしにきてくれる。

「起きてください。朝ごはんが覚めてしまいますよ」

それでもアリサさんは布団に潜った俺を優しく揺さぶる。それでも俺は布団から出る気はない。

「樹様、樹様——」

何度か呼びかけていたアリサさんの声が不意に途切れる。それと共に布団からも手が離れて体の揺れが収まった。

どうやら諦めてくれ——

「しょうがないですね……ばら最後の手段に移らせていただきます」
てはいなかった。

そんな声の後にウィーンという耳をつんざくような大音量の機械音が聞こえてきた。

その音を聞いた途端に今すぐに布団を出た方がいいという予感。命が危ない、そんな危機感を覚えていた。

「な、なんだっ、いったい!？」

耳を押さえて布団を飛び出し、目を開ける。

視線の先にいたのは——布団の横に立ち、チェンソーを構えているアリサさんだった。樹齢ウン百年の大本も真っ二つに出来そうな代物だった。

「あ、起きてしまわれましたか」

アリサさんが心底残念そうに言う。

「……………」

意味の分からないその姿に絶句。

メイドさんがチェーンソーというアンバランスさもそうだが、何よりも何故人を起こすのにチェーンソー？

「……………あの、それで……………いったいなにを？」

アリサさんの持つチェーンソーを指差して尋ねる。

「起こそうとしたのですが？」

チェーンソーのスイッチを切ったアリサさんは当然といった風に

答えた。

「起こす？ それで？ どうやって？」

叩くとか？ まさか本来の使い方をするってことはないよな…………。

「どうって……………こう、サクッと」

アリサさんは言葉と共に上から下へチェーンソーを動かす。

「さ、サクッと——それは起きる前に死ぬから！」

「そこはギリギリ加減するので問題ありません」

「それでどうやって加減を！？」

「朝からうるさいご主人様ですね」

そう言って溜息をつくアリサさん。

「うるさいって——そりゃアンタのせいだろ！？」

「それでは、朝ごはんは用意できていますので着替えてさっさと来てください」

いつのまにかドアまで移動していたアリサさんは俺の言葉を見向きもせず、一言も言いたくないことを言っただけで出て行ってしまった。

俺がなかなか起きないときはあの手この手で起こそうとしてくるけど、今日はなんというか……………直球って感じだったなあ。

「はあ……………着替えよ」

暫くアリサさんが出て行った方を見ていたが、大きく溜息を吐いて着替えを始めた。

朝食を食べ、家を出る。

時間は夏休み前よりも大分早い。……いや、夏休み前というか林間学校前と比べて、だ。

それは『ある事』が新しく日課になったから。

玄関を出て直ぐの駐車場（家には車がないのに結構デカイ。屋根までついている）。俺はそこに停めてある自転車に跨る。これも新たに加わった日課である。今までは登校に自転車なんか使ってなかった。

「いってらっしゃいませ、樹様」

アリサさんは毎日、玄関を出てここまで見送りにきてくれる。

「うん。いってきます」

そう言って俺は自転車を漕ぎ出した。学校とは“反対方向”に。十五分ぐらい自転車を走らせると目的の場所が見えてくる。さらにその場所の前に人影。

その人物の目の前で止まって声をかける。

「おはよう、伊吹さん」

「お、おはよう……ございます」

ここは伊吹さんの家の前。目の前の、この辺りでは結構大きく防犯も確りしてそうなオシャレなマンションが伊吹さんの家だ。

彼女は三日前、林間学校で足を痛めた。骨折はしていないようだが骨にヒビが入ってしまい直ぐには治らない。歩くのも松葉杖を使わなければならず学校まで登校するのはきつい。だから、俺が送り迎えをすることになった。伊吹さんが怪我をしてしまったのは俺の所為でもあるし（アリサさんが原因でもあるが）、これは俺が自分から言い出したことだった。

「それじゃ、乗って」

「は、はい」

伊吹さんが荷台に腰掛ける。荷物も預かって前のかごへ入れる。
「乗れた？」

「はい」

「よし。じゃあ行くよ」

俺がそう言うのと伊吹さんは俺の腰に手を回す。それを確認してから今度は学校へ向かい再び自転車を走らせていく。

この腰に手を回す仕草なんだけど……最初はえらくドキドキした。女の子とこんなに密着することなんてなかったし、そもそも二人乗り自体初めての経験だった。それに、なんと言うか……伊吹さんの胸が背中に当たる感触がもうほんと想像を絶する柔らかさと言うかなんとか着痩せするタイプなのか伊吹さんって意外と胸大きいです。そんな感じで俺の心臓はバクンバクン言ってたわけだ。

最初に比べ今日はまだ緊張も少ない。慣れ……てきたのかな？

それでも初日ほどじゃないが心臓の鼓動は凄いことになっている。今、伊吹さんとともに目を合わせられる気がしない。

二人乗りで学校に着くまでお互いあまり話さない。俺は緊張を悟られないように前だけを見て運転に集中している。前だけを見ているため伊吹さんがどんな顔をして、何を考えているのかも分からないが彼女も何も話さない。

今までの人生で何度も感じてきたような嫌な沈黙ではない……と思う。まあ、このままでもいいかと思えるぐらいに。

学校に着くと、まず下駄箱の前に伊吹さんを送り届ける。それから駐輪場へと自転車を停めに向かう。駐輪場は俺達の学年の通う校舎からは大分離れた場所にある。怪我をしている伊吹さんをそこから歩かせるわけにもいかないからだ。

駐輪場から下駄箱へ戻ってくると、伊吹さんは俺を待っていてくれる。先に行ってもいいと言っても彼女はいつもここで俺を待っている。さらに、このときには伊吹さんの横に三上さんもいたりする。伊吹さんに合わせ、林間学校前よりも学校に着く時間が早くなった為に三上さんとも丁度同じ時間に学校に着くようになったからだ。

「おはよう、三上さん」

「はい、おはよう〜！ 今日を送り迎えご苦労だね」
朝から満面の笑みで元気のいい三上さん。

「いや、怪我させちゃったの俺の所為だし……」

「そ、そんなこと……ないです！」

俺の呟きに伊吹さんが彼女にしては大きな声で答える。

「ははは、まあいいけど。いや〜朝から二人乗りで登校とは甘酸っぱいですなあ！」

三上さんは俺の背中をバシバシ叩きながら言う。……おっさんか。
「理由知ってるんだからそんなんじゃないって分かるだろ」

俺はそっぽを向いて呟いた。

「それでも、だよ。理由はそんなんでも一緒に自転車乗って他の感情もあるんでない？」

「そ、それは……」

ないと言えば嘘になるな。色々、本人の前では言えないけど。

「沙代はどうなん、そこどこ？」

「えっ……あの……私は……」

「あはははは、そっかそっか！」

なにやら嬉しそうな三上さんの声。二人がどんな表情をしているのかそっぽ向いてしまった俺には分からない。

そんな風に話していると教室に着く。俺も二人もそれぞれ自分の席へと散っていく。

それから伊吹さんと三上さんは他の女生徒たちと談笑を始める。

俺は……いつも通り今岡が来るまで自分の席でポツンだ。

今岡が登校してくるのはいつも朝のHRの始まるギリギリの時間だ。たまに遅刻したり、逆に早かったりするので、完全に気分次第なのだろう。

その後、授業を受けて放課後。

伊吹さんはバレー部のエースらしいのだが怪我のため練習に参加

できないので帰る時間も帰宅部の俺と一緒にだ。

駐輪場から自転車に乗って下駄箱へ。伊吹さんを後ろに乗せて彼女の家に向かう。

「それじゃ、また明日」

マンションの前で伊吹さんを下ろし別れの挨拶。

「はい……ありがとうございます」

頭を下げる伊吹さん。正直そんなことをされると困ってしまうのだが。

「いや、いいよ。何度も言うけど俺に責任があるんだし、俺がやりたくてやってるんだしさ」

言ってて恥ずかしくはってしまったので顔を合わせないようにして頬を掻く。

「……………はい」

「明日も迎えに来るから、さよならっ！」

そう言って俺は自転車を漕ぐ。

「はい……さようなら……」

伊吹さんの声が小さくなっていくのを感じながら、俺は後ろも見ないで手を振った。

「ただいま」

「お帰りなさいませ」

玄関でアリサさんのお出迎え。

玄関を開けたときには既にそこにいるアリサさん。一体どうやって俺が帰ってくるのを察しているのだろう……謎だ。

「今日も疲れた……ん？ いい匂いがする」

これは俺の大好きなアレの匂いじゃないか！

「もしかして今日のご飯ってビーフシ」

「それより樹様」

「……………何？」

「今日、こんなものが樹様に届きました」

差し出されたのは袋というか封筒というかそんな感じのものだった。

「なに、これ——って、これは!？」

俺宛の封筒。宛名の横には『これで貴方も身長一八〇センチ!? 脅威の効能! これでボクは一ヶ月で一五センチ伸びました!』とデカデカと書かれていた。

前に通販で衝動買いしてしまったものだった。

それにしても、もっとこう……業者さんもさあ、中身が分からないように誤魔化してくれてもよくね?

「……樹様」

アリサさんが哀れなものを見る目で俺を見ていた。

「い、いいだろ! 俺が何買ったって!」

俺は封筒を鞆に仕舞いながら叫んだ。

「それは自由ですが……凄く言い辛いことなのですが……効果は無いと思います」

「言い切ったっ!？」

どこが言い辛いんだよ。

断言じゃないか……。

「希望持ったっていいだろ!？」

もしかしたら俺には効くかもしれないじゃないか。

「はぁ……そうですね。夢を見るのは自由ですよね」

「何、その良い笑顔!？」

「ちっちゃい身体に大きな夢。素晴らしいです」

「ち、ちちちちちいって言うな!」

「ミニマムなボディにビッグなドリーム」

「スモールより更に小さい!？」

「はい、今日のメニューはビーフシチューです」

「あ、あれ? 戻った? え、なんなの?」

「いつまでも玄関で話さないで着替えてきてはいかがですか?」

「あ、あんたの所為だろうが!」

「それでは夕飯の準備がありますので」

「き、聞け——っ!!」

立ち去ろうとするアリサさんの背中に力の限り叫ぶのだった。

7話 テスト

二学期と言えば体育祭に文化祭。学生にとって最大級の行事が目白押しの時期である。

俺も勿論それらの行事を内心楽しみにしていた。何故ならば、今年は人生で初めて……遠くから独りで眺めるのではなく、自分自身が体育祭の競技や文化祭のクラスの出し物に皆と協力して取り組めるのではないかと期待しているからだ。

だが、その前に乗り越えなければならぬものがある。

それはテストと言う名の地獄。ほとんどの学校であるだろう中間、期末、実力と言った単語が前に付くテストたち。俺の通う学校は、一つの学期毎に中間と期末があるオーソドックスなシステムになっていた。

テスト……それは学生にとって最大の敵。そして避けることの出来ない試練である。これ乗り越えなければ様々な行事を楽しめなくなってしまう。

俺の成績は……ギリギリ平均点といったところだ。一学期のテストもそうだった。なんとか平均点を超え、追試も補習もなかったのだが、今回のテストは前回よりも難しくなっているのは明白で、今回も平均点を取れるかと言えば自信を持って取れるとは言えない。そんな訳で今回は真面目に勉強しようと思ったのだった。

「まさか、本当にメイドが居るなんて……」

「……………」

なにやら慄いた様子で三上さんが呟いた。伊吹さんもアリサさんを見て息を呑んでいる。

まあ、確かに……家に入ったらメイドさんが出迎えてくれました。なんて現実味に欠けることが目の前で起こればそんな反応も仕方な

いのかもしれない。

「おじゃまします！ アリサさん相変わらず美人ですね！」
今岡は二人とは対照的に満面の笑顔だった。

「それじゃ、まあ、上がって」

俺はアリサさんに絡む今岡を無視して二人に言った。

「あ、うん……邪魔します」

「し……失礼、します」

俺の言葉で我に返ったのか、二人はアリサさんから視線を外して靴を脱いだ。

「座って待ってて。今岡連れてくるから」

部屋に二人を案内した俺は、こっちにやってくる様子のない今岡を連れに一階へと降りていく。

アリサさんと暮らすようになってから、部屋に見られて危険なのは置かなくなったので女の子が部屋に居ようと気にしないで空けられる。

一階では今岡がアリサさんにしつこく付き纏っていた。

「お前、何しに来たの？」

俺は背後から今岡の首を掴んで冷ややかに言う。

「アリサさんに会いに来たに決まってんだろっ！」
キレられた。

「え……いや、勉強」

戸惑いながらも本来の目的を告げる。

「そんなん知るか！ 俺はアリサさんとお話するんだ！」

駄々っ子のように手足をじたばたさせる今岡に軽くイラッとする。

「いい加減にしないと二度とうちに呼ばない」

俺は今岡の耳元で静かに告げる。

「すみませんでしたっ！」

素早い変わり身だった。

謝った今岡は駆け足で二階へと上がっていった。
それを見届けて、

「アリサさん。お茶とか頼める？」

アリサさんに尋ねる。

「はい。素晴らしいタイミングでお持ちいたします」

「……素晴らしいタイミングって何？」

「例えば、樹様がお友達のお二人に野獣のように迫った――」

「ないからっ！」

アリサさんの言葉の途中でそれ以上聞かないように怒鳴った。

「絶対無いから！　すぐに持ってきてくれればいいから！」

俺はそれだけ言って自分の部屋へと向かった。

一つのテーブルを四人で囲んで勉強。それぞれがノートや教科書を自分の前に広げている。その近くに飲み物が入ったコップ。テーブルの真ん中にはアリサさんの手製のお菓子。クッキーとか軽くつまめるものが数種類。

「それで……なんで家に普通にメイドがいるのよ？」

勉強を始めて数分。三上さんが訊いてきた。

「実のところ……俺にも良く、わからないです」

俺は素直な気持ちを伝えた。なんせ、引越してきたら居たのだ。それ以外にどう言えというのだろう。

「そ、それで……あ、あの人と、一緒に住んでるの？」

続けて質問してくる三上さん。

「あ、うん。……アリサさんもこの家に住んでるけど」

「へ、へえ……そうなんだ」

引き攣った表情をする。

「きよ、今日はご両親いないみたいだけど共働き？」

「まあ、共働き……なのかなあ？」

どうなんだろう。父さんは母さんと一緒にいたいのが為に会社を辞めたわけだけど、今は母さんの手伝いとかしてるのかな。

「というか、家には俺とアリサさんしか住んでないよ？」

やっぱりこんな家に住んでるんじゃ一人暮らし（メイドもいるか

ら二人暮しだけど）だとは思えないよな、普通。

「は、はあっ!？」

三上さんが素っ頓狂な声を上げた。

「な、なに？」

見る見る怒りに顔を赤くしていく三上さんに怯えながら尋ねる。

「な、なになって……それって二人で住んでるってことでしょ!？」

「は、はい。そうなります」

自然と敬語になってしまった。

「そ、そそ、それって……ど、同棲じゃない」

「ど、同棲っ!？」

今度は俺が素っ頓狂な声を上げる番だった。

同棲って……それは恋人同士が一緒に暮らすって意味じゃないか。

「ち、違う! 俺とアリサさんは恋人じゃない!」

「こ、恋人ですって!？」

「だから違うって! アリサさんはメイド以外の何者でもないよ!」

「メイドって……主人なのをいいことにあんな事やこんな事を……」

小声でぶつぶつ呟いている三上さん。

「――この変態がっ!！」

「ぬぐあっ!？」

三上さんの中でどういう答えに行き着いたのかはわからないが、

三上さんから俺に発せられたのは罵倒、それと頬へのビンタだった。

この場はもう滅茶苦茶だった。なにがなんだか分からない。

「お、落ち……ついて」

伊吹さんが立ち上がった三上さんを後ろから羽交い絞めにする。

「そうだ! お前ら落ち着けよ!」

それでもなお、俺へと掴みかかろうとする三上さんを制したのは

今岡の怒声だった。

「落ち着いたか？」

俺達の前に仁王立ちで今岡。

三上さんは座ってコップに入っていたオレンジジュースを一気に飲み干した。俺も座って今岡を見る。

「まず春田」

俺の名前を呼ぶ今岡。

「は、はい！」

「お前はすぐにパニックるな」

「ご、ごめんなさい」

今岡からかつて感じたことがないほどの威圧感を感じる。

「そして三上」

「……なによ？」

ぶすっとした表情だが一応返事はする三上さん。

「お前は勘違いしている」

「勘違い？」

今岡の言葉に一瞬怒りを忘れ素に戻って質問する。

俺も今岡の言葉の意味が理解できない。

「春田とアリサさんはお前が思ってるような関係じゃないんだよ」

今岡は俺の味方をして誤解を解こうとしてくれているようだ。

俺は初めて見るかもしれない今岡の真剣な表情を見て、若干だが確かに感動してしまった。

「確かに二人は一緒に住んでいる。だが、だがしかし！」

今岡は力強く言葉を区切って、

「例えばどんなに春田がアリサさんを想おうとも二人が結ばれることはないのだよ！」

あれ……なんか話がおかしな方向に進んでないか？

「ちょっと待て！　なんで俺がアリサさんを想うんだよ！？」

そこは訂正しなきゃならない。

「ちょっと黙れ」

俺の必死の言葉は一言で切って捨てられた。

「結ばれないって……なんで断言できるのよ？」

三上さんが今岡に訊く。

「それはな……アリサさんには結ばれるべき運命の男が既に居るからだ！」

今岡は拳を握り力いっぱい宣言した。

「……………は？」

俺は間拔けな声を出した。

アリサさんにそんな人がいたのか？ 初耳だ。

「一応訊くけど、それって誰よ？」

何言ってるんのコイツ、という視線を今岡に向けて溜息交じりに尋ねる三上さん。

「それは勿論——俺だっ！！」

何を言っているんだろう今岡は。

俺は今、さっきの三上さんと同じような表情をしているに違いない。

横目で三上さん達を見る。三上さんは明らかに引いていた。伊吹さんはポカーンとしている。

「はぁ……真面目に聞いた私が馬鹿だったわ」

「ど、どういう意味だよ！？」

「妄想は自分の中だけに留めておきなさいよ。アンタとメイドさんが話してるのは玄関で一瞬しか見てないけど、それでもメイドさんがアンタに興味もない事ぐらいはわかったわ」

三上さんは残酷な真実を無慈悲に告げた。

「そんなことないわっ！ アホか！」

「哀れね」

「哀れむな！ くそっ！ ベージュ色のオバサン臭いパンツを愛用してる委員長様に女心が分かるはずがない！」

「アンタよりは分かってるつもりだけど？ ——というか貴様っ！ どうして知っている！？」

今岡の胸倉を掴む三上さん。

知っている……って、マジでそんなパンツ愛用してるのか。それはちよっとどうかと思います。

「はんっ、俺に知らないことなどない！ 特に女の下着に関しては！」

なんの自慢にもならないような事を得意気に叫ぶ今岡。

「ちなみに今日の委員長はそれだけじゃない」

「……どうということ？」

「三枚千円だ！」

「——死ねっ！」

三上さんの肘が良い角度で今岡の顎に決まった。

「消す！ 記憶を消してやる！ 面倒だから命も消してやる！」

顔を真っ赤にして怒っている三上さんは気絶した今岡に馬乗りになって殴り続けていた。

7話 (2)

今日って何のために集まったんだっけ……。

俺は目の前で繰り広げられる今岡と三上さんの死闘を眺めながら思った。

「あ、あの……二人とも……お、落ち……落ち着いて」

オロオロとか細い声で二人を宥める伊吹さんだったが、こういうことには不慣れなのだろうかいつも以上に声が出ていなかった。そんな伊吹さんの声が二人に届くはずもなく乱闘は続く。

どうしたらいいのだろう……この状況は。

俺に二人を止められるとは思えない。最悪巻き込まれることになる。そんなのはゴメンだった。

「……………はあ」

俺は溜息を吐いて部屋を出た。

どうか、修復不可能なほど部屋を荒らされませんように。ただそれだけを願って。

「そうだよ！ 勉強だよ！ 勉強する為に集まったんだった」

リビングでアリサさんの入れてくれた紅茶を飲んで一息つくと、唐突に今日の予定を思い出した。

「……何を言っているのですか？」

不思議そうに尋ねてくるアリサさん。

「いや、今日ってテスト勉強する為に皆集まったのに……なんで俺はこんな所で独りでお茶なんか飲んでるんだらうなって」

「友達がいらっしやらないからでは？」

俺の疑問にアリサさんは当然といった顔で即答した。

「いるよ！？ いなかったら皆集まってなんかこないよ！？」

「皆さん、ただ遊べる場所を確保したかっただけでは？」

「ええっ！？」

それ、どんなイジメ!?

自分の家に集まったのに仲間はずれとか、悲しすぎるんですけど!?

「まあ冗談はこのぐらいにして」

「良かった! 冗談だったんだ!？」

ちよっとそうかもしれないか思ってしまったじゃないか。

「ええ……多分」

「多分!？」

「あ、いえ、冗談です」

「ホント!? 信じていい!？」

「……………」

「何で目を逸らすの!？」

立ち上がって叫ぶ。

これは、もう……確実にからかわれてる気がする。

「それはそうと……樹様」

「……………なに？」

椅子に座りなおして返事をする。

「普段勉強しない樹様がテストの為に勉強するということは、結構厳しい状況ということでしょうか？」

普通の質問にほっとしつつ答える。

「うん。前のテストでさえ平均ギリギリだったからね。今回は勉強しないと厳しいかな」

「……でしようね」

でしようね? でしようねってどういうこと?

「もしかして……俺の成績、知ってた？」

「はい。テストの点数、一学期の成績表、全て把握しています」

「ええ!？」

テストも成績表も見せたことないのに!?

「メイドとして当然です」

俺の内心を読んだかのようにアリサさんが言った。

メイドって凄えっ——じゃなくて!

「プ、プライバシーとかないんですかね?」

「ですが……日々の生活だけでなく学業が疎かにならないよう主人を教育するのもメイドの務めですから。樹様のお母様にもそう言われています」

「そ、そうなんだ……」

知らなかったよ。

でもそうだよな。高校生で一人暮らしさせて、知らない間に退学してたとかになってたら最悪だもんな。

「あれ? てことはアリサさんが勉強教えてくれるってこと?」

確かアリサさんって凄く頭良いんだよな。

「そうなりますね」

「だったらテストにでそうなところかアリサさんなら分かるんじゃない?」

何でも知ってるアリサさん、と俺は思っている。

まあ、さすがにテストの問題は分からなくても、出そうなところを予想するぐらいなら出来そうだと思うた。

「分かりますよ、大体は。ですが……」

アリサさんは冷ややかな瞳を俺に向け、

「私が教えるからにはテストの為だけの勉強をさせるつもりはありません。キッチリと学力を上げていただきます」

アリサさんの言葉に得体の知れない迫力を感じた。

「あ、あはは……ま、まあ、今回は皆と頑張ってみるよ」

俺は引き攣った愛想笑いを浮かべながらアリサさんの勉強会が開かれることのないように頑張ろうと決意した。

「じゃ、じゃあ、そろそろ部屋に戻るよ!」

俺は早口に言って早々と自分の部屋へと向かった。

「そうですか……残念です」

立ち去る瞬間、アリサさんの呟きが聞こえた気がしたが聞かなかったことにしよう。

「あ、終わったんだ」

部屋に戻った第一声。

部屋を出て行くときには繰り広げられていた乱闘が嘘のように部屋の中は静かだった。

部屋も全く荒れていない。

「やっと戻ってきたわね」

「ご、ごめんね……春田君」

ふてぶてしく俺を睨みつける三上さん。

というか伊吹さん。貴方が謝ることなんてこれっぽっちもないのですよ。

「ま、今日のところは深く追求しないことにするわ」
「へ？」

一体三上さんは何の話をしてるんだ？

「あのメイドさんのことよ」

「あ、ああ……そのこと」

「別に恋人とかって訳じゃないんでしょ？」

「そ、それは絶対に有り得ないよ！」

「そう。……それならまあいいわ。納得……は出来ないけど引き下がつてあげる」

「そ、そうですか」

すっごい上から目線だけど……これ以上追求しないって言うならそれでいいか。

ところで……

「そういえば……今岡は？」

「そこ」

三上さんがあごで部屋の隅を指す。

「そこって……んなっ!？」

そこにはボロ雑巾のようにボッロボロになった今岡が捨てられていた。ゴミ箱の隣に。

「い、今岡っ!？」

今岡に駆け寄る。

「は、春田……か？」

「あ、ああ」

「そ、そうか……春田、ど、どこにいるんだ？ もっと近くに来てくれ」

今岡に言われるまますぐ傍にまで移動する。

「そ、そこか……悪いな、もう、目が……見えないんだ」

「い、今……岡っ」

それはお前が目を瞑っているからだよ今岡。開けろ、目。

「お、お前に伝えることが……ある」

ゴホゴホと咳き込む今岡。

「な、なんだ？」

「い、委員長は……オバサン臭いパンツを穿いてる」

後ろから「まだ言うかつ!」と三上さんの怒る声。

「だ、だが……そんな委員長も最近、勝負下着を購入した。一万二千円だ」

「そ、そうなのか」

一万二千円の下着ってどんなのだろう？ 単純に興味があるぞ。

三上さんを見ると頬を赤く染めて「だから何で知ってるのよ!？」と叫んでいた。どうやら本当らしい。

それにしても……何でコイツはそんなに詳しいんだろう。ちょっと怖い。

「お、俺はそれを穿いた委員長を見ることは……出来ない……だろう。だから、春田。それを見るのはお前に託したい」

「お前何言ってる!？」

三上さんが本気で叫んだ。その勢いのまま近くにあったティッシュの箱を今岡に投げつける。

「ぐっ……頼んだぞ、春田。さ、最後に……アリサさんとキスした……かったがくっ」

『がくっ』と口に出して今岡それきり動かなくなった。

「今岡あ——っ!!」

最後もなにも、一度もしたことないじゃないか。

「あ、あの……えっと……」

伊吹さんの戸惑った声。

「なによ、これ」

確実に呆れている三上さん。

本当に、なんだ、これ……？

呆れつつ、温泉のときといい、自分の想像以上のノリのよさに驚いてしまっていた。

その日は結局勉強出来なかった。

余談だが……

後日、ちょっと恐怖しつつ今岡に尋ねたところ、実は委員長が下着を買う店では今岡のお姉さんが働いているらしい。

客の情報を弟に教えるのはどうかと思うが、今岡のお姉さんだしなっでことで納得しておくことにしたのだった。

三上さんは「もうあの店で買えない!」とちょっと残念そうにしていた。結構お気に入りの店だったらしい。

7話 (3)

……スパルタ。

……マジ、スパルタ。

あの日……皆がウチにやってきたあの日、全く勉強することができなかった俺は、結局アリサさんに頼み込んだ。

教えてください、と。

あの日の俺に言ってやりたい……『やめておけ』とな。

あれからテストまでの数日間、俺は寝る時間以外はほとんど勉強していたんじゃないかと思う。

アリサさんが付きっ切りで……。

ぶっ続けで勉強しても疲れるだけで頭に入らないってことで適度な休憩とアリサさんお手製のお菓子なんか食べつつ頑張った。

ほんとにもう、今までで一番頑張った。

ま、そのおかげでテストは無事乗り切った。今までで一番良い成績で。

「よう、今岡……死んでるな」

テストが却ってきてからずっと、机に突っ伏して動かない今岡に声をかける。

「春田、か。何か用か？」

「別に用とかじゃないけど……テスト悪かったのか？」

それ以外にないだろうけど、一応訊いておく。

「悪かった。それはもう……悪かった」

そんなにか。

突っ伏したまま落ち込んだ声を出す今岡をどう慰めていいのやら。

「ちなみに……どのぐらい？」

「赤点」

「どの教科？」

「全部」

「へえー全部かーって全部っ!？」

それは悪すぎるだろ!

「うん……全教科追試だって……」

「そ、そうか……」

かける言葉が見つからない。そりゃ項垂れるわ。

「お前はいいよな。アリサさんに教わってたんだろ? ずっと、二人っきりで! 密室で!」

ガバアツと顔を上げると血走った眼で睨んでくる。

「いや、まあ、そうだけど……」

多分今岡が考えてることって実際とはかけ離れたイメージなんだろうな。

「ふん、お前みたいに恵まれた環境にいるやつは良いよな」

「恵まれてる……のか?」

俺が聞くと今岡は俺の胸倉を力一杯掴んできた。

「恵まれてるだろうがっ!!」

あまりの迫力に圧倒される。

「あんな広い家に最強に美人なメイドさんがいて様付けで呼ばれた挙げ句、密室に二人っきりになれる状況とかどんだけだよ!？」 死ねばいいのに」

ひでえっ! し、死ねばいいとか……思っても言っちゃ駄目だろ。それも本人にさ。

「そ、それは……なりたくてなった状況じゃ」

「はあっ!? お前……なりたくてもなれねえヤツのこと少しは考えてから物言えよ!」

「す、すいません」

な、なんで俺……怒られてるんだ?

「たくよ……これだから世間知らずは」

ふんと鼻を鳴らす。何で俺が悪い感じになってるんだろう……勉強しなかった今岡が悪いのに。

「それじゃ、俺はこれで……」

もう付き合ってられん。

「――待て」

去ろうとしたところ、肩を捕まれたので振り返る。

「まだ何か？」

八つ当たりなら他を当たって欲しいのだが……。

「お前はアリサさんのお陰で追試はなかったんだよな？」

「ええ、まあ」

それどころか人生最高得点でした。

「ならば話は分かるだろう？」

何一つ分かりません。

「何が？」

「だから！ 勉強を教えてくださいお願いします！」

今岡は怒りながら頭を下げるという器用な真似をしたのだが、怒る理由が分からない。普通に頼めよ。

「そのぐらいなら、別にいいけど……」

「よっしゃ！ じゃ、早速お前ん家行こうぜ！」

急に復活した今岡は自分の荷物を持って教室を出て行った。

「アリサさーん、ここが分からないんですけどお」

ウチに来るなり俺の部屋……ではなく、リビングのテーブルにノートや教科書を広げた今岡を訝しみつつも「まあ、いいか」とリビングで教える事にした。

だが、いざ始めてみると……今岡は俺ではなくアリサさんにしか質問しない。というか、俺の存在は今岡の目に入ってない。ここにいないこととして扱われていた。

「……この野郎……これが目的だったか」

傍から見ればアリサさんは快く丁寧に教えているように見えるが、実際はウザイと思っていることだろう。その証拠に……

「あ、なるほど。さすがアリサさん！ 分かりやすいですね！」
今岡の目がアリサさんから離れた途端、アリサさんは此方を見つ

めて親指を立てる。

そして――

「……………」

無言のまま、アリサさんには珍しく満面の笑みで『上』へ向け、クイツと動かす。

分かる。アリサさんが何を言いたいのか。

つまりアリサさんは『クイツを連れて部屋へ行け』と言いたいのだろう。

これは素直に言う事を聞いた方が良さそうだ。俺の想像以上にウザイと思ってるかもしれん。それにここで我関せずを貫いたら後でどんな目に合わされるか分からない。

「い、今岡！」

「何だよ、今良いとこなんだよ！」

勉強に良いトコも何も……。

「それより俺の部屋行こう。ほら、アリサさんも夕食の準備とかあるしさ」

「やだよ。俺はアリサさんに教えてもらうんだ」

やっぱり今岡に動く気はないらしい。

……どうすりゃいいんだろう。

「そんなこと言わずにさ――」

「うるさいなあ……行きたきゃ一人で行けよ」

お前、俺に勉強教えて欲しくて来たんじゃないのかよ……。例えばアリサさんが目当てだとしてもその言い方はどうよ？

「……………嫌われるよ」

俺は最終手段でアリサさんを利用する事にした。今岡を連れて行けと言っている（と思ってる）のはアリサさんだしそれくらい良いよな。

「なん、だと？」

今岡は戦慄して目を見開く。

「だから、嫌われるぞ？」

「な、なんでだよ!」

「しつこい男は嫌われる。それに……しつこいだけならまだしも、お前はアリサさんの仕事の邪魔までしている!」

「なっ!!」

「つまり……今岡。お前は嫌われるってことだ!」

俺は指を突きつけて言う。

……さすがにこんなので納得しないよな。

「さあ、春田君。アリサさんも忙しいんだ。早く君の部屋に行こうじゃないか」

簡単だった! なんとも簡単な男だった。

「そ、そうか」

「早くしろよ! 置いてくぞ」

俺が今岡の簡単っぷりに引き攣った顔をしている間に、今岡はさつさと一人で俺の部屋へ向かって行ってしまった。

「はあ……これでよかった?」

俺は溜息を吐いて今岡が完全に居なくなった事を確認すると、アリサさんに問いかけた。

「はい。全く期待していませんでしたが樹様にしては上出来です!」
いつもの無表情に戻ったアリサさん。

「それ、ひどくない? 俺、結構頑張ったよ?」

「そうですね。ではこうしましょう。今日の夕食は樹様の好きなものだけでご用意いたします」

「マジで!?!」

「はい」

「おっしゃ! なら今岡の相手してくるよ!」

「頑張ってください」

「うん!」

俺は夕食を楽しみに今岡の相手を頑張ろうと思った。

「……簡単ですね。樹様も」

「何か言った?」

アリサさんが何か呟いた気がしたので、俺は上機嫌のまま尋ねた。
「いえ、何も」

「そう？ んじゃ、美味しいのよろしく！」
言わなくても最高に美味しいものを作ってくれるだろうが、一応
言っておいてから自分の部屋に向かって歩き出した。

自分の部屋に入った俺が見たものは、俺の布団に勝手に寝そべっ
て週刊誌を広げる今岡だった。

「あゝ、アリサさんいねえとやる気しねえ」

完全にダレ切った様子で言う。

「お前……もう帰れよ」

俺は頭を抱え呟いた。

後日、追試を受けた今岡。

あの後、結局勉強に手をつけなかった今岡が自分の家に帰ってか
らするはずもなく……再び赤点を取り、補習が決まった。

再び俺に泣きついて家に来ようとしたのだが、俺は丁重にお断り
したのだった。

8話 ドキドキな二人旅行

十一月も終わりに差し掛かった頃。

その日、アリサはいつものように商店街へ買い物に来ていた。

そして、これまたいつものように主人である樹にはまず見せないであろう笑顔で店主の親父達を籠絡し、料金以上のサービスをせしめていた。

「おっと、そうだ……今、この商店街で福引やってるんだけどアリサちゃんもどうだい？」

そんな折、八百屋の親父がチケット片手にそんな話をする。

「福引……ですか？」

「おうよ！ 向こうで商店街の会長がやってるから引いてくるといい。景品も豪華だぜ？」

「そうですか。では頂いていきますね」

アリサは品物の料金を払い、チケットを受け取った。

「毎度っ！ アリサちゃんほんとに美人だから、今日も沢山オマケ付けといたよ！」

「いつも有難うございます」

アリサは笑顔でお礼を告げる。

「いーってことよ！ また来てくれよなっ！」

「はい。失礼します」

頭を下げ、アリサは福引所へ移動した。

「どうも」

「おや、アリサちゃんじゃないか。引くかい？」

福引き所の前までやってきたアリサを出迎えたのは鉢巻きにハッピという出で立ちの商店街の会長だった。

「はい。八百屋さんで券を頂きました」

言いながらアリサは会長に福引き券を渡す。

「一回ね。当てとくれよ……アリサちゃんの為に色々景品用意したんだからね！」

おかしいことを言う商店会長。

福引きの景品をアリサの為に用意したところでアリサがそれを引き当てる確立など相当低いだろうに……そもそもアリサが来なかったらどうするつもりだったのか。

「それは……ありがとうございます」

そんな風に思いつつも一応お礼を口にする。

「いやいや、アリサちゃんのためならこのぐらいお安い御用だよ」
頭をかいて照れている会長。

「さ、引いて引いて！　アリサちゃんなら絶対に当たるから！」

会長は自信満々な様子で自信の胸を叩いた。

何か細工でもしているのだろうか……そう訝しみながらもアリサは福引きの新井式廻轉抽籤器^{あらいしきかいてんちゆうせんき}、俗に言うガラガラを回した。

俗称の通り、回すと中に入っている無数の玉が転がるガラガラという音が聞こえる。何度か回すと中から玉が飛び出してくる。

「……………金色、ですか」

出てきたのは金色の玉だった。金色でハズレということはまずないであろう。ハズレどころか上位の物に違いない。

会長も玉の色を確認する。

「おお〜当たりい〜！！」

ベルをガラランガランと鳴らして会長が叫んだ。

「さっすがアリサちゃんだ！」

会長は嬉しそうに言いながら豪華に飾り付けられた封筒をアリサに手渡した。

「二泊三日、京都の旅。ペア旅行券だ！」

「京都……ですか」

「京都さ！　本当は海外旅行にしようと思ったんだけど副会長やってる妻に怒られてね……こんな商店街じゃそれが限界だったんだ。ごめんよアリサちゃん」

アリサは確認の為に普通に聞き返したただけなのに、物凄く落ち込んでしまった会長。

「いえ、凄く嬉しいです」

「ホントかい！？　アリサちゃんがそう言ってくれるなら良かったよ！　それで、その券はペアなんだが……是非一緒に」

「それでは、失礼しますね」

笑顔で頭を下げ、その場を去るアリサ。

「……………ア、アリサちゃん」

後にはアリサの去っていった方に手を伸ばし涙を流す会長が残された。

家へ帰る道すがら福引きで当てた封筒を眺めるアリサ。

「……………当たって……………しまいました」

呟いて溜息を漏らす。

京都旅行。二泊三日のペア旅行。

「……………どうでしょう」

途方に暮れた様子でもう一度溜息を吐くアリサだった。

☆ ☆ ☆

「……………」

アリサさんがおかしい。

何がおかしいって……………今日俺が学校から帰ってきてから一度もかわれていない。こんなのは有り得ない。それに普段もお喋りして訳じゃないんだけど、今日はホントに必要以上に喋らない。

「……………」

あまりの出来事に俺はジッとアリサさんを凝視してしまっているのだが、それさえも気にする様子は無い。

何か、手元の封筒らしきものを眺めて考え込んでいるみたいだ。あの封筒の中にアリサさんを平常でいられなくさせる何かが入っ

ているのだろうか。

気になるけど……訊くのが恐ろしい。

けど、こうしてても何も変わらないし……だったら思い切って尋ねてしまった方が良いよな。きっと。その後でどうなってしまうかなんて今は考えない方が良い。

「あの……アリサさん？」

俺は覚悟を決めアリサさんに話しかけた。

「……なにか御用でしょうか？」

アリサさんは手元に落としていた視線を此方に向け、何事もなかったかのようにいつもの表情でそう言った。

「用って言うかさ……それ、何？」

俺は封筒を指差して、

「何かそれ見て考え込んでるみたいだったけど……」
と、言葉が続けた。

「これですか……これは……」

言葉に詰まるアリサさん。

言い難いことなのか……あのアリサさんが？ ヤベ、覚悟決めたのに聞くのが怖くなってきた。

「実は今日……福引きで当ててしまいました」

「……………へっ？」

俺は『実は今日』の辺りで反射的に目を瞑ってしまったのだが、続けて聞こえてきた言葉に思わず呆けた間抜けな声を出してしまった。

「ふ、福引き？」

「はい」

「当たったの？」

「はい」

「えっと……何が？」

「それは……」

なるほど。その当たったものがアリサさんの悩みの原因な訳か。

「封筒ってことは現金とか金券とか？」

それ以外には思いつかないんだけど、でもそれだったらこんなに悩むことじゃないよな……あっ、もしかして商店街の会長とかの自作ポエムとか？　うわ、それはいらねえ。当たりっつーか大ハズレだよ。

「いえ、そういう物では……でも、近いといえば近いのでしょうか」
アリサさんの言葉に余計分からなくなる。

現金や金券と近いといえれば近い？　でも、そういう物じゃない？

「何を当てたの？」

「そうですね……見ていただければ分かるかと」

アリサさんがこちらに封筒を差し出す。

「……見てもいいの？」

「はい。構いません」

俺は封筒を受け取った。

「そ、それじゃ……見るよ？」

「どうぞ」

受け取った封筒の中身を取り出す。

出てきたのは何かの券。そこに書かれている文字を読む。

「二泊三日……京都旅行……二名様？」

そう書かれている。

旅行、ねえ……別に悩む事ないんじゃないか？

「えっと……行けばいいのでは？」

俺は封筒をアリサさんに返して言った。

「はあ……」

受け取りながら曖昧な返事をするアリサさん。

「ほら、たまには仕事忘れて楽しんできても良いんじゃないかな。

二名様ってことだし……妹さんと一緒にでも」

考えなしに口から出てきた言葉だけど、実際そう思う。アリサさんはメイドってことで休日なんて無いようなもんだし。

「……………」

考えているアリサさんにさらに告げる。

「三日ぐらい一人でも何とかなると思うしさ！」

「ですが……前に家を空けたとき」

「あれはほら……一ヶ月以上の長期だったし。三日ぐらいなんてことないって！」

「そうですか……でも、あの子は来ないと思います」

「へっ……何で？」

「それは、まあ、色々と」

言葉を濁すアリサさん。

二人の間に何かあるのだろうか。

「ですので、これは樹様にお譲りします」

と、封筒をこちらに差し出す。

「いや、これはアリサさんが当てた物だし」

俺は受け取らない。

貰っても……きつと誰かを誘うとか出来ないし。誘うとしても今岡ぐらいしか思いつかない。

今岡と二人で旅行……？ 正直勘弁願いたい。

「では……金券ショップで換金を」

「それはどうだろう……」

もったいなくない？ あ、そうか。それで現金や金券に近いって言うってたのか。

そういう所ってあれだよな……相当安くなるよな、多分。

「別にお金に困ってるとかじゃないでしょ？」

「はい。毎月随分余裕があります」

そうなんだ……母さんがいくら送ってきてるのか知らないけど余裕があるってアリサさんのおかげなのかな。

「なら使った方がいいよ」

「ですからお譲りしますと……」

「だから俺はたまには仕事忘れて楽しんできたらどうかと……」
俺もアリサさんもお互いの意思を譲らない。

このままでは平行線を辿ることになってしまう。

「はぁ………わかりました」

このまま言い合いが続くかと思われたが、意外なことにアリサさんが折れた。

「では間を取りまして……」

続くアリサさんの言葉を聞いて俺は驚愕することになった。

「樹様。一緒にいかがでしょうか？」

……………。

「……はい？」

「ですから、ご一緒に。京都へ行きませんか？」

「えーっと……説明をお願いします」

アリサさんと俺が？ 二人で旅行？

「私はこのチケットを樹様にお譲りしたい。樹様は私に行かせたい。なら二人で行けば解決ということですよ」

「あゝ、その……」

確かに間を取ればそうなるし、それで解決だけど……。

「丁度良く明日から三連休ですよ」

「うん。そうだけど」

「では明日の朝に発ちますので準備をしておいてください」

「はぁ、分かりました——って、二人で行くのは決定!？」

「そうですね、樹様がどうしても『折角の休日までこんなメイドと二人で過ごすなんて最悪だぜ。ケツ!』とお思いでしたら……残念ですがこのチケットはやはり金券ショップで」

「ああもう! 思っていないよそんなことっ! 俺、どんだけヤな奴なんだよっ!？」 行くよ! 明日の朝だろ! 用意してくるよ!!」
俺はそう叫んで部屋へと走るのだった。

8話 (2)

「……もう、朝か」

カーテンから差し込む光と小鳥のさえずり。

「一睡も……できなかったな」

眩きながら、一応セットしておいた目覚ましを鳴る前に止める。

旅行の用意に手間取ったわけじゃない。まして、アリサさんと二人つきりでの旅行というシチュエーションに嬉し恥ずかしな期待に胸高鳴らせ心躍らせていたわけでもない。

あえて言えば不安と緊張。

アリサさんのキツイ言動に耐える事が出来るのかという不安。家ならば何かあれば部屋にこもればいいが旅行中はそうもいかない。アリサさんとずっと二人でいることに対しての緊張。

そんな事を考えていたら、いつの間にか朝になっていたのだった。下の階から良い匂いが漂ってくるのはアリサさんが朝食を作ってくれてくれているからだろう。

今は普段より相当早い時間だけどアリサさんはいつもこの時間に起きているのだろうか……まあ、いつも朝から結構色々作ってくれてるから当然か。……そう考えると有難いよな。

アリサさんが居てくれるありがたみを実感したところで下へ降りる為に着替え始めた。

「アリサさんおはよう」

下へ降りると予想通り料理中のアリサさんがいた。

俺が起きてきた事に気付いたアリサさんは振り返る。

「おはようございます。お早いですね」

「うん。まあ……ね」

なんとなく眠れなかったとは言いいくない。言ったら何か俺が楽しみにしてたみたいになりそうだし。

「朝食、もうすぐ出来ますので少々お待ちください」

「ああ、うん。急がなくていいよ」

普段と違う時間に起きたのは俺だしわざわざ急いで用意してもらうのは悪い気がしたのでそう言うしておく。

「普通にもう出来ますので急ぐつもりはありませんが？」

アリサさんは振り返りもせずと言う。

「あ、そうですか……」

俺は顔を引き攣らせて椅子に座った。

そして待つこと数分で目の前のテーブルに朝食が並べられた。父さんと二人で暮らしてたときは良くてもトーストに目玉焼きぐらい。それが今では、テーブルに並ぶ料理の種類は片手じゃ足りないほど。朝食抜きなんてのも珍しくなかったのに最近では朝から良く食べられるようになった。それは睡眠不足の今日も変わらないようだった。朝食を食べ終え少しの時間が経ち……出発する為に荷物を持って靴を履く。

旅行の用意は昨日の夜にはちゃんとして、眠れなかったこともあって何度も確認したから忘れ物もない。

アリサさんは朝食の片づけや掃除をいつものようにしていたが、やる事もない俺は早めに外に出てきていた。

「すう……はあ……」

厳寒に背を向け、何となく深呼吸してみる。

徹夜明けだからなのか、それともアリサさんとの旅行という状況からの緊張なのか……吸い込む空気がいつもと違うような気がした。

何度か繰り返していると玄関の開く音が後ろから聞こえてきた。

「お待たせいたしました」

アリサさんの声に振り返る。

「準備は出来ているようですね。それでは行きましょう」

「——ちよっと待て」

鍵を閉め、歩き出そうとするアリサさんを引き止める。

アリサさんはいつもの格好で小さめのキャリーバッグを引いている。そう……『いつもの格好』、メイド服で。

「ごめんなさい。さすがにメイドさん連れで観光できるほどの度胸は俺にはないです」

俺は謝った。

メイドさんと京都観光って……滅茶苦茶目立つだろ。ある意味拷問だよ。

「お願いですから着替えてきてくださいホントお願いします」
俺は必死に頭を下げた。

アリサさんは「わかりました」と閉めた鍵を開け、家の中へ入っていった。

「着替えましたが……これで宜しいでしょうか？」

数分後、私服に着替えたアリサさんが登場した。

「え……あ……う……」

「……………樹様？」

「あ、ああ、うん……そ、それでいいです、はい」

一瞬言葉を失った。

そういえば……アリサさんの私服を見るのは初めてかもしれない。メイド服から私服になったアリサさんは黒のプリーツスカートにそれと同色の皮のロングブーツ。上はスカートが半分程度隠れるぐらいの長さの白いコート。いつもは後ろで括っている髪も今は下ろされていた。

大人っぽいんだけど、スカートとかの印象なのか十代であるのは分かる。歳相応に大人っぽい……俺、何言ってるんだろう。自分でも分からない。

とにかく、可愛いと言うより断然、綺麗という言葉の方が合う。そんな印象だった。

いつもロングスカートのメイド服なアリサさんなのでミニスカートって時点で印象が全く違ってくる。さらに膝下辺りの長さのブー

ツからスカートへ伸びるオーバーにーソックスが凶悪だ。普段見えないものが見えるのって凄まじい破壊力がある。

やばい……メイドさん連れでの観光とはまた違った緊張感が身体を包み込む。

「樹様？ 出発しますよ」

「うわっ!？」

いつの間にか目の前にアリサさんの顔があって、俺は驚いて飛び退いた。バックステップ。

「いつにも増して挙動不信ですね」

冷ややかな瞳を向けてくる。

「た、ただ驚いただけだってば!」

「それならいいのですが……樹様」

「な、なに!？」

必要以上に声が大きくなってしまっていることに気付く。

「そんなに怪しいと捕まりますよ?」

そ、そんなに怪しいのか!?

それはヤバイな……深呼吸深呼吸。

「んん、ごほんっ……大丈夫だよ。もう大丈夫」

「そうですか。それでは行きましょう」

歩き出すアリサさん。

「あ、待って、ちょー——」

俺は地面に置いてあった鞆を肩にかけてアリサさんの後を追った。

新幹線が京都へ向かい動き出す。

チケットは豪華に指定席、勿論アリサさんとは隣同士だった。

これにも若干戸惑った。普段こんなに近くに座ることってないから。新幹線の座席の隣って案外近い。油断したら肩がぶつかってしまいかもしれない。しかも何も考えず窓側に座ってしまった為にトイレとかに逃げ込む事も難しい。

それはまあいい。いや、良くはないけど小さな問題だ。最大の問

題は別にある。それは……ちょっとでも視線を下へ向けるとアリサさんの太腿が目に入る、ということだ。いろんな意味でやばいです。なので、俺は極力窓の外の景色へ目を向け、アリサさんを見ないようにした。

動き出して数分。多分数分だと思う。体感時間はもっと果てしなく長いけど……。車両の前の扉が開き、車内販売のお姉さんがやってきた。

「樹様、お飲み物はどうされますか？」

俺はアリサさんを極力視界に入れないようにしつつ、お姉さんが押している台車を見る。

「お茶……にしようかな。それにしても……へえ、駅弁って色々あるんだな」

それになかなかに美味しそうだ。

「駅弁って食べた事ないんだよね」

俺がそんなことを呟いたからかアリサさんが訊いてきた。

「買いますか？ 一応お弁当は作ってますけど」

「え、作ってきてくれてるんですか？」

「はい、一応、軽くですけど。途中でお腹が空くかもしれない思いましたので」

「だったら買ったら勿体無いじゃん。それ食べようよ」

それに軽くって言っても、絶対にそっちの方が美味しいからね。

「わかりました。ではお茶だけ買いますね」

「うん」

そんな感じでアリサさんの作ってくれた弁当を食べながら京都への旅を楽しんだ。

ちなみに……アリサさんが『一応、軽く』作った弁当は駅弁とは比べ物にならないほど豪華で鮮やかな物でした。材料とかはよく分からないけど値段付いたら、多分見た目だけで三千円はくだらないと思う。味も勿論最高だったしね。

京都に着き……旅館に荷物を置いてから観光に行く事になった。キャリーバッグのアリサさんはそのままでもまあ良いとしても、俺はずっと肩に担いでいなければいけないからだ。アリサさんだって転がせるとは言っても、荷物は少ない方がいいだろうしな。

ということで、タクシーに乗って泊まる旅館に向かっている。福引きで当てたチケットに宿泊先の地図も入っていたからそれをタクシーの運転手に見せたら、名前だけでも「ああ、あそこね」と分かったようで、どうやら京都でもそこそこには有名なところらしい。タクシーに乗ってから二十分ぐらい経った頃、

「はい、着いたよ」

という声、そしてタクシーが止まる。

目の前にある旅館を見る。なかなか大きい。それに古くて趣もある建物だった。

「ありがとうございます」

アリサさんがお金を払っている間に、俺は外に出てトランクから荷物を取り出す。

アリサさんが出てきて、タクシーは走り去っていく。その後二人で旅館の中に入る。

「うお………すげえ」

中も凄く良い感じだ。古いと言っても古臭いって感じじゃない。なんというか………なんとなく凄く京都っぽい雰囲気がある。いや、京都なんだけどさ。

アリサさんと一緒にチケットを持って受付へ。

「あら、ご姉弟で旅行ですか？ 仲が宜しいですねえ」

中年の、多分女将さんらしき人が俺達を見てそう言った。

まあ、そう見えるのかな………恋人って言われるよりも良いか、な。

「お姉さんは美人さんやし、弟さんもちっちゃくて可愛らしいわ」

「ちっちゃって、あの――」

「それでお部屋はどちらに？」

俺の女将さんへの抗議の言葉を遮ってアリサさんが尋ねた。

「ああ、はいはい。着いてきてください」

カウンターの奥に掛かっている鍵の一つを取って歩き出す女将さんに着いていくアリサさん。

俺は釈然としない気持ちで二人の後を追った。

旅館の中を進み、入ってきたところとは別のところから外に出る。そこから綺麗に整えられた日本庭園を進んでいく。

「ここになります」

女将さんが立ち止まった先には一つの小さい建物。離れというやつだろうか。

鍵を開けて中に入る。

中は畳で、窓の向こうには小さな池。というか、窓のあるところは一畳分ほど板の床になっており、そこは池の上に作られているようだ。

「お風呂もこの部屋専用の露天風呂が付いています。それとは別に大浴場の方も使ってもらって構いません」

女将さんの説明を聞く。

部屋の奥の扉を開けると、そこには確かに露天風呂。多分二、三人ぐらいが精一杯の小さなものがあった。

「それでは食事は朝と夜、部屋まで運びますんで。何かありましたらフロントまで電話してください」

「分かりました、有難うございます」

露天風呂を見ている間に、部屋を出て行こうと入り口まで移動した女将さんとアリサさんが頭を下げあっていた。

「あ、あのっ！」

俺は慌ててそちらに駆け寄って声を出した。

「なんででしょう？」

女将さんに一番気になっている事を訊いた。

「ここ、どう見てもここしか寝る部屋がないんですけど!？」

俺の質問に女将さんは首を傾げて、

「そうですけど……何か問題でも？　ご姉弟なら宜しいのでは？」

「あ、あの、姉弟じゃないんですけど！」

アリサさんと一つの部屋で寝るって……有り得ないよ。

「ご姉弟じゃない？」

女将さんはアリサさんに確認する。

「はい」

アリサさんはそれに頷く。

「でもま、ご姉弟じゃなくて恋人同士なら尚更一つの部屋で宜しいのでは？」

そう言っって女将さんは俺に耳打ちする。

「というか、そういう関係じゃないんならこれはチャンスやで」

「なっ!？」

「ほな、鍵はここに置いときます」

女将さんは耳打ち後、固まっている俺をニヤリと見つめてから去っていった。

8話 (3)

清水寺……京都観光に於いては確実に名前が挙がるであろうほど有名な観光地である。『清水の舞台から飛び降りるつもりで』と言われる有名な舞台のある寺だ。

現在俺は、その清水の舞台に立ち、下の景色を眺めている。

「うわ……結構高いな」

高所恐怖症ではないが、やはり高いと感じるぐらいには高さがある。

「さあ樹様。そのまま思い切って飛び降りてみましょう」

俺より一歩分ほど後ろに立っているアリサさんが唐突に言う。

「何で!? 飛び降りないよ!!」

「いえ、身を乗り出して食い入るように下を見つめていましたので……ついに決心なさったのかと」

「ついに!? 今まで一度もそんなこと考えたことないよ!」

「え……一度も……ですか?」

驚愕に目を見開き、よろめく様に半歩後退さるアリサさん。

「なんでそんなに驚いてるのさ!」

「幼少より仲間はずれにされ独りぼっちだった樹様なら一度ぐらいは」

「ないよ!! てか酷い云われようだ!」

「さすが樹様。心がお強い」

「……それ褒められてるの?」

半目でアリサさんを睨む。

絶対馬鹿にされてると思う。

「ところで樹様。清水の舞台から飛び降りるつもりで、と良く言われますが、実際飛び降りた人の生存率は八五%以上に達します。さらに十代、二十代に限定すると……九〇%を超えて」

「ちょっと待って! ……その情報を聞いて俺はどうすればいいの

？」

「ですから、ここから飛び降りても樹様の目的である人生の終焉は訪れないというご忠告を」

「だからそんなつもりは無いってば！　俺、そんな目的持ってないからね！？」

「ふう……そういうことにしておきます」

「なんで呆れてんの！？」

と、そこまで言って気付く。俺はアリサさんにからかわれている内に段々と大声になってしまっていたらしい。周りに居る人達がひそひそ話しながら遠巻きに俺達の様子を眺めていた。

時折、「ねえねえお母さん。なんであの人、様って呼ばれてるの？」という子どもの声や「あんな美人の彼女に様付けで呼ばせてるだど……死ねばいいのに」といった物騒な呟きが聞こえてくる。

しまった！　メイド服は変わっても呼び方がこれじゃ意味ないよ！

「あの……アリサさん」

「なんででしょうか、ご主人様？」

なっ——このタイミングでご主人様だと！？　しかも今、ニヤツてしなかったか……？

周りの視線も冷たいものへと変化する。

「くっ……」

このままここにいるのはマズイ。精神的に。

「ちょっと来て」

俺はアリサさんの手をとって逃げるようにこの場を後にした。

清水寺から少し歩いたところにある甘味処に俺達はいた。

人目につかないように店の奥のほうの席を選んだ。

「なぜにあんな暴挙にでたのか詳しく説明してください！」

俺は向かいに座るアリサさんに詰め寄った。

公衆の面前で『ご主人様』。普段はそんな風に呼ばないくせに。

あれは確実に面白がってたに違いない。だって『ニヤツ』ってした

もん。

「なんとなくですね」

「なんとなく!?!? なんとなくで俺はあんな辱めに!?!?」

「ですが、あそこはそんな空気だったので」

「ええっ!?!? むしろ逆の空気だったよ!」

「なんだよ、空気って。」

「落ち着いてください。目立ってますよ」

「え……あっ」

いつの間にか立ち上がっていた俺は周りから注目を集めてしまっていた。

「……………ん、こほん」

座りなおして咳払いをする。

「まあ、結果オーライということだ」

「なにが!?!? 結果どころか何一つオーライじゃないよっ!?!?」
机を叩いて立ち上がる。

「樹様、そんなに怒鳴ると他のお客様に迷惑ですよ」

「誰のせ——」

言いかけて止まる。

俺は肩を捕まれていた。……結構な力加減で。
恐る恐る振り返る。

「……………」

そこにはとんでもなく良い笑顔を浮かべた店員さん。俺と目が合うとスツと親指を立て……『出てけ』とでも言いたげに店の外に向かってそれを倒した。

「あ、あはは……ごめんなさいっ!」

俺は金を払って急いで店を出た。

「とりあえず呼び方を変えよう!」

店から結構離れた所で話を切り出す。

「呼び方……ですか?」

「うん。こんな街中で様付けとか……恥ずかしすぎて耐えられません」

今まで気にしたことはなかったけど……なんでだろう？ 家の近

所は俺とアリサさんの関係を知ってるからかな？

「ですが、私はメイドですの」

「良いの！ 俺が良いって言ってるんだから！」

「では、なんとお呼びしましょう？」

「え、うーん……そうだな……」

言っでは見たものの何も考えてなかった。

そうだな。様付けを変えるなら別の呼び方を考えなきゃいけないんだよな。

「ていうか普通に呼び捨てで良くない？」

アリサさんのほうが年上なんだし。

「そんなに馴れ馴れしいのはいかなものかと。メイドとして」
こたわるなあ……。

「じゃあ君付け？」

「樹君ですか？」

何か変な感じだ……背中がむずむずするような、そんな感覚。

「あまりにも他人行儀じゃないですか？」

「え、そう？ 様より全然良いと思うんだけど……」

呼び捨てより良いんじゃないか、メイドとしても。それより君付けって他人行儀か？ 普通に結構親しいと思うんだけどさ。

「んじゃ、何か他に良い案ある？」

他人行儀過ぎず、呼び捨てよりも柔らかい感じで。

……中々ないんじゃないかな、そんな呼び方。

「では『いっくん』で」

「呼び捨てより遥かに馴れ馴れしい！？ っていうかどんだけ親しい間柄なのですか！？」 貴方は俺の恋人ですか！？」

ツッコんでから思ったけど恥ずかしいよ、このツッコミ！ 自分で言ってるんだけど。

「いえ、恋人ではなくメイドです」

「うん、知ってる」

そんな真顔で言われると余計恥ずかしくなるよ……。

「それなら『いっきゅん』でどうですか？」

「より親しくなっちゃった!!」

そんな呼び方ってバカップルっぽくない？

「喜んでいただけてなによりです」

「喜んでないよ!？」 そんな風に呼ばれたら俺の心が耐えられない
！」

「それは嬉しくてでしょうか？」

「恥ずかしくてだよ!」

「ではなんと呼びましたらいいのでしょうか？」

「もういいよ、なんでも……」

この一連のやり取りはなんだかどつと疲れた。

「あ、いっきゅん以外にしてください」

それだけは本当にお願ひします。そう呼ばれるぐらいならいっく
んの方が遥かにマシです。

「気を取り直して……まだまだ夜までは時間があるし、これからの
ことを考えよう」

呼び方談義が終わったところでそう切り出す。

夕飯までに旅館に戻らなくてはいけませんが、まだ夕方にもなっ
てないし、最低あと一〜二箇所は行っておきたい。

「やっぱり、この時期だと紅葉とか？」

「そうですね。見頃だと思います」

「じゃあ山の方を目指すか」

駅で入手したパンフレットを広げる。一応旅行に来る前にネット
で調べてはあるんだけどね。観光名所とか。

「……なんだか張り切ってるように見えますが」

「旅行なんて滅多にこれないしね。それに京都って観光名所一杯あ

るでしょ？」

「ええ、ありますが……大抵は行ったことあるのではないですか？
修学旅行とかで」

アリサさんの何気ないその言葉で俺のテンションは一気に下がった。なぜかって……そんなの嫌な思い出が蘇ってくるからに決まってる。確かに京都には着たことあったさ……アリサさんの言うように修学旅行で小学生の時に。

でもさ、俺ってその頃からアレがないんだよ。アレが。

「すみません……友達のない寂しい修学旅行を思い出させてしまいましたね」

ハッキリ言われた！ 心の中でさえその名称は出さないようにしてたのに。

「その通りだけどなんかムカつく……とりあえずその可哀想なものを見る目をやめてもらえませんか？」

「ごめんなさい。あまりに哀れだったので表情を隠せませんでした」
絶対嘘だ！ 常時無表情のアリサさんがその程度で内心を表に出すはずがない。つまり、わざとってことだ。

「きつと班決めに関われず一人寂しく観光なさったのですね」

「一人じゃないよ！ 先生と一緒にだったもんね！」

「……………より淋しいですよ。というか悲しいですよ」

「ぐ…………た、確かに…………」

担任と二人で周る修学旅行……言葉にしたら果てしなく悲しい。それに一緒にいた先生ともほとんど会話しなかったしな。

「それで、楽しめなかった分を今楽しもうというわけですね？」

「いや、まあそうだけど…………」

今回は友達とかじゃないけど……アリサさんもいるし。

来る前には色々心配してたけど、実際来てみると楽しんでる自分がいる。清水の舞台から景色を眺めた時もそうだけど、今のアリサさんとのやり取りでさえ少しだけでも楽しいと感じてる自分がいる。

「……………そういうことですか」

アリサさんは俺を見て……何故か優しく微笑んだ。それはいつものように作った笑みとかではなくて、純粹に綺麗だと思った。

「樹様」

「な、なに？」

アリサさんに見惚れていたところに声をかけられたもんだからついついキョドってしまった。

「っていうかその呼び方は――」

やめてくれて言ったのに、とまでは口に出せなかった。それより早くアリサさんが話し出したからだ。

「樹様は仰いましたよね。メイドの仕事を忘れて楽しんできたら、と」

うーんと……ああ、確かにそんなようなこと言ったな。チケットをどうするか揉めてたときだよな。

「その言葉に従おうと思います」

「へ？」

どういうことなんだろうか……アリサさんは何が言いたいのだろう。

「今からメイドの仕事は忘れます」

「えっと……どういうこと？」

「今から旅行が終わるまで私は樹様のメイドではありません」

それって……もしかして一緒に観光とかしたくなかったってこと？ えっ？ なんで？

「じゃあ何！？ 俺は今から独りで観光しろってこと！？」

「……違いますよ」

なんだか呆れたような顔で俺を見る。

「え、じゃあどういう……」

「これから旅行が終わるまでメイドではなく樹様のお友達として一緒にいます」

メイドじゃなく友達として？

アリサさんは家のメイドで……俺の友達ではなくて……でも旅行

中は友達でって……

「つまり、それってどういうこと？」

「私がそうしたいと思いました。ですのて」

アリサさんはそこで言葉を止めた。

そのまま俺に近づいてくる。

何故か胸がバクバク高鳴っている。

そして目の前までやって来たアリサさんは俺の手をとった。

「え……あう……」

そしてそのまま俺の右手を両手で包み込むように握った。

「それでも……いいですか？」

と、俺の目をジッと見つめて言った。

「あ、え……はい。……あの、いいです」

しどろもどろになりながらも俺は答えた。

「ふふ。ありがとうございます」

そう言ってアリサさんは再び微笑んだのだった。

8話 (4)

……アリサさんがヤバイ。

いや、俺に対しての態度だとか行動だとか、いつも結構ヤバイんだけど……今回はその『ヤバイ』のベクトルが全然違う。

アリサさんは美人だ。性格も本性も隠して顔だけ見せたら十人中八人はそう言うだろう。残りの二人は脳が腐ってるかロリコンなんじゃないかと思う。あ……あと、男にしか興味ないとか。

おっと、話が逸れたな。

それで何がヤバイかって言う……そんな誰が見ても美少女であるアリサさんが可愛いのだ。

……あれ、言葉がおかしいぞ。

こう言い直そう。

美少女であるアリサさんが、その『性格まで可愛らしい』のだ。

俺の「友達として過ごす」と宣言してからのアリサさんは、ホントに普通の女の子みたいで……演技だと分かっているけどヤバイ破壊力を持っているのだった。

旅行が終わるまでの間、ずっと俺の傍に居るというのなら……それはそれで当初とは違う意味で耐えられないかもしれない。

あれから数箇所観光した。

そろそろ旅館に戻るには良い時間になってきたし、土産物屋的な所で少し休憩してから帰ろうということになった。

店の中は結構広く、土産物屋と軽く飲食できる茶屋的な店が一緒になっている造りだった。

そこで時期的にどうかとも思ったが、珍しさから『もみじソフト』というアイスを買って椅子に座った。アリサさんは同じくアイスで『豆腐ソフト』を買っていた。

もみじソフト……完全に興味だけで買ってみたが、それほど不味くはない。『美味い!』って程でもないけど……。もみじの天ぷらも添えてあるんだけど、これって見た目はホントにただの紅葉の葉だし、食欲はそそられない。

アリサさんの豆腐ソフトはどうだろう……。もみじソフトより美味しそうだと思うんだけど……。気乗りはしないけど訊いてみるか。

「アリサさん。その豆腐ソフトって美味しい?」

「ん、美味しいよ。食べてみる?」

と、プラスチックのスプーンでアイスをすくい、こちらに差し出す。

——これだっ!

言葉遣いも普段の敬語から同年代の友達と話すようになって、行動だって普段のアリサさんからはかけ離れたものだ。

いつもの調子なら、「そんなに食べたければ買ってみればいいんじゃないですか?」なんて言われるはずだ。笑顔で差し出すなんて……そんな事は有り得ない。

しかもそのスプーン……普通にアリサさんが使ってたやつじゃないか。そんな事、仲の良い男女の友達同士でもなかなかしないよ。

「……………えっと」

差し出されたって食えやしないよ!

これ周りから見たら「あくん」以外の何物でもないじゃないか。ってか周りから見なくても「あくん」以外の何物でもないよ!

「食べないの?」

と、首を傾げるアリサさん。

それがまた可愛いと思ってしまう自分が嫌だ。

「あの……いいのですか?」

逆にこっちが敬語になってしまう。

「いいよ」

笑顔で頷くアリサさん。

「そ、それじゃあ……いただきます」

俺は恐る恐るスプーンに口をつける。

「美味しい？」

「う、うん。……美味しい、です」

そう答えるが、正直味なんて分からないです。心臓がヤバイぐらいドキドキ言ってる。

「樹君のも一口貰うね」

そう言って、そのままスプーンで俺のアイスを口に運ぶ。

「ん〜……うん。感想に困るね」

あはは、と笑う。

——あ、あんた誰だ！？

思わずそうツツコンでしまいたくなるほど、目の前の人間が信じられない。それ以上に、相手は演技なのが分かってるはずなのに『樹君』という呼ばれ方に対してトキメイてしまっている自分が許せない……。ただ君付けされているだけなのに……。なんでこんなに……。

その後、味も分からないまま残りのアイスを食べきった。

「そろそろ旅館、戻ろっか……」

立ち上がったアリサさんが言う。

「そ、そうだな……」

旅館ね……。旅館！？

そうだよ、旅館だよ！

そういえば俺、アリサさんと同じ部屋になったんだよ。

同じ部屋……。今のアリサさんと？

それはマズイ。何がマズイって……。何かとマズイ。

「あ、あの……。アリサさん？」

「どうしたの？」

「そのですね、あの〜……。旅館に戻ってもそのキャラのままなんでしょうか？」

俺の質問にアリサさんは少し考える仕草をして、

「キャラってなんのことかな？」

凄くいい笑顔で言うのだった。

これは、つまり、その……このキャラのままでいくという事だな。それって、マズくね？ ヒジョーにヤバくね？

「そんなことより早く戻ろっ！」

そう言ってアリサさんは歩き出した。……俺の手を握って。

「ええっ!？ あ、あの、アリサさん!？」

これはもう友達ではないのではないでしょうっ!？

俺が握られている手を見ていることに気付いたのか、

「あ、ごめん。嫌だった？」

そう言って手を離れた。拗ねているような、悲しんでいるような、そんな表情で瞳を潤ませこちらを見つめていた。

「あ、と、嫌ってわけじゃ……ないです」

くうあ……その表情は卑怯すぎる！ 無性に謝らなければいけないと感じてしまう。そして考える前に謝ってしまった。

「じゃあ……いい？」

目を潤ませたまま、控えめに手を差し出してくる。

「は、はい……」

俺もその手を掴む為に手を前に——って違う！ そうじゃないだろ、俺っ！ ここは断らなければ……今後の為に。

「あの、嫌とかじゃないんだけど……その、あっ、ほら、手に凄い汗かいててさ！」

苦しいが、何とか良い言い訳を思いついて口にする。言い訳しているか、汗が凄いことになってるのは事実だし……。

「気にしないよ？」

俺の思いついた言い訳も、アリサさんのそんな一言であっさり突破された。アリサさんはそのまま俺と手を再び握ってきたのだった。アリサさんは一度俺を見て嬉しそうに笑って歩き出した。

俺もそれに続いて歩き出す……物凄くギクシャクした動きだったのは自分でも良く分かった。

旅館に帰るとすぐに豪華な日本料理の食事が目の前に並べられる。向かい側に座るアリサさんはコートを脱いでいた。

直視するのは躊躇われる。

グレーの服。暖かそうな服で袖が手を半分覆うほどの長さなのだが、食事をする為に、それを今は手首が見えるぐらいまで捲くっていた。

どうでもいいけど袖から指だけ出てるのってなんでこんなに可愛く思えるんだろう……俺だけなのかな？

まあ、問題はそこじゃない。うん、それは問題ないんだよ。何で直視出来ないかって言うとき、その……肩が出てるんだよね。それも、結構大胆に……。

寒さから身を守る為の服なのに何で出す！？ ファッションかもしれないけどさ、疑問だよな。

例えば夏なら肩が出てる服を着てたって何とも思わない。なのに今はまともに見れない。

なんでだろう……考えても良く分からない現象である。

多分、冬で普段は隠れているところが見えるっていうことが不思議な魅力を放っているのだろうと推測してみる。

結局、この豪華な料理の数々もほとんど味が分からないまま食事を終えた。

そして、俺は今、部屋の真ん中に座っていた。

部屋には俺一人。

アリサさんは風呂に入っている。

この部屋専用の風呂に……。

専用ってことは、部屋のすぐ近くにあるってことだ。というか部屋と繋がっている。

それってつまり、アリサさんが風呂に入っている音が聞こえてくるといふ状況になってしまっている訳で、俺はとても落ち着かない気分になっているということだ。

そわそわしてしまい、じっと座っていることが出来ない。

携帯を弄ってみたり、立ち上がってふらふらと歩いてみたりした。テレビも点けてみた。だけど、全然気は紛れない。

テレビの音量を上げて、それより小さいはずの浴場の音がどうしても耳に入ってきてしまう。

「……………出よう」

もう限界だった。

このままここにいろんのはいろんな意味でよろしくない。

俺は上着も着ずにすぐさま部屋を出ていった。

数十分後、部屋に戻って扉を開ける。靴を脱いで中に入り、襖を開けて中を見ると、そこには浴衣を着たアリサさん。

アリサさんは俺が戻ってきたことに気付くと、

「どこ行ってたの？ 急にいなくなるから心配したよ」

「ちょっと…………その辺に」

答えながら部屋の中に足を踏み入れる。

適当な答えだが、実際どこに行っていたのかなんて説明できない。なんせ適当に歩き続けていただけだから。

「その辺って…………まあ、戻ってきたからいいけど。はい、お茶」

「あ、ありがとう」

アリサさんが入れてくれたお茶を飲む。

冷えた身体に温かった。

呑んで一息ついたところでアリサさんがジッと俺を見ていることに気が付いた。

「な、なに？」

「ふふ…………鼻、真っ赤だよ」

そう言っ俺の鼻に触れる。

風呂上りだからなのか、アリサさんの手は凄く暖かい。

「お風呂入ったら？ 暖まるよ」

「う、うん…………そうする」

触られたこととか、今のアリサさんと会話することとか、やっぱり気恥ずかしくて……俺はいそいそと風呂場へ移動するのだった。だけど、それで問題は終わらなかった。

というか、風呂上りの俺に、最大の問題が待ち受けていた。

それは風呂から出て部屋に戻ったとき。

一目で分かる大問題。

部屋に敷かれた二つの布団。

机を隅に移動させ部屋を目一杯使っても、辛うじてくつついてはいないと言えなくもないぐらい近距離に並んでいる布団。

ここに俺と……アリサさんが寝るのか……？

こんなに近い距離で？

俺は部屋の扉を開けた状態のまま動けなかった。

「あ、布団敷いておいたよ」

そんな俺を見て、然程気にしてる様子もなくアリサさんは言った。

「あの……」

「ん、なに？」

「布団……近くないですか？」

「そう……かな？」

俺の質問を聞いて不思議そうに並んだ布団を見るアリサさん。

「ん……良いんじゃないかな、このくらいなら」

「良くないです！」

「今日は疲れたし早く寝ちゃおう。明日も色々回るんでしょ？」

「う、うん。その予定だけど」

「ほら、樹君も気にしない気にしない」

布団に入って俺を招くように隣の布団を手で叩く。

「気にしないとか……」

出来るわけないだろう……普通に考えて。

招かれるまま仕方なく布団に入る。

「おやすみ」

隣からアリサさんの声。

「お、おやす……み」

言いながら隣を見る。

そこには当然アリサさんがいる。それは分かってたんだけど、予想以上に近い気がする。

すぐに顔を逸らして、身体の向きも変える。

「電気消すね」

アリサさんの言葉のすぐ後に部屋は電気が消えて真っ暗になった。

少しして、隣からはアリサさんの規則的な寝息が聞こえてきた。
なるべく聞かないように布団を頭から被る。

……………。

確かに今日一日、歩き回って疲れてる。

それに、俺は昨晚も一睡もしてない。

「（ぐおおお……ね、眠れないっ!!）」

身体は疲れてるはずなのに全然眠れなかった。

8話 (5)

眠れない……と思っていたも、さすがに徹夜と観光で動き回った身体は疲れているようで気が付けば朝だった。

それでも睡眠時間は少なめでまだまだ眠気が残る。

アリサさんも既に起きて、浴衣から私服へと着替え終えていた。

俺はアリサさんに薦められて、眠気を覚ますために朝風呂へと向かった。

朝から温泉って、こんな旅館に泊まったときの醍醐味だと思う。

湯に浸かっていると眠気も大分覚めてきた。

そういえば……と、ふと考える。アリサさん、着替えてたけど……あれって俺の寝てる横で着替えたのか？

「そうだとしたら……寝てて良かったよな」

そうと決まったわけじゃないし、もしそれでも俺が起きてたとしたら別の場所で着替えただろうけど。

「ていうか……やっぱりメイド服じゃなかったな」

しみじみと呟く。

それはつまり、今日もあのキャラで過ごすということなわけだ。

そうすると俺はまたドキドキしてしまうわけだ。

こればかりは本当のアリサさんを知っていてもどうにもならない。

そう考えるといつものアリサさんはあんな感じで良いんじゃないかと思えてくる。だってあんな感じだからこそ普通に一緒の家で暮らせるのだから。普段から今回のような可愛い性格だったら一緒に住むなんて俺的に不可能だ。

とりあえず……この旅行中だけだと割り切って何とか耐えよう。

シャワーを頭からかぶり、そう決めて、風呂を出た。

私服に着替え、髪を乾かして部屋に戻ると、布団は片付けられ、

テーブルが元の位置に戻されていた。そして、そこには朝食が用意されている。

これぞ日本、という感じの朝食だ。

でもそれが良いんだよな。こんな旅館で朝から洋食が出てきたら違和感しかない。というか絶対文句言う。だからこれで良いんだ。

アリサさんと向かい合って座って食べる。

昨日は何を食べても味が分からなかったけど、今日は分かる。

それは今のアリサさんに慣れてきたってことかな……だとしたら良いことだ。これから先、何かあるたびにずっと緊張してたら身が持たないもんな。

焼き魚に味噌汁、そして米と漬物。これだけでも十分だが、他にも何皿か料理がある。

そのどれもこれもが強風の味付けで普段とは違うってことを実感させてくれる。

……まあ、アリサさんがメイド服じゃない時点でいつもとは違うわけだけどね。

とりあえず今日はどこに行こっかな……俺は食べながらそんなことを考えていた。

「綺麗だね」

景色を見てアリサさんが言う。

俺は『アリサさんの方が何倍も綺麗だよ』……なんて言うこともなく普通に答えた。死んでもそんなことは言えない。特にアリサさんには絶対に言えない。

「一番良い時期ですからね」

敬語になってしまうのは仕方ないと思う。

今のアリサさんとフレンドリーに話すと普通に恋人みたいになっってしまう。そんなのを人に見られると思うと恥ずかしくて死ぬる。

それは置いておいて、俺達は紅葉を見つつ歩いていた。

正直、緊張と張り切りが混ざって行動的になってしまった俺はほとんどの名所を見て周ってしまっていたらしい。

だから地元の店の人とかに聞きつつ、細かい観光地を歩いて周っているのだった。

アリサさんと並んで歩いてると凄い違和感を感じる。

昨日は緊張で気付かなかったけど……何か物凄く注目されている気がするんだよ。アリサさんが人の目を惹くのかな……隣にいる俺は居心地が悪い。主に男からの視線で。

何て言うのかな……視線に殺気がこもってるんだよね。

うん。分かるよ。俺も男だからね。アリサさんのことを知らなくて、逆の立場だったら俺もきっとそんな目で見るから。

この視線から逃げ出したいけど観光地だしそれも難しい。

どこに行っても人だから。

「……どうかした？」

そんなことを考えて俯き唸っていると、アリサさんが前かがみになって俺の顔を下から覗き込んできた。

アリサさんと俺の身長差から、アリサさんが結構な前かがみになっても相当顔が近い。

「い、いや……なんでも……」

後ろに跳び退って言う。

いきなりで心臓バクバクです。

というか、アリサさんの仕草は俺をドキドキさせる為に狙ってやってるんじゃないんですか……。

そこから少し先、土産物屋のような店が集まっている一角に辿り着いた。

新撰組の羽織やら模造刀やら男心をくすぐる品々が売られている。どうして日本刀とか新撰組ってこう魅力的なんだろうね。

そんな商品を食い入るように見つめる俺とは対照的に、アリサさんは笑顔で俺の隣にいるもののあまり興味がない様子だった。

わかんないかなあ……この魅力。

女の子にはわかんないか……特殊な方々は新撰組とか別の意味で興味ありそうだけど。BLハァハァ的な意味で。

沖田とか本当は不細工らしいけどね。似顔絵とか。斉藤も某ジ○ンプの『おろろ剣士』のイメージが強いけど実際ゴリラっぽいしな。そういうえば昔、竹中○人が斉藤役でドラマやってたけどアレに近いイメージなんじゃないか？

……俺、何語ってんだろう。声に出してたら絶対引かれるよ。

「ちょっと……トイレ行ってきます」

少し頭を冷やそうと思って、俺はアリサさんにそう告げ、足早にトイレに向かった。

トイレから出ると……のっぴきならない状況になっていたわけで……俺はどうしたらいいのか分からないわけであります。

簡単に説明します。

数メートル先にいるのは俺を待ってくれていたであろうアリサさん。そのアリサさんが……数人の男に囲まれていました。

説明終わり。

え、何、この状況……。

いや、多分恐らくきつとナンパってやつだろうとは思う。アリサさんを囲む男達はいかにもチャライ感じだし……。

「なあ、いいだろ？ 付き合ってよ」

「そうそう！ 一人でいても退屈だろ？ 俺らすっげー楽しませるよ」

聞こえてきた会話で確信した。

ナンパだ。しかもやつぱりすっげえチャライ奴らだった。

てかアリサさんナンパするとか運が悪いな。アリサさんならあの程度の人数ならなんとでもなりそうな気がする。

ならば、俺はアリサさんが奴らを退けた頃合を見計らって出て行くべきだ。

そして俺はトイレに戻――

「あ、あの……一人じゃないので……」

――れなかった。

ええーっ！？　なにそれ！？

そんなのアリサさんじゃないよ！　今は俺そばにいないんだから普通にあしらってよ。

弱々しく男達に抵抗するアリサさんに心の中でツツコミを入れる。

「はははっ、どうせツマラねえ男だろ？　俺達と一緒にのうがぜってえいいって！」

馴れ馴れしくアリサさんの方に手を回す男。

てか会ったこともないのにツマらないヤツ呼ばわりかよ……。

「……つまらなくないです」

アリサさんはそう言っつて男の手を払いのける。

一応庇っつて……くれてるのか？

生憎、アリサさんを楽しませた記憶はございませんが……あ、俺がオロオロするのを楽しんでたとか？

「でも、彼女が他の男に声かけられてんのに助けにも来ない奴だろ？　そんな奴ほっつとして俺らと遊ぼうよ」

てかお前、本当にアリサさんの連れがここから離れてて気付いてない可能性は考えないのかよ……連れはここでバッチリ見守ってるけど。

「やめてください」

男達から離れるアリサさん。

「いいから。俺らと来いって」

強引な口調に変えた男は、アリサさんを捕まえるように手を伸ばした。

「いやっ……」

手をつかまれたアリサさんは嫌がった。

なんだ、これ……これっつて助けに入らなきゃいけない流れじゃね？　アリサさんもそんなか弱い女の子みたいな声出さないでそいつら

ぶっ飛ばしちゃえよ……てかあの男達、ナンパにしては強引過ぎだろ。

ていうか絶対やだよ。勝てないもん。あんな人数の前に出て行ってもさ。相手が一人でも危ういつつの……。

「あん？　なんだテメエ」

そうこう考えているうちに……俺はアリサさんの腕を掴む男の手を思い切り叩いて離していた。

「お、おおお、俺の連れに、な、何か用？」

「やっべえ……超怖えよ……。」

男達は全員、勿論俺より背は高いし、俺喧嘩とかしたことないし。声、メツチャ震えてるよ。

「あ？　お前が連れなの？」

「そ、そうだけど？」

「あつそ。んじゃ彼女ちよつと借りっから」

そう言っただけ俺の肩を掴んでどうしようとする。

「ふざけんなよ！　アリサさんに触るな」

俺は男の手を払い落として顔を睨みつけた。

あ……マジで何言っただよ、俺。

「うるさいな。お前にはこんな可愛い娘、勿体無いっつーかつり合っただけでわかんねえの？」

んなこと分かってるっつーの！　お前にいわれなくてもな！

「お前だっけつり合っただろ！　鏡見たことあんなのか？　こんなところでナンパするなら動物園にでも行けよ。彼女になってくれるやつが沢山いるぞ、このチンパンが！」

うわあ……俺何でこんなに舌回るんだ？　しかも考える前に口から出てきやがるよ。

「なんだとっ！？　ぶっ飛ばされてえのか！？」

「はあ！？　力づくで女の子攫おうってのか？　この犯罪者が！」

「て、テメエ……マジぶっ飛ばす」

男が俺の胸倉を掴む。

俺は負けずに男を睨む。

「殴られたってアリサさんには触らせね——がっ！」
そう言ったところで頬に衝撃が走った。

男を睨んでいる間に横から殴られたらしい。

「しゃ、喋ってる途中で殴——」

あれ、意識が……たった一発殴られただけなのに……。
「うわ、こいつ弱っ！」

「ぎやはははは。いいトコに決まったんじゃね？」
男達の声が遠くに聞こえる。

「んじゃ、もう一発やっとか」
目の前に拳が迫ってくる。

だけど、避けたくても身体は動かなかった。
「んなっ!？」

俺を殴ろうとしていた男の驚いた声。

予想していた衝撃は襲ってこなかった。
そして——

「樹様を傷付ける者は許しません」

アリサさんの——

メイド服を着ているときの、それに怒りも合わさったようなアリサさんの力強い声を聞いて……俺は意識を手放した。

8話 (6)

意識が徐々に戻ってくる……。

全身の感覚も意識と共に感じられるようになってきたようで、目を瞑っていても自分が横になっているのが理解できた。

ああ、そっか……俺、殴られて倒れたんだ。

たった一発殴られたぐらいで……自分の非力さが恨めしい。というか、

「……………情けねえ」

と、心の底から呟いて目を開ける。

「あ、気付いた……大丈夫？」

目を開けた瞬間視界に入ったのは俺を心配そうな顔で覗き込むアリサさんだった。

「……………」

俺は状況が理解できずに固まった。

目の前に俺を覗き込むアリサさんがいて……俺は横になって……後頭部にはなにやら柔らかいものがある……俺からはアリサさんの上半身しか見えなくて……。

これはもしかして……あれか？

あの、その……なんていうか……膝枕をされてるのか？

まあそれは良い……良くないけど、良い。考えると駄目だから考えないようにしよう。それよりも俺はアリサさんに言いたいことがあったのを思い出した。

「えーっと……とりあえず……もう少し早く助けてくれたら嬉しかったです」

そう。俺は意識を失う瞬間にアリサさんが助けに入ってくれる声を聞いたはずだ。

助けてくれるならもっと早く助けてくれればいいのに……そうすればこんな状況にはなっていなかったに違いない。

だが俺の質問にアリサさんは、

「なんのこと……かな？」

と首を傾げた。

これはまさか……なかったことにする気か！？

もしかするとアリサさんはキャラを続ける為に、俺が気絶するのを待ってから助けに入ったのか？ そうではないはずだと信じたいが信じることができない。

「助けてくれました……よね？」

ここで認めさせれば普段のアリサさんに戻ってくれると信じて俺は迫及する。

「えっと……助けてくれたのは警備員さんで」

と言うアリサさん。

確かにそれは納得だ。警備員ならそれも仕事だもんね。でも俺はアリサさんが助けに入ってくれる声を聞いてるんだよね。そもそもあの店に警備員いましたっけ？

「な、なるほど」

そんな疑問を抱くも、とても口に出来る雰囲気じゃなかった。

何を言ってもアリサさんは認める気はなさそうだしね。

だってアリサさんは旅行中はこのキャラでいくと宣言したんだし。

「てか、そろそろ起きないと——痛っ！」

起き上がろうと頭を起こすが顎に激しい痛みを感じた。

「まだ寝てて」

そう言って再びアリサさんのお膝に寝かされる。

多少痛いのを我慢しても起き上がりがたかった。

だって、考えないようににしてもどうしても後頭部の感覚に意識が行ってしまう。

なぜならば、アリサさんは今日もミニなスカートなのです。それ故に信じられないぐらいピッタリと足の感触が分かってしまうのです。

それは……女性どころか人に体制のない俺にとっては相当に破壊

力拔群なのです。

やっぱり普段アリサさんをあまり女性と認識しないように出来ているのは、あの性格によるところが大きいようだ。今の状況で普段のアリサさんだったら、まあドキドキするとは思うけど今ほどじゃないと思う。

それにしても女の人ってなんでこう柔らかいんだ。この時期にスカートなのにあったかいし……。なんか甘い良い匂いもする。普段アリサさんに近づいてもこんな匂いを感じたことはないし、何か香水でもつけてるのかもしれない。

やばい……。考えがそっち方向にしかない。

別の事を考えて気を紛らわすんだ、俺！

……………。

そういえば、膝枕って名前の割には膝じゃないよね。太腿じゃない？ 本当に膝枕だったら相当硬くて痛いんじゃないのかな。それをやるには枕になる方は足を伸ばせる状況じゃないといけないよな。じゃあこれは股枕になるのか？ ……なんか卑猥な響きだな。

あれ！？ 全然紛らわせてないぞ！？ 微妙に考える対象は変わってるのか？ いや、変わってないな。

ああ、もう。訳わかんねえ。

「殴られたの……ここ？」

アリサさんが俺の顎に触れる。ひんやりした手が心地よかった。

「……そうみたい」

俺はそう答える。

アリサさんの触れている場所が丁度殴られたところだったし、そう答えるほかない。

「ありがとう」

唐突にアリサさんにお礼を言われる。

「へ？」

訳が分からず間拔けな声を漏らしてしまう。

「あの……助けてくれて」

「あ、ああ……はい」

実際に助けられたのは俺ですが……。

まあ、自分でもビックリしたよ。アリサさんと男達の間割って入ったときは。それに、その後の自分の言葉にもね。

何が『アリサさんに触るな』だよ……アリサさんの彼氏だとも気取ってたのかよ俺は。

やべっ、思い出すと超恥ずかしい。今すぐ顔を隠したい。

「ありがとう……嬉しかった」

「……………」

微笑むアリサさんに見惚れてしまった。

てか何ドキッとしてんだよ。

あれは演技！ 演じてんの！ そう自分に言い聞かす。

俺はアリサさんから急いで視線を逸らした。

照れてたってのもあるけど……。

顔が熱い。

アリサさんにバレてないといいな……照れてること。アリサさんの足に熱くなってるのが伝わってるとか嫌すぎるぞ。

それ以前に赤くなってるのを願うばかりだ。

そのまま少し時間が経って、ようやく顎の痛みも引いてきたので移動する事にした。

「今日は旅館帰ろっか？」

何気なく顎を擦っていると心配そうにアリサさん。

「あ……そうですね。出来れば……」

まだ少し痛いし、何よりもう見て周るところがあんまりない。

……まだ明日もあるのにな。

てか俺……どれだけ気を失ってたんだろう。今更ながら気になつて携帯を取り出し、時間を確認する。

……午後四時を回っていた。

「うそ……どんだけ寝てたんだよ……」

思わずそんな声を漏らしてしまう。

だって、確かあの店に行ったのは昼前だから……五時間近く寝たことになる。

ってことは――

「あの……もしかしてずっと……」

「ん？ 何？」

「ずっと枕になってくれてたんですか？」

「うん」

「ごめんなさいっ！」

俺は謝った。

だって……寒い中で五時間も膝枕させるとか有り得ないだろ。

いくらアリサさんだって相当辛かったはずだ。

さすがに罪悪感が芽生える。あの程度のことですら五時間も気を失ってしまふとは本当に情けないね。

俺、ホント弱え……強いつもりはなかったけどここまで弱いとは。今まで鍛えたりとかしたことないし、身体動かすのも好きじゃないから当然と言えば当然なんだけどさ。

謝る俺にアリサさんは、

「え、なんで謝るの？」

と不思議そうに聴いてくる。

「だって、長いこと枕にしちゃったし……」

頭を下げたまま言う。

「だってそれは私がやりたくてやったんだよ？ 助けてくれて嬉しかったし……だから、気にしないで」

アリサさんは俺の手を両手で包み込んで微笑んだ。

「あ、でも……」

顔を上げて、謝罪の言葉を続けようとしたのだが、

「ね？」

アリサさんに遮られる。

「……………はい」

俺はそれ以上何も言えなかった。

謝りたい気持ちはあるが、アリサさんがさせてくれない。

「うん。……それじゃ、帰ろう」

アリサさん手が俺の手から離てれいき——と思いきや、離れたのは左手だけで、残った右手で俺の手を握ったまま歩き出した。

「え、ちょっ——あの？」

「どうかした？」

アリサさんが振り向く。

「あの……手」

俺は繋がれた手を見る。

前にもこんな状況はあったけどやっぱり恥ずかしい。

「いや？」

「別に……嫌ってわけじゃ……」

「ならこのまま帰ろっ」

そう言って笑うアリサさん。

「いや、でも……あの、恥ずかしいんですけど——」

「あゝ……足痺れたなあ」

なっ!?

ここでそれを言うか!?

「いいよね、このままで」

「……勿論です」

アリサさんのどことなく嬉しそうな笑顔にそれ以上拒むことは出来なかった。

このキャラのアリサさんって、手を繋ぐのが好きなのかもしれない。

俺は繋がれた手を見つめてそんなことを考えていた。

8話 (7)

旅館へと戻り、日も落ちかけて暗くなってきた頃――

「ゴホッゴホ……ゴホッ……ズズッ」

俺は寝込んでいた。

寒空の下、長時間気絶していたのが悪かったのだろう……風邪を引いてしまったのだった。

頭痛はひどく悪寒もする。咳、鼻水も止まらない。あと喉も痛い。

「三七、八度……完全に風邪だね」

体温計を見てアリサさんが言う。

三八度近いって結構高熱じゃないか……最悪だ。まだ旅行は明日も残ってるっていうのに。

でも、これは無理かな、明日。

不幸中の幸いなのは見るべき観光地は既にあらかた見て回っていることだろうか。これが初日だったら旅行としては最悪の思い出になっていったことだ。

風邪を引いてしまった以上、考えてもどうしようもないことだ。

俺は考えるのを止め、とりあえず……

「アリサさん……離れてた方がいいよ」

すぐ傍で看病を続けてくれるアリサさんに言う。折角の旅行なのに移してしまうのは忍びない。

二人揃って寝込むとか洒落にならん。

「気にしないで」

「いや、でも……」

「いいから」

「あの……」

アリサさんは俺の額を掌で触れた。

「私がしたいからしてるの。黙って看病されてればいいんだよ」
そう言って微笑んだ。

アリサさんの手はひんやりとして気持ち良かった。

俺はそれを感じながら目を閉じる。

「熱いね」

アリサさんが額に触れたまま言うが、俺はそれに返事はしなかった。

額に感じる冷たさが心地よくて俺の意識は段々と薄れていく。

そんな中で『結局離れてくれなかったな』と思っていた。

でも、ま、アリサさんが風邪で寝込むとか想像出来ないけどな。

次に目を覚ましたとき、部屋には俺以外の気配は感じなかった。

首だけ動かして辺りの様子を窺ってもアリサさんの姿は見つけられない。

「どこ……行っただのかな」

なんととはなしに呟いてしまう。

風邪を引くと一人でいるのが寂しく、不安になってしまうのはなんでなんだろう……身体が弱って不安になるからかな。

「ずっ……」

鼻を吸って、枕元に置いてある携帯を手取る。

辺りは既に真っ暗で、自分がどれだけ眠っていたのか気になったから時間を確認しようと思ったからだ。

「七時……か」

一時間以上は眠っていた事になる。

「そんなもんか」

実際、もっと寝ていたような気がするんだけどな……昼に長時間気絶したせいで深く眠れなかったのかもしれない。

「トイレ行こ……」

俺は布団から起きて――ふらついた。壁に手を置き、倒れるのは

なんとか防いだ。

そのまま壁で身体を支えながらトイレへと向かった。

「……………ふう」

トイレから戻った俺は部屋の電気とテレビの電源を点けて布団へ戻った。テレビを点けたのは何の音もないと余計寂しくなってしまうと思ったからだ。

布団の中で目を瞑り、テレビから流れるバラエティー番組の騒がしい音を聞いていた。

暫くしてテレビ以外の音が耳に入ってきた。

部屋の扉が開く音だ。

目を開けてそちらを見る。

「あ、起きたんだ」

そこにはアリサさんの姿があった。手にお盆を持っている。

「旅館の人に言って消化にいい物作らせて貰ってきたよ」

そう言って俺の元まで歩いてくる。

どうやらアリサさんはわざわざキッチンまで借りて俺の為に料理を作ってきてくれたらしい。

お盆の上には一人用の土鍋と空のお椀、小皿には数種類の漬物。

それと水と薬が用意されていた。

「食欲は？」

「あんまり…………でも良い匂い」

俺は上半身を起こしながら答える。

正直アリサさんに言ったとおり、あまり食欲はなかったのだが土鍋から漂ってくる匂いはそれでも食べたくなるほどのものだった。

アリサさんが土鍋の蓋を開ける。

中は雑炊…………見た目は人参に解した魚の身、卵でとじて刻みネギが振りかかっていた。

…………普通に美味そうだ。

「これなら…………全然食べれそうかも」

と俺が呟くと、

「ほんと？ よかった」

アリサさんは嬉しそうに笑った。

俺は恥ずかしくなって視線をアリサさんの手元へ向ける。

お椀へ移し終えたところで受け取ろうと手を差し出すが、アリサさんは此方に渡す素振りを見せず、お椀からレンゲで雑炊をすくい出し――

「ふう……ふう……はい、あゝん」

と、レンゲを俺の口元へ差し出してきた。

「……………」

俺は口元に差し出されたレンゲを見つめて固まった。

まさか……こうくるとは。

弱った男、看病する女。この二つが揃ったときの王道的な展開であることは俺にも分かる。

だけど実際に『あゝん』して食べるのは恥ずかしすぎる。となれば、俺がとれる行動はひとつしかない。

「あの……自分で食べ」

「いいから」

俺の抵抗は呆気なく阻止された。

「でも……」

「樹君は病人なんだから遠慮しないで」

「いや、遠慮とかじゃなくて……その……」

「はい、あゝんして」

さらにレンゲを近づけてくるアリサさん。

レンゲが唇に触れる。

「……………あゝん」

俺は観念して口を開ける。

雑炊はほとんど嚙まなくても飲み込めるほど柔らかかった。食べてみて分かったが、人参以外に大根の拍子切りも入っていた。この二つが柔らかい中にも食感があっていい感じになっている。

「……………どう、かな？」

不安そうに上目遣いで訊いてくる。

そんな風に訊くまでもないでしょうに……アリサさんの作った料理で美味しくないものなんて今までなかったでしょうが、とはとてもじゃないが言えず、俺が言えたことといえば、

「美味しいです」

という一言のみだった。

「ほんと？　よかった！」

それでもアリサさんは嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑うのだった。

その後も、食べ終わるまでアリサさんに『あーん』された。そのおかげかどうかは知らないが用意された料理は全て平らげることができた。

そして、菓を飲んで横になる。

「そういえば……アリサさんは何か食べたの？」

気になったので尋ねてみる。

ここで食べた気配はなかったし、俺の食べる料理を作ってたとなると時間もそんなになかったのではないだろうか。

「え、うん。作りながら少し食べたよ」

それって食べたって言うのかな……ただの味見なんじゃないのか。

「折角なんだし普通に食べたら？　勿体無いし」

無料で来るとはいえ、折角美味しい料理が食べられるんだから食べなきゃ損だ。

「でも……」

アリサさんは俺を気にしてるのか乗り気じゃない。

そんな顔を見ると申し訳ない気持ちになってくる。

「俺のことはいいから。なんか俺のせいで食べれないみたいで嫌だし」

自分でも卑怯な言い方だと思う。でも、こう言えばアリサさんは食べてくれるはずだ。

「わかった。じゃあ、片付けるついでに食べてくるね」

「うん。そうしなよ」

俺が食べ、空になった鍋や食器を持って部屋を出て行くアリサさん。だけどその顔はやはりどこか渋々といった様子を含んでいた。

「……………はあゝ」

アリサさんが部屋を出て行くのを確認して息を吐きつつ目を閉じる。

それから多分二〇分も経たないうちにアリサさんが戻ってくる。

「ちゃんと……食べた？」

あまりに早い帰還に俺はすぐさま訊いていた。

「うん。食べたよ。ちゃんと」

「なら……いいけど」

アリサさんは嘘はつかないと思うけど……ホントに『ちゃんと』食べたのかな？

ま、俺に確かめる術なんてないんだけどな。

そうは言っても気になるものは気になるけど……今はそれより――

「あの……もっと離れた方が……」

俺の隣に布団を用意するアリサさんに言う。

アリサさんは俺の寝ている布団のピッタリ隣に自分の布団を用意しだしたのだ。これはツツコまずにはいられない。

あまりにも近すぎる。確実に昨日より近い。ちょっと寝返りうったら触れ合ってしまったいそうなほど近い。

「風邪移すと悪いし……もっと離れた方が良いんじゃないかと」

こんな近くにいたら眠れないし。移すと悪いって思ってるのも本当だけだね。

「大丈夫だよ」

何が!?

くそ、離れる気ないな、これは。

だったら――

「てか寝る前に温泉入ってきたらどう？ 折角の温泉宿なんだから」
俺はアリサさんに風呂を薦める。

俺は風邪だし入れないけど、アリサさんは普通に入れるんだから入ってきたほうがいいはずだ。

女の子は一日だって風呂を欠かしたくないって言うし。

「そうだね」

完璧に俺の隣に布団を敷いてから、アリサさんは頷いた。

「それじゃ、行ってくるね」

浴衣を手取るアリサさん。

「うん。ごゆっくり」

風呂に向かうアリサさんの背中に向けて言った。

浴場から水音が聞こえてくる。

昨日はドキドキしたて外へ出て行っただが、今日はそうもいかない。

それに――今日はやらなければいけないことがある。

俺はふらふらと立ち上がり……横の布団を引きずって離れていく。
限界まで離して自分の布団に戻る。

途中、テレビの音を大きくする。勿論、アリサさんが温泉に入っている音を聞かないようにするためだ。

布団に横になって目を瞑る。

テレビの音は大きいけど、それでも微かに浴場からの音は聞こえてきてしまう。

それを考えないようにして俺は眠ろうとした。

出来ればアリサさんが出てくるまでに寝てしまいたかった。

まあ、眠れるはずないんだけど……。

少し時間が経って――アリサさんが髪を乾かすドライヤーの音が聞こえてきた。

その後、部屋に帰ってくる。

俺は寝たふりをしていた。

アリサさんもそのまま寝てほしい、このまま何事も怒らなければいいのに……そう思う俺の心臓はドキドキしていた。

「……………」

アリサさんの動く気配がする。

そして――布団を引きずる音。それも段々近づいてくる。

薄目を開けて様子を窺う。

俺の抵抗空しく、ピッタリ隣まで移動していた。

アリサさんが布団に入る。なんだか、滅茶苦茶近く感じる。昨日とは比較にならないほどに。

息遣いも鮮明に感じる事が出来た。

俺がドキドキしていることが気付かれないか不安になる。

「おやすみ」

耳元で声が聞こえ、部屋の電気が消された。

寝返りをうつふりをして反対側を向く。

今日も眠れぬ夜になりそうだった。

8話 (8)

熱の所為で意識が朦朧としていたらしい。

気が付いたら電車に乗っていた。

時刻は昼前。俺がこんな状態じゃ観光なんて出来ないし、早めに帰ることになったようだ。

ハッキリとそう言えないのは昨日寝てから——と言っても熱になされて——あんまり良く眠れなかったけど今日電車に乗るまでの記憶があやふやだからだ。

今は薬が効いているのか自分の状況を普通に考えられる程度には回復している。

車内にアナウンスが流れ、電車が動き出す。

流れてゆく景色をぼんやりと見つめながら、俺は今回の旅行を振り返った。

最後の最後でこんなことになってしまったけど、まあそれなりに楽しかったと思う。

今だからそう思えるんだろうけど。実際は緊張しっぱなしだったしな。主にアリサさんの所為で。

春から一緒に暮らしてるのに今回初めて私服を見たってのもある。それだけでもかなりドキドキなのに『樹君』なんて呼ばれて、さらにアリサさんとは思えないフレンドリーさで会話して……手なんか繋いじったりもした。

……思い出すだけで恥ずかしい。

恥ずかしかったけど、それだけじゃない気もする。……それが何なのかはわからないけど。

他にも恥ずかしいイベント盛り沢山だったな。『あゝん』だったり間接キスだったり……その他色々。何て言うか傍から見れば恋人

にしか見えない行動だったと思う。

アリサさんが彼女とか、つり合わないって……勿論俺がアリサさんにね。そう考えると恋人っていうより仲の良い姉弟に見られてた可能性も高いな。

それから、ナンパな人たちにも遭遇した。

アリサさんを助けようとしたら殴られて気絶。結局そいつらを追い払ったのはアリサさんだった。しかもその後数時間、アリサさんの膝の上で眠った。これも相当恥ずかしかった。

この旅行中のアリサさんは半端じゃなく可愛かった。

いつも美人だけど可愛いという感じではないので驚いた。離し方から仕草までいつもとはまるで違っていた。いつものアリサさんならあんな連中に絡まれたりしないはずだ。なんというか……美人でキリッとしてて、ナンパしていい雰囲気じゃないからだ。

それほど今回のアリサさんは違っていた。

仕事とプライベートの差……とも違う。演技だっただろうし。

演技……だよな？

俺はメイドの仕事をしてるアリサさんしか知らない。もしかしたら俺には見せないだけで、本当のアリサさんは今回のような人物なのかもしれない……と考えてみたけど、それは有り得ない気がする。でも……今回のアリサさんのキャラが何割かぐらいは本当だったらしいなあと思う。まあ、例えそうだったとしてもそんな面を俺に見せる事なんてないんだろうけど……とここまでで考えるのをやめた。

四月から一年の四分の三近く一緒に暮らしてるのにアリサさんのプライベートとか全然知らないことに気付いてなんだか嫌な気分になった。悲しいような寂しいような……なんでそんな気持ちになるのか理解できないけど……。

そう言えば、出会った頃……まだ俺がアリサさんを追い出そうと思っていた頃に一度だけ女の子らしい悲鳴を上げた事もあったっけ、

と思い出す。いつか仕事でも演技でもない素のアリサさんを見てみたいものだ。

そんなことは置いておいて旅行の事だ。

気絶して起きて旅館に帰って風邪を引いて……今に至る。

終わりが方は最悪。終わりよければ全て良しって言うけど、じゃあ終わりが悪かったら全部悪かった事になるのかと言えばそれは違うと思う。少なくとも俺は今回の旅行、来てよかったと心から思うことが出来ている。

なんとなく……そう思う。

暫く考え事をしていると喉が渴いているのに気が付いた。

風邪で熱があるときはこまめに水分を摂ったほうがいい。車内販売が来る気配は今のところない。身体はだるいけど買いに行こうと思っ
て俺の隣、通路側に座っているアリサさんに声をかける。

「あの、アリサさ——」

途中でやめた。

何故なら、隣に座るアリサさんは、すうすうと寝息をたて寝むっていたからだ。

もしかしたら……一晩中看病をしてくれたのかもしれない。
でなきゃ、あのアリサさんがこんなに無防備な姿を見せるはずがない。

起こすのも悪いし動けない。

車内販売が来るのを待つか……。

「……て………起き………」

体が揺すられている。

「……………んあ？」

目を開ける。

横を見ると、俺の肩に手を置いているアリサさん。

どうやら俺は車内販売を待つうちに眠ってしまっていたらしい。もうすぐ目的地に着くとアナウンスが流れていることから、随分と長い時間寝てしまっていたようだ。

寝たせいかな、はたまた薬が切れてしまったのか、ぼーっとする頭を振って意識をハッキリさせる。が、どうにも良くなならない。

なんか悪化したかも……。

段々と速度を落とす電車。

アリサさんは立ち上がって荷物を棚から下ろす。

俺も立ち上がる。

アリサさんが自分と俺の荷物まで持って歩き出す。

俺も後に続く。

悪いと思っただが、このまま好意に甘えさせてもらおう。駅から出たらタクシーでも捕まえればいいし。

「あの、アリサさん。俺このまま病院行くんて先荷物持って帰ってもらっていいですか？」

改札を出たところでそう切り出す。

「……なら一緒に」

振り返るアリサさん。

「いや、いいよ。病院なんかついてきても詰まらないだろうし」さすがにそこまで付き合うことはないと断る。

アリサさんは分かったと頷いて荷物から何かを取り出した。

「じゃあ先に帰るから、これ保険証」

差し出されたのは保険証。

俺はそれを受け取る。

タクシー乗り場でアリサさんと別れて病院へ向かった。

一時間ほど待たされて診察。

薬を貰ってタクシーで帰った。

「……………ただいま」

玄関で靴を脱ぐ。

アリサさんが穿いていたブーツは見当たらなかった。今までも見たことがなかった物なので部屋にでも置いてあるのだろう。仕事以外の面を見せないことは徹底していた。

「おかえりなさいませ、樹様」

出迎えてくれたのはいつも通りの……本当にいつも通りの無表情なメイドさんだった。

ひどく落ち着くと同時になんだか残念に思ってる自分がいた。

「食事はお部屋にお持ちしますのでごゆっくりお休みください」

俺のコートを受け取って言う。

「うん、ありがと」

キアラのこととか色々言いたいこともあったけど、今はアリサさんに言われるまま部屋に行くことにした。

「はい、あーん」

部屋に食事を持ってきてくれたアリサさんが無表情のうえ抑揚のない声で言った。

勿論手には差し出された箸、その先にはアリサさんの作った料理。

「あの……アリサさん？」

「あーん」

ずっと箸を近づけてくる。

「……………あーん」

「……………」

俺が口を開けてそれを受け入れた瞬間、アリサさんがニヤツと口の端を少しだけ吊り上げた気がした。

もしかしたら……旅行中の俺の反応が面白かったのかもしれない。いつもの毒舌に加えてこういった感じの攻撃もこれからは追加されるのかも、とそう思った。そしてそれは高確率でそうなるんだろうなあという確信めいたものまで感じたのだった。

9話 メイドとクリスマスと年越しと

公園のベンチに缶コーヒー片手に佇む男子高校生二人。

「くそっ、忌々しいぜ……」

そんな寂しい二人組みは俺と今岡だった。

今岡が空き缶を握りつぶし、腕を組んで歩いていく恋人を見て恨めしそうに呟く。

俺はそれを呆れながら横目で見つっ缶コーヒーに口をつけた。

今日はクリスマス。

街はイルミネーションに彩られ、そこかしこからクリスマスソングが流れている。

街を歩く恋人たちは仲睦まじいことこの上ない。ある者は腕を組み、またある者は手を握り（しかも大抵は指を絡ませるタイプ）、独り身の者たちに凄まじい敗北感を植えつけていた。

今岡もそんな中の一人だ。

俺はと言えば……恋人なんて出来るはずもなく、独りでいるのが当たり前だと思っていたのでそれほど気落ちしてはいなかった。

恋人じゃなくても親しい異性がいれば別だが、そんな異性もないのにクリスマスとかで浮かれたり希望持ったりする人の心はよく分からない。

そんな訳で俺は今日もいつもと変わらない一日を過ごすはずだったんだけど……。

「お前もそう思うだろ？ 幸せなカップルは死ねてさ！」

「いや……思わないけど……」

今岡に呼び出されたのが一時間前。それからずっとこんな愚痴を聞かされている。正直ウンザリだ。帰りたい。

「なんだよ……いい奴ぶりやがって」

「なんだよいい奴ぶってるって。普通に思ったまま口にしただけだつての」

「はいはいそーですね。ふん、アリサさんみたいな美人が身近にいる人間には俺のような負け犬の気持ちなんて分かりませんよね!」嫉妬が大きすぎて俺に当たり始める気かよ……なんかもう、ほんと迷惑なやつだ。

「はぁ……もう帰っていいか?」

付き合いきれんぞ、こんなの。溜息を吐いて半ば本気で言っ腰を上げる。

「まあ待てって」

立ち上がる前に肩に手を回されて再び座らされる。

「なんだよ……愚痴聞かされるだけなら帰りたいんだけど」半眼で今岡を睨みつける。

「友達甲斐のねえ奴だな」

「友達に理不尽に当たるなよ」

「うっ……まあそれは悪かったよ。怒りのあまりつい、な」素直に謝る今岡。

「恋人を見るのが嫌なら家から出なきやいいじゃん」

それで怒りもしないはずだろ。

「バッカ! んなことしたら余計惨めだろうがっ!!」

怒鳴るように今岡が叫ぶ。

……どうしろってんだよ。

「つーことで気晴らしにどっか遊びに行かねえ? なんならお前ん家でもいいけど」

なんならって……そっちが本命だろ。アリサさんに会いたいってことか。

「だが断る」

「なんでだよ!?!」

「だって今日アリサさん何か忙しそうにしてたし、お前の相手してくれないと思うぞ」

「忙しそう？」

「うん。何してるかは知らないけど」

「まさか……彼氏とデートとか」

今岡が真剣な顔でそんなことを呟いた。

「ないない」

それは有り得ないって。あのアリサさんに彼氏とかいるわけない。

「信じて……いいんだな？」

物凄い剣幕で掴みかかってくる今岡。顔近え……。

「う、うん」

「信じるぞ？」

「ど、どうぞ？」

いや、まあ……うん。いないと思うのは事実だし。仮にいたとしても俺は知らないから嘘は言っていないってことでいいよな。

「んじやお前ん家はやめて駅前行こうぜ」

「はあ……分かった」

付き合わなかったらまたうるさそうだし、暇なのは俺もだしな。そう思って頷いた。

「やっぱりクリスマスって感じだな」

駅前に着いた俺はそう感想を漏らした。

どこもかしこもクリスマスっぽい。それにやっぱり恋人同士って人たちが目立つ。

そんな人たちを見るたびに聞こえる今岡の舌打ちにもここに来るまでに随分慣れてしまった。周りを注意深く見てみると、今岡の他にもそんな感じの男がちらほらと見受けられる。

「ほんと気分悪くなるよな」

今岡は腹立たし気に言う。

ならこんな所に来るなよと思うが、口にしたらしたで何か言われそうなので黙っておく。

「ま、でも良いところもあるよな」

「良いところ？」

「ああ。だって露出の高いサンタ服着てケーキ売ってる娘とか沢山いるじゃん」

言いながら近くにいたサンタ服の同年代っぽい少女の胸元を凝視する今岡。

「そうですか……てかそんなあからさまに胸見るなよ」

「良いんだよ！ 見せる為に着てるんだから」

「いや、見せる為じゃないと思うんだけど……」

「見せる為に決まってるだろ？ そうじゃなきゃ何のために着てるって言うんだよ、あんな服をさ」

「普通にクリスマスだからだろ」

何を当たり前の事を言ってるんだよ。

「俺が言ってるのはそういうことじゃないんだよ」

「と、いうと？」

「クリスマスだからサンタ服は当然だとしても、あんな若くて可愛い娘に着せてるのはどうしてだ？ それも露出度の高い物を」

「そりゃ集客力を期待して、だろ」

「そうだよっ！ あの娘たちをエサにして男を集める為だ。それはつまり見せる為に着てるってことでいいはずだ！」

拳を握り締め熱く語る変態。

「どうだ！？ 俺は何か間違ったことを言ってるか！？」

「……………」

俺は言い返せなかった。上手く反論の言葉が出てこなかったからだ。

それに、確かに今岡の言うことも一理ある。あの服を見るに、明らかに彼女連れの男は買いにくいだろうことは想像できる。だとすればそのターゲットは誰になる？ 独り身で尚且つ女性に不自由してるタイプの男がメインターゲットだろう。見たところ恋人同士で買ってる人の中にはいるが、圧倒的に独りで買っていく男が多い。

そうなれば今岡の言う見せる為というのも納得できてしまう。

「だとしても、あからさまに凝視するのはマナー違反だと思う」
それでも俺はそんな風に注意はしてみることにした。

「全く、うるさいやつだ。まあここは従っておいてやろう」

ふてぶてしい態度でサンタ服の少女から視線を外す。

……なんでこんなに偉そうなんだ？ まあいいけど。

「それで……これからどこに行くんだ？」

女の子から視線を外した今岡に問いかける。

ここまで来たのはいいが、何をするかも決まってる。

「そうだな……ゲーセンとか」

「クリスマスにゲーセンってどうなのか」

「……………惨め、だな」

だろうな。一人で家にいるより惨めっぽい気がするぞ。

「じゃあ、カラオケとかは？」

「男二人で？」

それはもつとどうだろう。

それに……カラオケなんて一人でしか言ったことないし他の人の前で歌うなんてとても出来ない。

「そうだな。ないな。んじゃ……どうしよう？」

「訊かれても」

駅前まで来たはいいがすることがなかった。

「とりあえずブラブラして良さ気なところあったら行くか」

「なんというデート」

「うるせっ！」

そんな軽口を叩きながら駅前の探索が始まった。

9話 (2)

「ゲーセンですらカップルの巣窟ってどういうことだよ……」

今岡が悲痛な表情で言葉を漏らす。

「確かにな。イチャつくなら人目につかないところでやってほしいよな」

人目も憚らずイチャイチャベタベタとする馬鹿どもを見て、さすがに俺もイラ立ちを隠せなかった。しかも、どう見ても俺達より年下で俺達よりも遥かにモテなさそうな奴が男二人でいる俺達を馬鹿にしたように見てから見せつけるようにキスするとか……殴ってやりたくなった。

相手の女の子は大人しそうな普通な子だったけど……なんで付き合ってるんだろうかと本気で疑問に思った。あの年頃ってのはああいう……良く言えば世間に喧嘩売ってるというか他人とは違う危険な生き方というか……駄目だ、考えても良いところなんて思いつかないから、良くなんて言えねえ。まあぶっちゃけ、ただの不良少年ってかヤンキーだ。それも、いかにも自分でやりましたって感じの染まりきってない金髪にピアス代わりに安全ピンなんてつけちゃってる限りなく馬鹿そうなヤンキーだ。

そんなのにちよつと地味目で普通だけど可愛いと言えるだろう女の子とのキスシーンを見せつけられるところを想像してみたい。ちなみに、その女の子は恥ずかしそうではあったが嫌がってはいなかった。

想像したか？

したよな？

どうだ……ムカつくだろう？ 殴りたくなっただろう。だけど殴ってはいけない。俺も殴らなかつた。ただ心でこう思えば良い。今がお前の絶頂期だ、高校生……大学生になったとき、お前は相手にもされないだろう、とね。

そして心の中で嘲笑ってやれば良い。

それで少しはスツとする。

………空しいけどな！

でもまあ、実際ああいうのがモテるのは辛うじて高校生までだ。

その後は大抵同じようなバカそうな女としか付き合えない。そんなでできちゃった婚が関の山だ。はっ、せいぜい金遣いの荒い派手な妻と妻の見栄で良い物を着せられる子どもの為に馬車馬のように働きたいさっ！

ふふふ、ははは……あっはっはっはっはっは！

「……………お前、怖いんだけど」

若干引いた表情で、俺から少し距離をとった今岡が言う。

「怖いって……何が？」

本気で分からない。

俺は考え事をしてただけで怖いことなど何一つないだろうに。

「いや、いきなり笑い出すとか……しかもあくどい顔で」

なっ！？ 声に出してしまっていたか！

「それは……ごめん。なんか色々見た所為でちよつと心が荒んでしまってたんだ」

「そ、そうか。まあ元に戻ったようで何よりだぜ」

今岡が離れた距離を戻して隣にやってきた。

「それよりこれからどうする？ 結局行くところないなら帰りたいんだけど……寒いし」

どこに行ってもカップルだらけで何も決まらないまま今に至るわけだけでも。

「さすがに俺もそれしかないのかと思えてきた……」

「んじゃ、帰——わぷっ！？」

帰るか、と言おうとした時、突風が吹いた。しかもどこからか飛んできた紙が顔にくつついた。

「たく……なんなんだよ」

顔についた物を取って愚痴る。

見てみるとそれは、健全な高校生にはあまり見ては宜しくない類の店のチラシだった。

「スパッツが憎い」

いきなりどうしたんだ……訝しんで今岡を見つめる。

今岡は道を挟んだ反対側に鋭い視線を向けていた。俺もそちらに視線を移す。

「あれは……伊吹さん」

そこには伊吹産の姿があった。

彼女はスカートを押さえて恥ずかしそうにキョロキョロと首を動かしていた。

なるほど。さっきの風でスカートが捲れてしまったのか。そして今岡のあの言葉に繋がると。

「お前って奴は……」

呆れて溜息を吐き、手に持ったままだったチラシをグシャグシャに丸める。そのまま捨ててしまおうかと思ったが、どこかゴミ箱を探してそこに捨てようと考え直しチラシはそのままズボンのポケットに入れた。

「なんだよ……お前だってスカートが捲れた瞬間を目撃したら凝視するだろうがっ！」

無然とした顔で言うが、それは完全に言いがかりだ。決め付けないでもらいたい。

「くそ、スカートの下は下着が基本だろーがっ」

そんな基本は知らない。

「……………はあ」

俺はもう一度大きく溜息を吐いた。

と、そんな話をしているとキョロキョロしていた伊吹さんが俺達に気付いたようだった。目がバツチリと合うと恥ずかしそうに俯いた。

俺は手を上げ「どうも」と挨拶をして近づく。

「あ、あああの……み、みみみ………」

目も合わせず、挨拶を返すこともなく、伊吹さんは焦っているのか上手く喋れずにいた。

「なんでスパッツやね〜ん！」

今岡が涙ながらに伊吹さんに詰め寄る。

「まだ言って——てか本人に言うなよ！」

「ただだけ悔しいんだよ。」

本人に向かって言うとか最低だ。

「はわっ……え、ええっ!？」

ビククリしてる伊吹さん。

今の言葉で見られてたのに気付いてしまったのか耳まで真っ赤になっていた。

「も、勿論スパッツの下はノーパー——」

「往来でセクハラしてんじゃないわよっ!!」

スパーンと良い音を立てて今岡の頭が引っ叩かれた。

「だ、誰だ!？」

今岡は頭を押さえて、自分に暴力を振るった相手を睨みつけた。

「誰だじゃないわよ!」

そこにいたのは私服姿の三上さんだった。

「い、委員長!？」

「い、委員長……じゃないわよ! アンタ、何セクハラしてんのよ!」

「せ、セクハラだあ!？ 人聞きの悪い事言ってんじゃないわよ!」

「いや、思いつきりセクハラだったんだが」

横からツッコんでしまった。

アレがセクハラじゃなかったらなんだと言うんだ。

「ほらみなさい。やっぱりセクハラじゃない!」

「うんうん」

頷いておく。

今岡は震えながら俺を見て、

「う、裏切り者お——っ!!」

叫びながら走り去ってしまった。

「ふん。悪は去ったわ」

腕を組んで不敵に笑う三上さん。

「あ、あの、あの……は、春田君も……その……」

モジモジして俺を見る伊吹さん。

「あ、いや……俺は見えてないから」

今岡や伊吹さんの言葉から想像しただけで見えないのは本当だ。

「ところで、伊吹さんはなんで冬休みに制服で？」

まだ恥ずかしそうにしている伊吹さんに話しかける。最初に見たときから不思議だったのだが伊吹さんは冬休み、それもクリスマスだというのに制服姿だったのだ。

「えと……部活で」

「あ、そうなんだ」

休みだというのに大変な事だな。そういえば伊吹さんって一年だけバレー部のレギュラーだったよな。

「三上さんは？」

俺は視線を三上さんに移し尋ねた。

「私は待ち合わせ」

「え、マジで？ 彼氏？」

こんな日に待ち合わせってそれしかないだろうけど。てか彼氏いたのか……こんなちっこいのに。俺より小さいもんな。ありがとう……なんとなくお礼を言ってしまった。

「……今、失礼なこと考えなかった？」

「と、とんでもないっ！」

睨みを利かせる三上さんに即効で謝る。

「はあ……まあいいわ。勘違いしないでよ。待ち合わせって言うのも相手はこの子よ」

そう言って伊吹さんの腕を取る。

ああ、そういうことね。俺達とたいして変わらない、と。

「二人でどっか行くの？」

「この子の家にね」

だから伊吹さんは制服のまま待ち合わせ場所に來たのか。

「あんた達は何してたのよ、男二人で」

今度は三上さんに質問される。

「別に」

「別について何よ？」

「いや、ブラブラしてただけ」

「はあ？」

「呼び出されて愚痴聞かされてどのままブラブラとしてただけだよ。
っ！かアイツどこ行ったんだよ……帰るぞ」

今度は詳しく言ってみた。

「あんたも大変ね」

しみじみと言われた。

「ほんとにね」

俺も深く頷いて同意を示す。

「……………」

三上さんは俺を見て伊吹さんを見て、それからまた俺を見る。
なんだろう……………？

「……暇なら一緒に来る？」

「え、ええっ！？ み、みみミオちゃん！？」

泣きそうな目で三上さんに縋りつく伊吹さん。

「で、どう？」

伊吹さんを軽く無視して俺に問いかけてくる。

「どう、と言われても……」

女の子の家になんて行ったこともない。それに伊吹さんも嫌だろ、
俺なんかが家に行くのは。

それに……家ではアリサさんがなにやら用意してくれてるみたい
だしな。なんか無駄になったら悪いし。

「行きたいのは山々なんだけど……家でもアリサさんが何か準備し

てくれてるみたいだしやめとくよ」

俺はそう断った。

「……………」

「……………」

二対の瞳に見つめられる……無言で。

なんていうか、凄く怖い、です。

「だったらさ！」

「うおっ!？」

「な、なによっ!？」

「きゃっ!」

いきなり現れた今岡の大声に皆それぞれ驚く。

「だったらさ、みんなでコイツん家に行かねーか？」

そう言っただけを指差す。

「……………は？」

何を言い出すんだコイツは。

「小夜、どうする？ 私は行くべきだと思うんだけど」

「え、で、でも……突然……迷惑じゃないかな」

「じゃあ行かないの？ クリスマスにあの美人なメイドさんと春田君を二人っきりにしてもいいと思ってるの!？」

「ふ、二人つきり……でも今岡君もいるんじゃない？」

「あんなのは居ないようなもんよ!」

「そ、そう……なのかな……」

「そうよっ!」

なにやら白熱した様子でナイショ話をする二人。

暫くして――

「決めた！ 行くわ!」

「あ、あの……よ、よかったら……お邪魔したい、です」

「良いに決まってるぜ!」

伊吹さんの言葉にサムズアップする……今岡。

「何でお前がっ!？」

さすがにツツコむ。

「勝手に決めんなよ……とりあえずアリサさんに訊いてみる」
言って俺は家に電話をかける。

「——ということで三人連れて行ってもいいですか？」

『はい。そう思って用意してあります』

な、なん……だと……？

すると、アリサさんは俺が今岡達を連れてくことを予想していた
とでもいうのか！？

ゆ、有能過ぎるだろ……てかやっぱりアリサさん普通じゃないよ。

「じゃ、じゃあ、そういうことで宜しく」

『はい』

電話を切る。

「……良いつて」

来て良いとの旨を皆に伝える。

「そうか。なら行こうぜ！」

今岡が先頭に立って歩き出す。

「み、ミオちゃん」

「ん、なに？」

「あの……出来れば、着替えたい」

「あゝそっか……そうね。じゃあ私達は後で行こうか」

「ご、ごめんね」

「そのぐらいのことで一々謝らなくてもいいってば」

またヒソヒソと話す二人。

「あゝ、春田君。私達は一回沙代の家に行ってからお邪魔するから」

「え、いいけど……このままじゃ駄目なの？」

「ほら、この子部活だったし着替えとかしたいみだいだから」

「あ、そっか。うん、なら後で来てよ。家の場所分かるよね？」

「それは大丈夫。だから先に行ってて。今岡は帰らせてもいいけど」

「わかった。あと今岡はもう何をしようと思おうと思う」

二人にそう告げて身体を反転させる。

「じゃ、またあとでね」

「あの……また……」

歩き出す前にそう声をかけられる。

「うん、それじゃあね」

俺もそう言ってから今岡を追いかけた。

9話 (3)

「あはっ、あははははは！」

「いいぞ！ もっとやれーっ！」

「あ、あわわわっ、ミ、ミオちゃー！」

「よっしゃー！ まかせんかーい！」

「うおー！ー！ー！っ！」

「ミ、ミミミ、ミオちゃんっ！」

……………なんだ、これ？

みんなの前に立ち服を脱ごうとする三上さん。

食い入るようにその様子を見つめながら煽る今岡。

慌てふためく伊吹さんはその場であたふたするだけで止めようとする気配はない。珍しく大きな声も出している。

ほんとにもう……………なんだこれ？

なんでこんなことになってしまったのだろう……………なんて、そんなこと決まってる。

「樹様も一緒にお脱ぎになってみてはいかがですか？」

アリサさんだ。

こんな状況を作り出したのは勿論我が家のメイドである彼女だ。
というか、

「なんで俺が脱がなきゃいけないんだよ」

「新たな可能性を信じて」

「何言っちゃってんの！？ そんな可能性はいらないから！」

「なるほど……………その貧相な身体ではとても見せられるものじゃありませんよね。失礼しました」

あ、謝りながら馬鹿にするだと……………っ！？

「そもそも脱ぐ必要なんてないじゃないか！」

「樹様は女性だけに恥をかかせる？」

アリサさんは三上さんを見ながら言う。三上さんは既に上は下着だけになり、今正にスカートに手をかけた瞬間だった。

「俺の所為みたいに言うなっ！ てか三上さんそれ以上はアウトーっ！ 今の時点でアウトだけど……それ以上はホントに駄目だって！！」

三度言おう……なんだこれ？

そんなカオスな状況になってしまった原因は少し前に遡る。

三上さん、伊吹さんの二人と別れた俺と今岡は俺の家に真っ直ぐ帰った。

帰ってきたとき、既に日は暮れていた。

「お帰りなさいませ、樹様。今岡さんもようこそおいで下さいました」

玄関を開けるとアリサさんがいつものように出迎えてくれる。

家に上がってそのまま一階のリビングへ向かう。

アリサさんに上着を渡してこたつに入る。今岡もデレデレしながらアリサさんに上着を預けていた。

家のリビングは結構広いんじゃないかと思う。キッチンはカウンターっぽくなってその近くには大きめのテーブルに椅子が四脚ある。二人しか住んでないけどな。今岡とかよく来るし多すぎるってことはない。

今いる部屋は簡単な仕切りはあるがそこと繋がっている。簡単に言えば広い部屋にテーブルとこたつの両方があるってことだ。

冬はもっぱらこのこたつで食事をする。寒いからな。

ヒーターもあるが、やはりこたつが落ち着くのだ。

そして、こたつの上には見事なクリスマスのパーティー料理が並んでいた。

あ、あれってもしかして七面鳥？ 初めて生で見たわ、あんなの。その他にも美味しそうなのが沢山。てか全部美味そうだ。さすがアリサさんだな。

「さすがですねアリサさん！ 全部美味しそうです！」

おれと同じ感想をもったらしい今岡が立ち上がって瞳をキラキラさせて言う。キモかった。そして何故にアリサさんの手を包み込むように両手で握ってるんだ……。

「座れよ。動くと埃が立つだろ」

「そんな掃除の仕方はしていませんが」

アリサさんからのツツコミがきた。

「お前、なんで急に機嫌悪いの？」

それから今岡。

「別に悪くねーよ……」

そう言っただけは顔を背けた。

なんだか空気が悪くなってしまった……そんなとき、家のチャイムが鳴った。

お客さん……多分三上さん達が来たのだろう。アリサさんが対応するために立ち上がって部屋から出て行った。

すぐに「お邪魔します」と言う声と共にアリサさんに連れられた二人がやってきた。

「うおっ！ 凄い料理！」

「ほんと……だね」

三上さんは部屋にやってくるなりこたつの上の料理を見て驚いた。伊吹さんもそれに同意してコクコクと頷いている。

「うっわー、こんなの見たことないよ……！」

三上さんのはしゃぎっぷりが凄い。

確かに並べられた料理はそこのレストランなんかとはレベルが違うってぐらい凄いけど。

「コートをお預かりします」

「あ、どうも」

「……有難うございます」

無表情に淡々と話しかけるアリサさんに三上さんのテンションが一気に下がった。……なんか若干顔が赤い。来て早々料理を見てはしゃいだことが恥ずかしくなったのかもしれない。

二人ともアリサさんに上着を渡してこたつに入る。

俺と今岡、対面に三上さんと伊吹さん。

受け取った服を丁寧にハンガーに掛けたアリサさんはキッチンへ向かった。割とすぐに人数分のコップと冷蔵庫から飲み物を用意して戻ってくる。

「よっしゃ、それじゃ始めようか!」

アリサさんがコップを配り終わるのを見て今岡が宣言する。

「ほら、そんなのはみんな自分でやるからアリサさんも座ってくださいよ!」

配ったコップに飲み物を入れようとするアリサさんから瓶を奪い取り座らせようとする今岡。

「ですが……」

「いいからいいから!」

「そうですか……わかりました」

そしてアリサさんは俺の隣、今岡とは反対側に腰を下ろした。

「あ、あれえ……あの、アリサさん?」

「……なんででしょう?」

今岡に名前を呼ばれ小首を傾げるアリサさん。

「出来れば……せめてここに座ってもらえればと思うんですけども」
そう言って俺と自分の間を手で叩く。

「いえ、遠慮しておきます」

ニコツと微笑む。

「あ、う……そ、そうですか」

「はい」

満面の笑みだった。

今岡はその笑みにやられてしまったらしく俯いて小声でボソボソ呟くことしか出来なくなってしまった。

アリサさんというとても美しく美人な人が眩い笑顔を見せれば……しかも相手はアリサさんに惚れてる今岡とくればその仕草だけでどうにかなってしまうが、だがしかし……だがしかし！ 冷静に考えれば「あなたの隣には座りたくありません」と言っているような物だった。そう考えるとアリサさんの浮かべる笑顔は悪魔の微笑にも見えてしまう。

……恐ろしい。

今岡がそのことに気付いてないようで何よりだ。

と、俺は心の中でほっと一息つく。

「樹様」

突然アリサさんに呼ばれた。

「え、なに？」

「どうぞ」

瓶を両手で持ち差し出してくる。

「あ、うん。ありがとう」

コップを差し出すとアリサさんは丁寧に注いでくれた。注がれる液体はシュワシュワと泡を立てる。ジンジャーエールっぽいけどちよつと違う。シャンパン……は違うよな。あれは結構アルコールが高かったはずだ。てことはシャンメリーってやつか？ まあ、いつか……なんでも。

って、あれ？ 瓶はさっき今岡に奪われなかったか？

そう考えて気付いた。

アリサさんの傍には何本も同じような瓶が用意されていることに。

「な、なあくんか良い雰囲気ね」

と、何故かヒクついた笑顔でこちらを見ている三上さん。

「えっ！？ なにが！？」

「メイドとご主人様って言うより寧ろ夫婦みたいな雰囲気だったじゃない！ 沙代もそう思うでしょ！？」

「え、えつと……その……」

突然声を荒げる三上さんと俯いてモジモジする伊吹さん。

「そんなんじゃないから!!」

そんな二人に俺は精一杯否定する。

「ど、どうなんですか?」

三上さんは次にアリサさんに質問する。

「ふふ……ご想像にお任せします」

とても良い笑顔でそんなことを仰った。

「やっぱりそう——」

「なんだとお——っ!!」

三上さんの言葉を遮って今岡が叫んだ。その勢いのまま俺の胸倉を掴んで自分へ引き寄せる。

「てめ、こら……どういうことだ? ああん?」

「……近い近い」

今岡の顔が俺の顔まで数センチの距離。

「んなこたあどうだっていーんだよ。で? どういうことだ?」
完全に目が据わっていた。

「だから勘違いだって。俺とアリサさんはそんなじゃ——」

「先月二人で泊りがけの旅行に行って参りました」

「んだとおっ!」

「なんですってえ!」

「……ひうっ」

「ア、アリサさ——ん!!」

そこからはみんな凄まじかった。

今岡はやケになったように、三上さんは機嫌悪そうに、伊吹さんはそんな三上さんに薦められるまま、三人はガツガツ食べゴクゴク飲んだ。

気付けば多すぎるんじゃないかと思われた瓶の数。その殆どが空になってしまっていた。

「あのアリサさん?」

「はい？ なんですか、樹様？」

「これ、酒？」

俺はコップに入った液体を指差して問いかける。

「はい。勿論です」

「なんで？」

「なんで、と言いますと？」

「俺、みんな、未成年」

単語しか出てこなかった。

未成年しか居ないこの状況で、なんでアリサさんは酒なんかを？

「まあ、クリスマスですし」

「理由になってない！」

「たまにはいいかと……………それに面白いことになる予感が」

「今面白いつつた？」

「はて、なんのことでしょう？」

はあ…………俺は溜息を吐いて三人を見た。

三人とも確実に酔っていた。

伊吹さんは心配に鳴るぐらい顔が赤いし、三上さんは途中から機嫌が悪かったのも忘れたように大声で笑い、今岡はなんか落ち込んでいた。

俺はそんな三人が怖くて、隅の方でちまちまと食べていた。

「お、俺なんて…………どうせ俺なんて…………」

呟きながら泣く今岡。

「あ、あ…………目が…………目が回るう…………」

座ったまま上半身がふらふらしている伊吹さん。

「あっははははは！ 何か暑くなってきたあ。あはっ、脱ぐよお！
そう宣言して立ち上がった三上さんは服を脱ぎだした。

「おおっ！ あんた最高だよ！ よっ、日本一！」

泣いてたのが嘘のように一瞬で復活した今岡が三上さんの前まで
あっという間に移動して脱ぎ始めた彼女を観察しだした。

「よおくっ…………ひっ…………見てなさいよお」

「おうともさ！」

「そいやあ！」

上半身、下着だけになる三上さん。

「おお！ 委員長唯一の勝負下着！」

「当っ然でしょおが！」

拍手する今岡の頭を叩く三上さん。

「だ、駄目だよ……ミオちゃあうっ」

止めようとして立ち上がった伊吹さんは……そのままコケた。
ちよつと可愛かった。

「それじゃ……下もイきますか？」

「イっちゃってください委員長！」

「まかせんかあゝい！」

スカートに手をかける三上さん。

「うおお——っ！！」

「ミ、ミオちゃ——あいたあっ」

叫ぶ今岡、コケる伊吹さん。

「さすがに止めないとマズイのでは？」

「そうですね。彼女が酔うと記憶を失うタイプならいいのですが、
覚えているタイプなら……」

「お、覚えているタイプならどうなるの！？」

「止めなかった樹様に危険が及ぶかと」

あ、有り得る——っ！

その光景がハッキリと想像できるぞ。

きつと恥ずかしさとか照れ隠しでボコボコだ。ボコボコだよ俺。

「と、止めなきゃ！」

「そうですね。さすがに止めた方がよさそうです」

「て、手伝って！」

「はい」

そうして俺とアリサさんで三人（主に脱ごうとする三上さん）を

止めるのだった。

止めながら思った……二度とこの人に酒は近づけないようにしよう、と。

9話 (4)

アリサさんによる故意的なハプニングやらで騒がしかったクリスマスから数日、今年も今日で最後。

朝、いつも通りの時間に起きて、朝食を食べ、それから特にすることもないのでこたつに入ってダラダラとテレビを見て過ごしていた。

冬休みだし予定もない。普通の高校生ならこんな時は昼まで寝てたりするのだろう。俺も以前はそうだった。

この家に住むようになってから寝坊することはなくなった。休日も学校に行く時間よりも少しは遅いけど、それでもちゃんと朝には起きるようになった。

早起きは三文の徳と言うし、長い時間寝てしまって起きたら休日のほとんどを寝過ごしてしまった、なんてこともなくなった。

だけど、起きててもなにもすることがなくぼーっと無意味に時間が経って行くななんてこともよくある。今だってそうだ。

普通の男子高校生なら友達と遊んだりして楽しい時間を過ごせるんだろう。だが俺には友達なんて片手で数えられるぐらいしかない。しかも、その数えられる中で男といえば今岡ただ一人。

あとは三上さんと伊吹さん。……正直友達と言っているのか迷うところだが、家に来たりしてるから問題ないよな？ もしあの二人が友達じゃなかったら……俺の友達は今岡だけと言うことになる。

やめよう……。これ以上考えても落ち込むだけだ。

頭を振ってテレビを消す。

「はあ……なんかやることないかな」

俺はキッチンで作業しているアリサさんを眺めて呟いた。

アリサさんは朝食の片づけが終わってからすぐに何かを作り始めた。何を作ってるんだろう……昼飯って訳じゃないだろうし。

「何を作ってるんで？」

暇だし興味もあったので近寄って訊いてみる。

「樹様……暇なんですね」

手を止めたアリサさんが俺を見てそう言った。心なしか鼻で笑われた気がしなくもない。

「……っ！　だってさ、普通なら年末は大掃除とかするんだろうけど家はアリサさんが毎日完璧にするからホコリ一つ落ちてないじゃん……俺の部屋も含めて」

そう、アリサさんは毎日の掃除が普通の大掃除並みなのだ。いや、それ以上か。完璧すぎる。俺の部屋も毎日掃除してくれてるから見られるとヤバイ物も置けない。関係ないけど。

「それはメイドとして当然のことです」

まあ助かってるけどね。

「それで……何作ってるの？」

この話を続けても意味が無さそうだし話を戻す。

「見て分かるとおおり、おせちを作っています」

言われてみれば、おせち以外に有り得なかった。

テーブルには重箱があり、アリサさんが作っているのはそれに入る料理のようだ。

俺はそれを見て、

「お、おせちっ!？」

凄く驚いた。

「そうですが、ええっと……なにか問題でもありましたか？」

目を見開いて重箱を見つめる俺に不審そうな声音で尋ねてくる。

「お、おとおせちって……おせちって!」

今、凄く興奮している。

「おせちが何か？」

「お、おせち……初めて見た」

そうなのだ。初めておせちという物を生で見たのだ。

小さい頃……それも物心つく前に母親を亡くした俺はずっと父さんと二人で暮らしてきた。

父さんも大した料理は出来ない。アリサさんと出会うまで、俺は焼きそばとかチャーハンとか、手作りと言えばそんな簡単なものしか知らなかった。

それが！ 今、目の前に！ おせちが！

これが興奮せずにいられようか！ 否、断じて否だ！

一般家庭で正月にはおせちにお雑煮。そんなモン、俺からしたら都市伝説と大差なかったのに……それが今、目の前にあるんだ。

「これ、おせち？ ほんとにおせち？」

重箱を指差す。

「え、ええ……おせちです」

そんな俺に若干引き気味でアリサさんが答える。

「ふ、ふおおおおっ……これが、おせち」

俺がアリサさんを動揺させるなんて奇跡のような出来事だが、今はおせちが気になってしょうがない。

「つ、作るの――作るの、み、見てててもいい!？」

ぐいんっ、とアリサさんに顔を近づける。

「ご、ご自由に……」

「あ、ああありがとう!」

言うと同時に、俺はアリサさんが作業している場所に一番近い椅子に腰掛けた。

「おお、おおおおっ!」

感動していた。

手を休めることなく色んな種類の料理を作るアリサさん。

作られては重箱に並べられていく色鮮やかな料理。

料理なんか興味ないけどなんだか楽しい気分になってくる。おせちってすげー。

あっという間に重箱が埋まっていく光景は見ていて飽きない。

「凄い！ 美味そう!」

見た目といい匂いといい、それだけでお腹が空く。さっき食べた

ばかりなのに……と思って時計を見ると既に昼近くになっていた。いつの間にこんな時間になってたんだ……それだけ集中して見てたってことだろうな。

もう一度アリサさんを見る。

だが、慣れてしまったのか先ほどまでのように我を忘れるほどに集中できそうもなかった。

それに見てるだけってのもツラくなってきたな。お腹減ったし。

「アリサさん……味見しようか？」

「完璧なので大丈夫です。明日のお楽しみにしておいてください」
俺の提案は一瞬で却下された。

「じゃあ……何か手伝うことない？ 暇なんだよね」

俺は立ち上がって腕まくりをする。

「……………」

アリサさんは手を止めずに少し考えてからこう言い放った。

「足手まといです」

それを聞いて腕をまくろうとしていた体勢のまま固まる。

あ、足手まとい……だと？ 確かに俺は料理なんてほとんどしたことがない。だから俺が手伝うと効率が悪くなってしまいうつてのも分かる。

でも、でもさ……もつと言いつてもものがあるんじゃないだろうか。

一応アリサさんはメイドで俺は主なわけですし。

「足手まとい……足手まといね、ははは」

服の袖を元に戻しながら虚ろに笑う。

「それほど暇ならば……出かけてきてはいかがですか？」

「……別に行きたいとことかないし」

そんなのがあればとっくに出かけてる。

「では、遊びに行くとか」

「……………ひとりで？」

「お友達を誘えば宜しいのでは？」

アリサさんは『お友達』って部分をやけに強調して言った。

俺が黙っていると、

「ああ……すいません」

哀れむような眼差しで謝罪してきた。

「なんで謝る!？」

「それは……友達のいない樹様に無神経な事を言ってしまったと」

「その発言が無神経だよ!　どーせ俺には友達いないよ!　アリサさんのバーカ!」

そう叫んで、俺は家を飛び出した。

家を飛び出した後、本屋で小説やらコミックやらを買い込んで家に帰った。それを読んで時間を潰し、今は夜。

こたつに入って年越しを待つ。何故かアリサさんは隣に座っている。向かい側に座るとテレビが見えない位置になってしまうのは分かるが他に座るところがないわけじゃないのに。

男女に分かれて競う歌合戦も終わり、そろそろ年が明ける。

その辺りの時間になってくると小腹が空いたので夜食に年越しそばを作ってもらった。

今年も残り一分を切るとどのチャンネルでもカウントダウンが始まっていた。お笑い芸人だったり、歌手だったり、人気アイドル事務所のメンバーが勢ぞろいしてたり。

かと思えば全くカウントする気配すらないチャンネルがあったりもする。

——残り十秒。

日付が変わるだけ。それ以外の変化はないのにどうしてかドキドキしてくる。カウントダウンのせいだろうか。

『ゼロッ!』

テレビの中でカウントが終わる。

同時に花火やら派手な演出と新年の挨拶。

その後も番組は続いていく。

初日の出とか見る予定はないし、後は寝るだけだ。

ま、その前にとりあえず――

「アリサさん、あけましておめでとう」

「明けましておめでとうございます、樹様」

隣に座るアリサさんと顔を見合わせて新年の挨拶を交わすのだった。

10話 チョコレート

いつも通りの時間に起床。それからいつも通りアリサさんの作ってくれた朝食を食べて学校へ行く為に家を出る。

外に出ると息が白い。

俺はマフラーに口まで突っ込んでポケットに手を入れて歩き出した。

途中で今岡に会った。

「おはよう」

俺は視線だけ今岡に向けて言った。

何故か今岡の手には大きな紙袋。見た感じ中は空っぽみたいだ。

「おはよう！ 良い朝だな！」

朝からテンションも高くそう返してくる今岡。

……なんでこんなに元気なんだろう。

「良い朝って……寒いし、いつも通りじゃん」

確かに雲ひとつない晴天ではあるけど、そんなのは今までだって何回もあったことだ。そんなことでこいつがテンション高くなってた記憶は全くない。

「いつも通り？ ハンッ、これだから素人は！」

吐き捨てるようにそう言われた。

「……なんのプロなんだよ、お前は」

俺は呆れつつ今岡を見た。勿論足は止めない。

「そりやお前……つか今日が何の日か分かってるか？」

俺の隣に並んで同じペースで歩きながら今岡が言う。

何の日……今日は何かあったか？

普通に授業しかないはずだが……。

「その顔は分かかってないようだな。それでも男か!？」

考える俺をジト目で見てくる。

「はぁ？ 普通に男だけど……なんなんだよ？」

テンション高いわ、意味の分からないことを言ってくるわでちよつとイラついてきた俺は不機嫌な声で言った。

「はぁ……全くお前って奴は」

大げさな仕草で溜息を吐く今岡に本気でイラツとする。

「今日は何日だ？」

「……十四日」

機嫌が悪いと口数が少なくなるのは仕方ないと思うんだ。

「そうだ。じゃ、今は何月だ？」

「二月……だけど、それがどうしたって言うんだ？」

結局何が言いたいのかわからない。

「おまつ、ここまで言ってもわからないのか!？」

今岡は立ち止まって、信じられないという表情で俺を見た。

「……………なんなんだよ？」

俺も立ち止まって振り返り問う。

「バレンタイン」

「……は？」

「だから今日はヴァレンタインだっつーの!」

叫ぶ今岡。

いきなり叫んだ今岡は周囲の注目を集めてしまった。

俺も一緒に見られている気がする。恥ずかしくなって若干早足で歩き出す。

「なんだよ! 無視すんなよ!」

少し離れたところで今岡が大声で言いながら駆け寄ってきた。

また注目を集めてしまう。

俺は今岡と目も合わさずに歩く足を早めた。

そうか……バレンタインだったのか。

俺は追いかけてくる今岡を視界に入れないように考えていた。自分に全く縁のない行事だから完全に忘れてた。

ん……バレンタイン？

そこでふと、とんでもないことを思いついてしまった。
今岡を見る。

手には大きな紙袋。

「……………まさか、とは思ったが一応訊いてみることにした。」

「なあ、ひとついいか？」

「なんだ？」

「その袋って……」

俺は紙袋を指差す。

「ん、これか……勿論チョコ貰ったら持って帰るのに困るだろう？」
予想が当たってしまった。

得意気に話す今岡に頭痛がする。

「お前……なんてことを……」

こめかみを押さえ呟く。

本当になんてことしやがるんだ……確実に恥ずかしい過去になる
に決まってるじゃないか。

「今岡」

俺は真面目な顔で今岡の名前を呼んだ。

「何だよ」

「お前、去年は何個チョコ貰えたんだ？」

「うっ……それは……」

俺の質問に声を詰まらせる。

その反応で大体理解できた。

「……………一個」

ボソツと言う今岡。

聞こえるか聞こえないかぐらいの声だったが確かに聞こえた言葉
に俺は耳を疑った。

今岡には悪いが一個も貰ってないと思っていたからだ。

一個でも貰えたなら言葉を詰まらせる必要なんてないだろ。

……だけど少し考えて分かった。分かってしまった。

何故言葉を詰まらせたのか。聞こえるか分からないぐらいの小声

だったのか。

俺は今岡に肩に手を置き、

「良かったな。良いお母さんで」

そう言っただけだ。

「な、なんでわかった!？」

凶星だったようで今岡は驚愕している。

ポンポンと今岡の肩を叩き微笑みかけておく。

そして俺はポケットに手を戻すと学校へ向かい再び歩き出した。

「ちょ、おい!　なんだよ、その暖かい眼差しは!」

今岡がなにやら叫んでいたがそれを見送る。

これ以上付き合ったら、そろそろホントに遅刻してしまう。

学校に着く。

確かに、バレンタインだと分かるといつもと少し空気が違うような気がする。

例えば下駄箱で靴を履き替えた後に何度も自分の下駄箱の中を覗いていたり、教室では意味もなく机の中をこそそこ探っている奴がいたり妙にそわそわしてる男子が多い。

女子は自分の鞆を大事そうに抱えてる子や集まって小声で話しながら目当てか知らないがイケテル感じの男子の方を見てたりする。

そんな人たちを「大変だな」と思いつつ、今までの人生でチョコなど貰ったことのない俺はいつもと変わらない気持ちで席についた。

「おい!　置いてくなんてひどいだろ!?　まだ話は終わってなかったのに!」

俺から遅れること数分、今岡が教室にやって来た。

「え、終わりじゃないのか？」

バレンタインとか興味ないし、話は終わらせたつもりだったんだけどな。

「全然だよ!!　てか本題がまだだったの!」

「……本題？」

それってなんなんだろう……想像も出来ない。なのでそのまま効き返した。

「……………ん」

俺の問いに答えるでもなくこちらに向けて手を差し出してきた。

「は？　なにがしたいんだ？」

意味が分からないぞ。

まさか……俺にチョコを渡せとでも言うのか。

「ごめん。友達……だとは思ってるけどそういうのじゃないんだ」
俺は謝った。

「違いーよっ！　お前からとか要らねえよ！」

「じゃあ、この手はなんだ？」

本当に今日のコイツはわけわからん。

「俺に渡すように預かってたりするだろ？」

「……………は？」

何を言っているのか分からずあんぐりと口を開けてしまう。

「ほら、例えば……アリサさんからとか」

ああ、そういうことね。

「残念ながらそんなモノはない」

俺は事実をそのまま簡潔に伝えた。

何を夢見てんだかね。俺も貰ってないっつーの。

……てか貰えるのかな、アリサさんから。

「なん……だと？」

なんでそんなに驚いてんだよ。

本気で貰えると思ってたのか？

「は、はは……いや、まだだ。まだ諦める時間じゃない。帰りだ。きつと自分で渡したいと思ってるに違いない」

渴いた笑い声を出した後、なにやらブツブツ呟き始める今岡。

俺はそんな今岡を再び無視して授業の準備を進めていた。

10話 (2)

朝から引くほどに高かった今岡のテンションも時間が経つにつれ、凄まじい勢いで下がっていった。わざわざ用意していた紙袋も悔しさのあまり握りつぶしてしまっていて、見るも無残な状態だった。

「畜生……ちく、しょおっ……」

机に突っ伏し、紙袋を涙で濡らす有様だった。

滑稽を通り越して哀れにすら思えてきた。

「今岡……飯食おう」

俺は今岡の肩を優しく叩く。

「……………うん」

弱々しく返事をした今岡は元氣なく立ち上がった。

「ほら、チョコはないけどアリサさん手作りの弁当分けてやるから」俺は弁当袋を掲げて今岡に見せるようにして言った。

「……………ありがとう」

今岡は嬉しいのか悲しいのか、どうにも表現しがたい複雑な顔で笑った。

今岡は普段、弁当ではない。

そうなると大抵は購買か学食で買うことになる。たまにコンビニで買ってきてることもあるけど。

学食のときは俺も弁当を持って行ってそこで食べる。購買とかのときには教室や落ち着けそうな場所を探して食べている。立ち入り禁止の屋上にも何度も行ったことがある……というか結構お気に入りだったりする。

今日は購買でパンを買い、屋上へ行くことにした。

天気も良いし、外に出れば気分も変えられるのではないかと思っただからだ。

屋上に出ると雲ひとつない晴天で、二月というのになかなかの暖

かさだった。

「よし、食べよう！ ほら、何が欲しい？ 何でも良いぞ！」

俺は元気付けるように必要以上に大きな声で弁当の蓋を開けて言った。

「……たまご焼き」

「たまご焼きな。ほかには？」

訊きながら弁当箱の蓋におかずを載せていく。

元気がないくせに全てのおかずを少しずつとっていく今岡。

図々しいと思いつつも、それを言ってしまうと余計に落ち込みそうなので我慢してそれを渡す。

「それじゃ食おう。いただきます」

そう言って手を合わせる。

「いただきます——」

「やっぱりここにいたわね！」

拜むように、アリサさんの作ったおかずが載った蓋に手を合わせようとした今岡。そのとき大きな音で扉を開け屋上にやってきた人物は俺たちを見てそう言った。

やってきたのはクラス委員長である三上さん。その後ろに隠れるようにしている伊吹さんの二人だった。

「何か用？」

俺は手に箸を持ったまま二人に問いかけた。

「探してたのよ、あんたたちを」

三上さんは俺たちの前まで歩み寄ってきて不遜な態度で言う。

「……なんだろう。」

怒られるようなことをした記憶はないが……。

「まあ探してたと言っても私じゃないけどね」

そう言って伊吹さんを前へ押し出す。

「……伊吹さん？ 伊吹さんがなんで俺たちを探すんだ？」

「あ、そうなんだ」

状況が飲み込めなくて返事が素っ気無くなってしまった。

「ほら、早く」

「う、うん」

なにやら小声でひそひそ話す三上さんと伊吹さん。
「いきなりやってきて二人で話してんじゃねーよ！ つーかチョコがないなら帰れよ！」

そんな二人を見て、なぜか今岡がキレた。

「は！？ 何よその態度！」

それに対して今度は三上さんが怒る。

「うっせーよ！ 食事の邪魔するってんならチョコぐらい持つてくんのが常識だろーがっ！」

そんな常識は聞いたことがない。

てか、それほどまでにチョコが欲しいのか。

「ふうーん。そんなこと言って良いんだあ？」

さらに怒るかと思ったが、三上さんは口の端を上げてニヤリと笑った。

「どういうことだ？」

「さあ？ どういうことかしらね」

鼻で笑う三上さん。

「もったいぶんなよ！」

「そういう態度とっちゃうんだ。じゃあもういいや。春田君」

「は、はい！？」

今岡と言いつけていた三上さんに突然呼ばれてドキッとした。

「これあげる」

そう言って渡されたのはラッピングなどしてないどころか値札までついた剥き出しの……チョコレートだった。

「……あ、ありがとう」

まさかの、人生で初めての同年代の女子からもらうチョコに顔が熱くなる。そんな中でお礼を言えた自分を褒めてもいいんじゃないかと思う。

「チョコ、チョコだと！？」

今岡は驚愕に目を見開く。

「そうだけど？　　というかバレンタインにわざわざ男子を探す理由なんてそのくらいしかないでしょ」

「お、おとお、俺、俺には！？」

「はあ？　あんな態度で貰えると思ってんの？」

維持の悪い笑みで手に持ったチ○ルチョコを見せびらかす。

「み、三上様！　先ほどは大変失礼しました。ワタクシ大変心がずさんでいましたのでなにとぞご容赦いただければと……」

なんかすごい低姿勢になった。

「ふん。そこまで言うなら恵んであげる」

今岡にチョコを渡す三上さん。

「わーい！　チ○ルだーい好きっ！」

跳ね上がって喜ぶ今岡。

「あ、あの……は、春田……くん」

「……え、あ、なに？」

今岡を生暖かく見守っていると伊吹さんに呼びかけられる。

「あ、あの……私も……これ」

そう言っただけ渡されたのは三上さんとは比べ物にならないサイズの箱だった。リボンもついていて贈り物って感じのするラッピングだった。

「え、これ？　もらっていいの？」

なんか凄くて貰うのを躊躇ってしまった。

「は、はい」

顔を真っ赤にしてうつむく伊吹さん。

「あ、ありがとう」

さっきと同じようなお礼になってしまったが何とか受け取った。

「お、俺には！？　俺にはないのか！？」

さっきまでチ○ルチョコを埋蔵金でも見つけたかのようなはしゃぎっぷりで喜んでいた今岡がいつの間にか隣にいた。

「あ、えと……今岡君の分は……あの、その……どうしよう」

段々と小声になってしまいう伊吹さん。

そんな伊吹さんに三上さんが近づいていった。
そして、

「あの……これ、どうぞ」

伊吹さんが今岡に何かを手渡した。

「って、チ○ルかよっ!？」

絶望的な表情で叫ぶ今岡。

「よかったわね。大好きなんでしょ？ チ○ル」

「うがぁ——っ!」

叫んで頭を掻き毟る今岡だった。

三上さんと伊吹さんが去った後、今岡は死んだ魚のような目をして「どうせ、俺なんか……うふふふ」とうわ言のように呟いていた。話しかけても何の反応も示さない。

もうこれはちょっとやそつとじゃ立ち直れないのではなからうか？ 立ち直らせることができるのはやはりチ○ル以外のチヨコしかないのか。

まだ午後の授業も残ってるのに、俺も今岡も帰宅部で帰り道だつて同じ方向なのに。俺はずっとこんな調子の今岡の面倒を見なければいけないのだろうか？

「助けて……アリサさん」

俺は主人を敬わない口の悪い我が家のメイドに初めて心の底から助けを求めている。

「お任せください」

ああ、幻聴まで聞こえて——

「ってアリサさん!？」

隣を見るとアリサさんがそこにいた。いつも通りのメイド服で。

「はい。アリサです」

「なぜここに!？」

「求められれば現れる。それがメイドです」

「そ、そうなんだ」

真顔で断言するアリサさんに俺はそう言うことしかできなかった。
俺との会話を終え、今岡に近づいていくアリサさん。

「今岡さん」

「あ、アリサさん!？」

死んだ魚のような目だった今岡の瞳に光が宿った。

「これ、宜しければお受け取りください」

差し出したのはなかなか大きな包み。

それは店でしてもらうよりも遥かに綺麗にラッピングされていた。

「バレンタインのチョコです」

受け取った今岡にそう告げるアリサさん。

「……………」

無言で受け取った包みを見る今岡。プルプル震えていた。

「よっしゃあ——っ!」

いきなり叫ぶ今岡にちよっとびっくりした。

「ありがとうアリサさん! 一生の宝物にします!」

アリサさんの手を両手で包み宣言する。

「い、いえ……出来れば食べてください」

「とんでもないっ!」

「は、はあ……」

おお、アリサさんがうろたえている。

「早速帰って嚴重に保管しなければ——というわけで俺は帰る。じ
やっ!」

そう言って走り去っていく今岡。

「……まだ授業あるんだけど」

俺はその背中を見つめてそう呟くことしか出来なかった。

ちなみに——夕食後。

「樹様」

「なに？」

「これを差し上げます」

差し出されるのは今岡に渡したような包み。

「これって……チョコ？」

「はい」

「ありがとう」

俺は受け取ってお礼を言った。

中身はチ○ルサイズのハートのチョコがいろんな種類のチョコで作られたセットになっていた。

11話 春休み

部屋のベッドの上、制服のまま寝転んで雑誌を眺める。

「うーん……気のせいかな……でもやっぱ似てるよなあ？」

表紙を飾る人物を見て呟く。

今日、学校は終業式だった。

高校一年の最後の日。明日からの春休みを挟んで俺は高校二年生になる。

下校中、用事があると言う今岡と別れ、一人で歩いていた。

その途中、一見の古本屋が目に入った。いつも目には入っていたが立ち寄ったことのない古本屋。何かを買おうと思ったわけじゃない。本当に何気なく、俺はその店内に初めて足を踏み入れた。

個人店であるその店は大手の古本屋とは違い、小ぢんまりとしていた。

メインの商品も漫画とかではなく本当の古本とでも言うのか、歴史を感じるものが多数だった。

一通り見て回っていたところ平積みになれた一冊の本が目にとまった。

それは小説でも漫画でも歴史書でもなく、一冊の雑誌だった。

俺は考えるよりも早くその雑誌を手にとって会計を済ませたのだった。

そして家に帰り部屋のベッドでまじまじとその表紙を眺める。

雑誌は女性物のファッション誌。

俺が見るようなものじゃないし、俺も興味はない。

それなのになぜ買ってしまったのかといえば――

「やっぱり、どこことなくアリサさんに似てる」

表紙を飾るモデルさんが家のメイドであるアリサさんに似ていた

からだった。

だけどこれがアリサさんであるはずがない。

「二十年前……か」

雑誌の刊行日は今から二十年近く前の日付。

それはアリサさんが生まれる前の物だ。そんな物にアリサさんが移っているわけがない。

だとすると……たまたまそっくりな人だったってことか。

そう納得して、雑誌を本棚にしまった。

夕食、ちょうど俺もアリサさんも食べ終わった頃、机の上に置いた携帯がブブブと鳴った。

そう言えば学校でマナーモードにしてからそのままだったな、と思いつながら携帯を開く。

メールではなく着信だった。

相手は母さん。

その名前を見て俺は緊張した。

はつきり言って俺は母さんとあまり話したことがない。

父さんと母さんが再婚してから俺は父さんと二人で暮らしていたし、母さんは世界中を飛び回っていて会うことさえほとんどなかったからだ。

こんな風に携帯に連絡が来るのだって初めてのことだった。

電話に出るのを躊躇してしまう。が、もしかしたら父さんに何かあったのかもしれない。

そう思って、俺は通話ボタンを押した。

「……………はい、樹ですけど」

言ってから『しまった』と思った。

携帯なんだからわざわざ自分の名前なんか言う必要ないんだった。俺の携帯に掛けてきてるんだから俺が出るのなんて言わなくても当たり前なのに……誰かから携帯に掛かってくることなんかほとん

どないし普通に言ってしまった。

『あ、樹君?』

「……はい」

電話越しに聞こえる若々しい声。

母さんはとても若い。声だけじゃなく見た目も。

見た目は二十代にしか見えない。とても面と向かって母さんなんて呼べない。

『突然で悪いんだけど……』

「何ですか?」

『今からそっち行くから!』

「へ? って、ちょ、あの――」

『プー……プー……プー……』

母さんはそれだけ言って一方的に通話を切った。

そして――

『ピンポーン』

と呼び鈴が鳴った。

アリサさんが玄関へ向かっていった。

今からそっち行くから……今から行くから……行くから……まさかっ!

俺はアリサさんを追って玄関へ走った。

そこには、

「やつほー樹君。久しぶり〜」

予想したとおり、俺に向かって笑顔で手を振る母さんがいたのだ。つた。

アリサさんが母さんをリビングまで案内し、俺も後に続いて歩く。リビングに着くとすぐにアリサさんはお茶の準備をするために台所へ行った。

「急に来ちゃってごめんね」

荷物を置いて座りながら言う母さん。

「別にいいけど……」

俺も母さんの向かい側に座る。

「ほんと久しぶりだね。前にあったのはお父さんと結婚してすぐだっけ？」

「ええっと……確かそうです」

母さんは忙しく色んなところを飛び回ってるので会えることは少ない。それもあって人見知りの激しい俺は母さんと自然に対することはまだ出来ない。

「そうだよ。樹君、前に会ったときより大きくなった？」

「えっ、ほんとですか!？」

「うんうん、男の子らしくなったよ」

そうなのかな……最近身長測ってないけどもしかして伸びてるのかな。

「それで、この家はどう？」

「あ、はい……何かこんな広いところありがとうございます」

俺は今まで言うことが出来なかったお礼を言った。

「ううん、いいんだよ。このぐらいのことしか出来ないし」

母さんは申し訳なさそうに言う。

「いや、全然そんなことは……」

「あはは……そんなフォローしなくていいよ。実際親らしいことなんて樹君にしてあげれてないからね。親失格だね私」

「……………」

自虐的な笑みを浮かべる母さんにかける言葉も見つからない。

「お茶お持ちしました」

そんな重苦しいタイミングでアリサさんがお茶を運んできた。

「ありがと」

母さんは表情をパツと変えてアリサさんからお茶を受け取った。

「では私は部屋に居ますので何かありましたらお呼びください」

俺の前にお茶を置いたアリサさんはそう言ってリビングから出て

行こうとしていた。俺と母さんが久しぶりに会ったってことで氣を使ってくれたんだと思う。でも――

「一緒に話しましょう？」

それは母さんによって止められた。

母さんはアリサさんを俺の隣に座らせた。

「樹君、この子はどう？」

「どうって……何がですか？」

質問の意味が分からなかった。

「ちゃんとやってる？ 迷惑かけてない？」

ああ、メイドとしてどうなのかってことか。アリサさんは母さんが雇ってるらしいし心配だったのかな。

「全然迷惑なんて……凄く助かってます」

俺は思うまま口にした。

最初はどう追い出そうかなんて考えていた俺も、今ではアリサさんが居ない生活なんて怖くて想像も出来ないししたくもない。

「そっか……ならいいんだ」

母さんはアリサさんを優しく眼差しで見つめていた。

そういえば……この二人ってどんな知り合いなんだろう？

それも氣になるけど一番氣になってることを訊いてみよう。

「それで……今日は一人なの？ 父さんは？」

氣になっていることとは家に来たのが母さん一人だけだったということだ。

これは本当に父さんに何かあったのか。でなければ仕事を辞めてまで母さんのところに行った父さんが母さんと離れるわけがない。

「………知らない、あんな人」

それを訊いたとたん母さんは不機嫌そうにそっぽを向いた。

これはひょっとして……喧嘩でもしたのか。

俺はまた厄介な事になりそうだと内心やれやれとため息を吐くのだった。

11話 (2)

結論から言えば、夫婦喧嘩だった。

原因はほんの些細なことだったらしい。今まで母さんたちは喧嘩などしたことがないらしく止め時も分からずにズルズルと引き摺って、遂には飛び出してきてしまった……ということだ。

「ってわけで……暫く泊めてねっ」

舌を出してウィンクする母さん。

とても母親とは思えないから困る。

「まあ、それはいいですけど……」

泊めるのは別に構わない。元々母さんが買った家だしね。

「でもどこの部屋に泊まるの？」

空き部屋って……あるけど布団とかあるのかなあ？

「それは勿論、樹君の部屋に――」

「駄目ですっ！」

母さんの言葉を叫んで遮る。

全く、何を言い出すんだこの人は。

「え……一緒に布団で寝ようよ」

「絶対駄目！」

同じ部屋でも駄目だったのになんてことを言うんだよ……。

「だって樹君と親子っぽいことしたいもん」

もん、じゃないよ、もん、じゃ。

大体……

「それは全然親子っぽくない。てか小さい子なら分かるけど俺はもう高校生だからっ！」

そんなもん本当の母親と違って断るよ！

「どうしても、だめ？」

上目遣い&涙目で見上げてくる義母。息子に対してなんつゝ母親だと思わなくもないが、その仕草が様になってるのがなんとも言え

ない。

「駄目！　だよね、アリサさん！？」

助けを求めるようにアリサさんに話をふる。

「そうですね。止めたほうがいいと思います」

「ぶー。アリサちゃんまでそんな事言うのー？」

頬を膨らませて『私、不機嫌です』と言わんばかりにアピールする母さん。

「はい。申し上げますが……無理に同じ布団で寝ようとすれば嫌われますよ？」

「……………え？」

その言葉にキョトンとする母さん。

「……………っ！？」

そして今度は絶望的なものにその表情を変化させた。

「樹君……ほんと？」

「え、ええ、まあ、そうですね」

ちよつと罪悪感が芽生えるが、ここで折れてしまうと一緒の布団で一晩過ごすことになってしまうので、何とか罪悪感を振り払って答える。

「そっか……わかった。嫌われたくないから一緒に寝ない」

見るからにシュンと落ち込んでしまう母さん。

が、次の瞬間にはパァツと表情を輝かせた。

「それじゃ、アリサちゃんのお部屋に泊めてもらおっかな！」

「は？」

「え？」

続く母さんの言葉に俺とアリサさんが同時に声を上げた。

俺は純粹に何でアリサさんの部屋に泊まるのか分からなくて。アリサさんを見れば困ったような戸惑いの表情。

アリサさんは母さんに雇われているわけだから何かあるのか？

「じゃ、けってーい！　早速行くよー！」

「え、あの……」

母さんはアリサさんを引き摺ってアリサさんの部屋へ向かった。
った。

「……………ふう」

俺はそれを見送ってお茶を一口飲み、思った。
あんなアリサさんは初めて見た。なんかあれはあれで新鮮だなあ、
と。

ピルルル——

部屋のドアが閉まる音が聞こえたタイミングで携帯が鳴り出した。
取り出してディスプレイを確認してみると、そこには父さんの名前。

「……………もしもし」

通話ボタンを押して耳に当てる。

『もしもしっ!!』

焦った父さんの声に思わず携帯を耳から離す。

「……………つーか声でかいんだけど」

耳がキーンとする。

俺は自分で思っていたよりも不機嫌そうな声を出してしまった。

『お、おう、すまないな』

父さんは謝罪してくる。

「で、なに？」

理由は分かるけど一応訊く。

『ああ……………母さんなんだが……………知らないか？』

言い難そうにそう言う。

でも父さん……………焦ってるのは分かるけどさ、俺は理由知ってるからそれでも理解できるけど、普通その言い方じゃ何がなんだか分からないと思うぞ。

「母さんがどうしたの？」

『その、な。……………喧嘩しちゃってな』

ははは、と力無く笑う父さん。

「ふーん……じゃあ、謝れば？」

正直、今謝っても許してくれる可能性は低いと思うけど一応助言してみる。

『そうだな。……うん。謝ってみるよ。じゃ』

そう言っつて父さんは一方的に通話を切った。

「……………はあ」

俺はため息を吐いて携帯を折りたたむ。

二人には仲直りして欲しいけど……どうだろうな。父さんの謝り方次第かな。

そんなことを考えていると――

『プルルルルッ』

と、また携帯が鳴り出した。

相手は勿論父さん。

「……………なに？」

『……………』

電話に出てみても父さんは無言。

「もしもし？」

もう一度話しかけてみる。

『……………てた』

震える小さな声だったため、よく聞き取れなかった。

「……………なに？」

『着信拒否されてた!!』

突然の大声。

俺は再び携帯を耳から話した。

てか着信拒否かよ……母さん、よっぽど怒ってるのか？

「まあ、喧嘩したばかりで話したくないだけかもしれないし、少し時間置いてみたらどう？」

その間、母さんはウチに居ることになるだろうけど、会ったこと

が少ないから緊張はするけど別に嫌ではないし。

『時間か……三十分ぐらいでいいだろうか?』

「短いよっ!」

『そ、そうか? なら……一時間ぐらいか?』

「だから短いって! 最低でも一日は待とうよ。出来れば数日ぐらいの方がいいけどね」

『そ、そんなにっ!?』

「うん」

『そ、そんなに……かあ……。うん。でも仕方ないよな』

なんか電話越しでも分かるぐらい絶望的な声なんですけど。

「ちなみに……父さん今ドコに居るの?」

電話越しに電車と駅っぽいアナウンスが聞こえてくるので、ちょっと気になって訊いてみた。

『ん? ……おお、駅だ、駅』

「駅……って、まさか!」

『ああ。お前の家の近くのだ』

「行動早すぎだろ! てか何でウチに!」

『いや、何故かお前の家に母さんが居る気がしてな』

なっ、なんつー勘してやがる……っ!

このままここに来られても迷惑だし、多分喧嘩も拗れるだけだよな……。

なら――

「いや、実はさ……母さんウチに居るんだけど」

俺は父さんに教えることにした。

『なっ!? おま、それ早く言えよ!』

「言っでどうするんだよ……」

『そりゃ会いに行くに決まってるだろ! 今から行くからな!』

「バツ! 時間置いた方がいいって言っただろ!? 来たって追い出されるのがオチだって!!」

『じゃあ、どうすればいいって言うんだ!?』

息子に逆ギレすんな！

「だから……時間置けて。話せそうだったら連絡入れるから」
とりあえず妥協案を出す。

「というか今はこれしかない。」

『むう……だが……』

「だが、じゃない！ 今会っても余計意地になって話せなくなるだけだって！」

『そ、そうか……分かった』

「んじゃ、どっかホテルにでも泊まって。こっちから連絡するまでウチに来たりしないですよ？」

『わかった。絶対……絶対連絡しろよ！？』

「わかってるよ。するから大丈夫だって！ じゃーね！」

そこで俺は通話を切って携帯を折りたたんだ。

父さんとの電話を終え、自室へ戻ろうとする途中、アリサさんの部屋からキヤイキヤイと騒ぐ声が聞こえてきた。

ちよつとその部屋の方を見てみると、扉が閉まりきっていないのか廊下に微かに光が漏れていた。

そして、気になった俺はその部屋に近づき——中を覗いてしまった。

そこでは——

「ちよ、ちよつと！ 部屋を物色しないで！」

焦っているのか、いつもと違う碎けた口調で部屋を荒らす母さんを止めようとするアリサさん。

「あつれえ〜？ 樹君の入った痕跡がないなあ？」

「そんなのあるわけ——」

「え〜？ これだけ一緒に住んでて何もないの？」

「ないからっ！」

「とっくにくつついてると思ったのに……。これじゃ何のために貴

方を樹君のところにやったのか」

好き勝手言っている母さん。

というか、なんか聞き捨てならないことを聞いたような気がするが、そんなの気にしていられないぐらい俺は混乱していた。

「あ、そこが怪しい！」

「怪しくない！」

クローゼットを開けようとする母さんを必死に止めるアリサさん。

「む……………それっ！」

「あっ！」

母さんがベッドの枕元に置いてあった熊の人形を放り投げた。アリサさんは焦ったようにそれを受け止める。

その隙に母さんはクローゼットに手を――

「……………え？」

「……………あっ」

かけようとしたところで、覗いていた俺とアリサさんの目が合ってしまった。

「い、樹君？」

なんか引きつった表情で笑う母さん。

「な、なんで……」

震える声でアリサさんが俺に向かって呟く。

「え、えーっと、その……………なんでここに居るのかといいますと、声が聞こえて、ドアが微妙に開いていたからでして」

俺はしどろもどろになりながら必死に状況を説明する。

「な、な、なな――」

アリサさんは泣きそうな顔で言葉を発せない。

「いや、あの……………わざとじゃなくて……………その……………可愛い部屋ですわ？」

と、ぬいぐるみだらけの部屋を見て、俺は空気の読めないことを言ってしまったのだ。

「イー――」

アリサさんは持っていた熊のぬいぐるみを落とし、

「イヤァ――――ッ!!」

俺を突き飛ばして走り去ってしまったのだった。

「……………」

俺は尻餅をついて呆然としていた。

「……あっちゃあ」

母さんは「やっちゃまった」ってな感じで額を押さえていた。

11話 (2) (後書き)

更新遅れて申し訳ありませんでした！
これから少しずつでもいつものペースに戻るよう頑張ります。

11話 (3)

「忘れなさい」

アリサさんが飛び出していった、安心していた俺に言い放った母さんの最初の言葉がそれだった。

「忘れろ……って？」

「そのままの意味。今日の事は忘れてあげて」
命令ではなくお願い。

「忘れるも何も……別に変なことないんじゃない？　可愛い物好きとかだって、アリサさん十六歳だし」

いつも完璧で冷静なアリサさんにこんな一面があっても良いんじゃないだろうか。やべ……アリサさんがさっきの熊のぬいぐるみを抱きしめながら寝てるところを想像してしまった。

超可愛いんですけど。

「あの子はね……恥ずかしがりやなの」

「……………はい？」

母さんの言葉が信じられなかった。

恥ずかしがりや……って、あのアリサさんが？

「信じられないでしょうけど本当なの。あの子の事だから樹君の前じゃそうは見えないように振舞ってたんでしょうけどね」

そう言われてもやっぱり信じられない。

それが本当だとすると、普段の無表情は恥ずかしいのを我慢してるからってことなのか？

「そう言えば……さっき母さんと話してた声が廊下まで聞こえてたけど、母さんとアリサさんでどういう関係なの？　アリサさんが随分碎けた口調だったし。てかアリサさんって何者なの？　普通ならメイドなんてやってないで学校行ってる年齢でしょ」

今までの疑問を全て母さんにぶつける。

「学校は……あの子、海外で大学卒業してるから」

「……………へ、へえ、そうなんだ」

今更そんなことで驚かない。

アリサさんならそれぐらいありえると思ってたもん。

「あの子との関係は……まあ、気付いてると思うけどただの雇い雇われの関係じゃないわ」

「うん」

雇い主にあの話し方はしないだろう。アリサさんなら尚更だ。

それ以上の関係なのは言われなくても気付く。あとは、それがどういった関係なのか、ということだけだ。

「でも、それは私の口からは言えないわ。どうしても知りたければアリサちゃんに訊いてね。答えてくれるとは思えないけど……。それに、多分いつか自分から言ってくれると思うわよ。いつまでも今のままじゃいられないんだし」

意味深なことを言う母さん。

俺はそれ以上訊くことが出来なかった。

「そういう訳で、今日の事は忘れてあげるのが良いと思うんだ」
暫くして軽い調子に戻った母さんが言った。

いや……さすがに忘れるのは無理。

アリサさんの部屋があんなに可愛いとか……絶対忘れられないインパクトがあった。

「忘れられないと思うんだけど……」

俺は思ったことをそのまま言ってみた。

「それでも！　せめて忘れたようにして今まで通りにしてあげて」

「今まで通り……って、別にあのぐらいでアリサさんに対してなんかあるわけじゃないけど」

別に今まで通りだろ。

ただ今までみたいに冷静に冷酷にひどい事言われてもあの部屋を

思い出すとそんなに傷つかなくなるんじゃないか、とは思うけど。

「それならいいんだけどね。まあ、とにかく、今はアリサちゃん探しに行ったほうがいいんじゃない？」

「あつ、そうだ！ どこ行っただろう」

とにかく探して話してみないと……このまま出て行っちゃうかなったら俺これから生きてけないし。

それは夏休みに体験して分かってる。

俺、なんだかんだ言いつつアリサさんがいないとまともに生活出来ない。

「そ、それじゃあ探してくる！」

俺は急いで家を出た。

「いってらっしゃい」

母さんのそんな軽い感じの声を聞きながら。

「マジで、ドコ行っちゃったんだよ……アリサさん」

家の周辺を隈なく探したが、アリサさんを見つけることは出来なかった。

「この辺には……居ないのか」

なら商店街に行ってみよう！

そう思って、俺は商店街へ走った。

「あの、アリサさん、見ませんでした？」

息を切らしながら八百屋のおじさんに尋ねる。

「いや、今日は見てないな」

「……そうですか」

「アリサちゃんがどうかしたのかい？」

八百屋のおじさんが興味深そうに訊いてくる。

「いえ、それが……ちょっとした行き違いがありまして、家飛び出しちゃったんです」

詳しくは話せないものでそれっぽく言い訳する。

「なん……だと……」

八百屋はショックを受けたように呟く。

漫画なら確実に劇画調になってるぐらいの悲壮感が漂っていた。

「つまり何かい？ このままだとアリサちゃんがこの町からいなくなるってことかい？」

「ええっと……まあ、もし出て行っちゃったらそうなります、ね」

「バツカヤロウ！」

八百屋は叫ぶと店の奥に入ってしまった。

「おう、おめえら、今すぐアリサちゃんを探せ！」

電話片手にすぐに出てきた。

「理由？ このままじゃアリサちゃんがこの町からいなくなるんだとよ！」

一体誰に電話してるんだろうか……。

「あ、あの……」

おずおずと話しかける。

「ん？ おい、お前……」

「は、はい、なんでしよう？」

「電話番号は」

「……………え？」

「携帯の番号教えろってんだ！」

「は、はいい！」

俺はすぐに携帯を取り出し、教える。

「……………だ！ 見つけたらすぐにそこに連絡しろ！」

そう言って電話を乱暴に切った。

「おい、お前ら！」

「ひいっ!？」

今度は背後から大きな声が聞こえた。

振り向くと、

「今の話は聞いたな!? お前らも死ぬ気で探しやがれっ!」

「はいっ！」

集まった男達の前に立ち、支持するおっさん。

商店街の法被を着た厳ついおっさん。

おっさんに支持された若い男達が全員が声を揃えて返事をする。

「商店街青年団の名にかけて意地でも探し出せ！」

「うおおおおおっ！」

その一言でちりじりに走り出す青年団。

「うちも倅に車出させたよ！」

「駐在さんも探してくれるって」

商店街の人たちが皆八百屋に集まってきた。

中にはお客さんの姿もある。

「私も帰りに探しながら帰ってみるわ」

「私も」

「坊主、元気だしなさい。ほら、飴をあげよう」

「うちの息子は部活の練習で町中走ってるから連絡しといたわ」

お客さんもそんなことを言う。

なんか飴くれた婆さんいたけど。

「な、なんで……みんなが……」

俺が驚いていると、

「バッカヤロウ！ アリサちゃんはこの商店街のアイドルだ！ そのアリサちゃんの一大事とあっちゃあ、この商店街全員が味方だぜ！」

おっさんが誇らしげに叫ぶ。

アリサさん……こんなに人気あったのか。

まあ、外面の良さは凄かったからな。

美人だし、アイドルってのも分かるけど……まさかここまでとは。

「あ、ありがとうございます！」

「いいってことよ！」

お礼を言うと肩をバシバシ叩かれた。

地味に痛かった。

「じゃあ、俺も探しに行ってきます!」

「おう、見つけたらお前の携帯に連絡するからな!」
「はいっ!」

俺はアリサさんを探すため、再び走り出した。

11話 (3) (後書き)

お久しぶりです。

久しぶりすぎてヤバイです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0296h/>

庭付き一戸建てメイド付き

2011年6月10日23時43分発行